

# ほ場整備関係遺跡発掘調査報告書

VII—I

1980

滋賀県教育委員会  
監修 滋賀県文化財保護協会

## はじめに

県下のほ場整備事業に伴う発掘調査も、新たな展開として蒲生、神崎郡が加わり、調査件数が増大しつつある。同時に新たな資料の増加は、調査結果をまとめ、社会に還元する作業というか、義務の遂行が困難さを増してきた。しかし整理の結果は、遺跡の所在する各々の地域はもちろん、県内において、今後、近江の生き立ちを考えるうえで重要な課題を提示するものが多くあった。

本報告書の作成にあたって、調査から整理までの一貫の作業の中で、地元教育委員会、地元住民、先生諸氏、学生諸君の絶大な指導、助言、援助を得た。ここに記して謝意を表したい。

昭和55年3月

滋賀県教育委員会  
文化財保護課  
課長 沢 悠光

## 例　　言

1. 本報告書は、昭和54年度国庫補助事業対象となった、団体営は場整備事業に伴う埋蔵文化財発掘調査のうち、湖西地区（高島郡）の調査成果を収載したものである。
  2. 調査にあたっては、地元マキノ町、今津町、新旭町の役場、教育委員会、今津県事務所をはじめ、マキノ町海津、上開田、北牧野、南牧野、今津町岸脇、梅原、下弘部、弘川、新旭町針江の方々から種々の協力を得た。
  3. 現地調査は、本県教育委員会文化財保護課技師丸山竜平、同兼康保明を担当者とし、財団法人滋賀県文化財保護協会嘱託久米雅雄（現大阪府教育委員会）、同本田修平（現彦根市教育委員会）を主任調査員に得て実施した。また、針江遺跡については、新旭町教育委員会社会教育課主事岡司高志氏にお願いした。
  4. 調査に協力を得た諸氏については、各遺跡ごとに記した。厚く感謝の意を表する次第である。
  5. 本報告書は、兼康保明が編集し、図版作成、レイアウト、校正、遺物写真等で、山口順子（滋賀県埋蔵文化財センター嘱託）、堀内宏司、岩福滋の諸氏の多大なる協力を得た。
- また、各章の文責は、目次に明記した。

目次

<b>第1章 高島郡マキノ町海津遺跡</b>	兼康保明・久米雅雄・山口順子・堀内宏司	
1. はじめに	(兼康) 1	
2. 調査の経過	(兼康) 2	
3. 調査の結果	(久米・堀内) 2	
4. 出土遺物	(兼康・山口) 4	
(1)土器	(2)木製品	
5. 結び	(兼康) 8	
<b>第2章 高島郡マキノ町上開田遺跡</b>	兼康保明・本田修平・堀内宏司	
1. はじめに	(兼康) 9	
2. 位置と環境	(兼康) 10	
3. 調査の経過	(兼康) 10	
4. 調査の結果	(本田・兼康) 12	
5. 出土遺物	(堀内) 17	
(1)縄文式土器	(2)古墳時代～歴史時代の遺物	(3)小結
6. まとめ	(兼康) 23	
<b>第3章 高島郡マキノ町南牧野遺跡(事業名 北牧野遺跡)</b>	兼康保明・久米雅雄	
1. はじめに	(兼康) 30	
2. 調査の経過	(兼康) 30	
3. 歴史的環境	(兼康) 30	
4. 調査の結果	(久米・兼康) 33	
(1)北牧野遺跡の調査	(2)南牧野遺跡の調査	(3)南牧野遺跡・遺構小結
5. 出土遺物	(兼康) 37	
(1)土師器・土師質土器	(2)陶磁器	(3)瓦質土器
(4)石製品	(5)金属製品	(6)遺物小結
6. 要説	(兼康) 40	
<b>第4章 高島郡今津町岸脇遺跡(事業名 心妙寺遺跡)</b>	兼康保明・山口順子・堀内宏司	
1. はじめに	(兼康) 46	

2. 位置と環境	(兼康)	46
3. 調査の経過	(兼康)	47
4. 調査の結果	(山口・兼康)	47
(1)湿気抜き (2)溝状遺構 (3)第15、19、29トレンチの調査 (4)塚状遺構(「首塚」)		
5. 出土遺物	(堀内・兼康)	55
6. 結 び	(兼康)	58
<b>第5章 高島郡今津町梅ヶ原遺跡</b>		丸山竜平
1. はじめに		60
2. 位置と環境		60
3. 調査の経過		60
4. 調査の結果		61
<b>第6章 高島郡今津町弘川遺跡</b>		山口順子
1. 弘川遺跡の概要		64
2. 位 置		64
3. 調査の経過		64
4. 遺 構		66
<b>第7章 高島郡新旭町針江遺跡</b>		図司高志・神谷友和
1. はじめに	(図司)	70
2. 調査の経過	(図司)	70
3. 調査の結果	(図司)	70
4. 出土遺物	(神谷)	73
(1)壺形土器 (2)變形土器 (3)鉢形土器 (4)高杯形土器 (5)器台形土器 (6)蓋形土器・その他		
5. おわりに	(図司)	77

## 図版目次

### 高島郡マキノ町海津遺跡

図版1 遺跡全景（北東より）・遺跡全景（北東より海岸を望む）

図版2 Cトレンチ南壁面・トレンチ樹木出土状況

図版3 出土木製品（1～5）

図版4 出土木製品・出土土器

### 高島郡マキノ町上開田遺跡

図版5 遺跡全景（北より）・第20トレンチ調査状況

図版6 第16トレンチ全景（西より）・第41トレンチ・焼土塙（南西より）

図版7 第21トレンチ全景（東より）

図版8 第21トレンチ・土坑2～4（北より）・第21トレンチ・土坑1（北東より）

図版9 第40トレンチ全景（西より）・第21トレンチ南東部全景（東より）

図版10 第20トレンチ下層堆積状況・

左第20トレンチ打製石斧出土状況 右第20トレンチ縄文式土器出土状況

図版11 1.第20トレンチ出土・縄文式土器・2.第20トレンチ出土・縄文式土器

図版12 3.第20トレンチ出土・縄文式土器・4.第20トレンチ出土・縄文式土器

図版13 須恵器・磁器・陶器・土塙出土・須恵器

図版14 土師質土器・皿・瓦質土器・土師質土器・羽釜

### 高島郡マキノ町南牧野遺跡

図版15 南牧野遺跡全景（北より）・Gトレンチ全景（西より）

図版16 Jトレンチ全景（北より）・Jトレンチ・SK3（東より）

図版17 Hトレンチ上層全景（南より）・Hトレンチ下層全景（北より）

図版18 いトレンチ自然流路検出状況（東より）・同（南より）

図版19 1.土師質土器・陶磁器・2.陶器・瓦質土器

### 高島郡今津町岸脇遺跡

図版20 岸脇遺跡より箱館山を望む（調査前）・首塙（調査前）・

湿度抜き（第30トレンチ）

図版21 第29・19トレンチ全景（東より）・第19・15トレンチ全景（東より）

図版22 第Ⅰ次調査・溝状遺構検出状況（西より）・同（東より）

図版23 第Ⅱ次調査・溝状遺構検出状況（西より）・同（東より）

図版24 第17トレンチ土坑・石検出状況（西より）・

第17トレンチ土坑・調査終了後の状況（西より）

図版25 首塙・表土除去後の状況（東より）・首塙・調査終了後の状況（東より）

図版26 1.出土土器・2出土土器、その他

図版27 須恵器（15・17）、土師器（14）、青磁（20）・首塚出土五輪塔残欠

**高島郡今津町梅ヶ原遺跡**

図版28 1.第5～1試掘場調査状況、山裾右端の森は弓削八幡宮、背後の集落  
は梅原・2.第28試掘場

図版29 1.第28試掘場、海津大崎、竹生島を望む・2.第5試掘場、清検出状況  
**高島郡今津町弘川遺跡**

図版30 調査地区遠景（東より）・堅穴住居1～3

図版31 堅穴住居4・堅穴住居5

図版32 第6トレンチ全景（西より）・第12トレンチ掘立柱建物1・2（東より）

**高島郡新旭町針江遺跡**

図版33 調査地区遠景（北より）・第1トレンチ 第2ブロック（南より）

図版34 第2ブロック土層堆積状況・第2ブロック土器出土状況

図版35 出土土器①

図版36 出土土器②

図版37 出土土器③

図版38 出土土器④

図版39 出土土器⑤

図版40 出土土器⑥

図版41 出土土器⑦

図版42 出土土器⑧

図版43 出土土器⑨

図版44 出土土器⑩

図版45 出土土器⑪

図版46 出土土器⑫

## 挿 図 目 次

### 高島郡マキノ町海津遺跡

第1図 遺跡位置図	1
第2図 トレンチ配置図	3
第3図 出土土器実測図	4
第4図 トレンチ土層図	5
第5図 出土木製品実測図	6
第6図 用途不明木製品実測図	7

### 高島郡マキノ町上開田遺跡

第1図 遺跡位置図	9
第2図 トレンチ配置図(1)	10
第3図 トレンチ配置図(2)	11
第4図 第16トレンチ遺構実測図	12
第5図 第21・第40トレンチ土層図	13
第6図 土坑及び土塙墓実測図	14
第7図 第21トレンチ遺構実測図	15
第8図 第41トレンチ・焼土塙実測図	16
第9図 第40トレンチ遺構実測図	16
第10図 繩文式土器実測図	18
第11図 繩文式土器・須恵器実測図	19
第12図 中世土器実測図	20

### 高島郡マキノ町南牧野遺跡

第1図 遺跡位置図	31
第2図 トレンチ配置図	32
第3図 G・H・I・Jトレンチ配置図	33
第4図 Gトレンチ平面図	34
第5図 J・G・Hトレンチ土層図	34
第6図 Hトレンチ平面図	35
第7図 Jトレンチ平面図	36
第8図 南牧野遺跡出土土器実測図	38
第9図 Hトレンチ出土砥石・煙管実測図	39

### 高島郡今津町岸脇遺跡

第1図 遺跡位置図	46
-----------	----

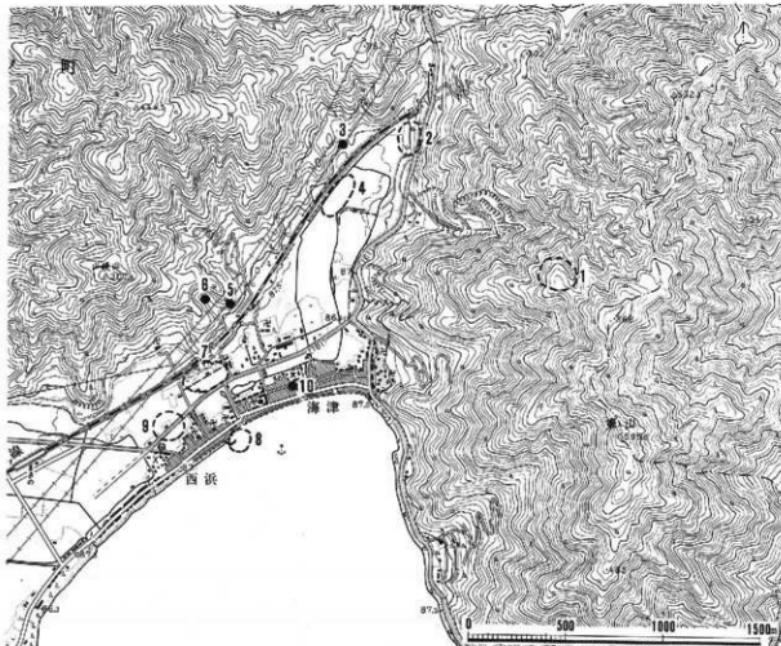
第2図 岸脇遺跡トレンチ配置図	48
第3図 「湿気抜き」平面図	49
第4図 溝状造構平面図	50
第5図 第22・25・28トレンチ土層図	51
第6図 第17トレンチ土坑実測図	51
第7図 第15・19・29トレンチ土坑実測図	52
第8図 第15・19・29トレンチ平面図	53
第9図 首塚平面図及び断面図	54
第10図 五輪塔実測図	56
第11図 出土遺物実測図	57
第12図 Cトレンチ出土寛永通宝	58
<b>高島郡今津町梅ヶ原遺跡</b>	
第1図 遺跡位置図	61
第2図 梅ヶ原遺跡試掘坑配置図	62
<b>高島郡今津町弘川遺跡</b>	
第1図 遺跡位置図	64
第2図 弘川遺跡トレンチ配置図	65
第3図 第12・16トレンチ平面図	66
第4図 第25・27拡張トレンチ平面図	67
第5図 第19トレンチ平面図	68
第6図 第6トレンチ平面図	68
<b>高島郡新旭町針江遺跡</b>	
第1図 遺跡位置図	71
第2図 トレンチ配置図	72
第3図 トレンチ土層図	73
第4図 ミニチュア土器実測図	76
第5図 土器実測図(1)	79
第6図 土器実測図(2)	80
第7図 土器実測図(3)	81
第8図 土器実測図(4)	82
第9図 土器実測図(5)	83
第10図 土器実測図(6)	84
第11図 土器実測図(7)	85
第12図 土器実測図(8)	86
第13図 土器実測図(9)	87

## 第1章 高島郡マキノ町海津遺跡

# 1 はじめに

本報告は、高島郡マキノ町所在海津遺跡についての、昭和54年度に実施したは場整備事業に伴う発掘調査の結果をまとめたものである。

本遺跡を調査する端緒となったのは、国鉄湖西線の海津トンネルの南西、国道303号線に挟まれた山裾で鉄滓が採集されており、製鉄遺跡の可能性が指摘されていたことからである。マキノ町は周知のように、北牧野遺跡、白谷遺跡、小荒路遺跡など製鉄遺跡の集中する地域の一つとして重視されてきた。そこで、今回のは場整備が鉄滓散布地に近接することから、遺跡の広がりを明確にし、遺構が検出された場合は適切な保存処置を講じるため確認調査が必要となった。また、海津の地は古代以来、北陸と近畿を結ぶ水陸の交通の要衝としてしばしば記録にもあらわれている。ことに中、近世の海津は、七里半越えで貢賈へ、あるいは湖上を大津方面に向うターミナルとして栄えてきた。そうした点についても、かつての町の規模を明確に示す資料が少ないとから、考古学的に現在の集落の周辺部を試掘し、港町海津の往時の姿を把握する必要があった。今回の調査地点は、そうした意味では集落より離れてはいるが、地元では七里半越えに沿ってあったという藏屋敷跡の伝承地をも含んでおり、また地形的にも海津の北端にあたることなどから、十分調査の対象となりうるものであった。



第1図 遺跡位置図

## 2 調査の経過

調査は、滋賀県教育委員会文化財保護課技師兼康保明を担当者とし、現地調査は滋賀県文化財保護協会嘱託久米雅雄（現大阪府教育委員会）を主任に、昭和54年4月3日から5日まで実施した。調査の方法は、谷の地形を模式的に補えることのできる、国鉄湖西線沿いの水田（は場整備後の水路にあたる部分）をバックホウで順次試掘して行った。その結果、少量の遺物は含むものの遺構の無いことが確認されたため、調査を打切った。

なお調査にあたっては、マキノ町教育委員会、マキノ町土地改良課、地元海津の方々から援助を得た。また、調査・整理にあたっては、瀬内宏司、越出住代子、山口順子、米田実、川南隆、出口秀夫の諸氏の協力を得た。記して厚くお礼申しあげたい。

## 3 調査の結果

国鉄湖西線沿いの水田に、調査順にAよりKまで11カ所トレンチを掘り、遺構の有無と土層の堆積状況を観察した。なおトレンチは、当初水路予定地に一定方向に掘進むはずであったが、付近は湿田で場所によってはトレンチを掘穿するバックホウが、自らの重量によって沈むこともあり、そのためトレンチの方向が不規則なものとなつた。

以下、各トレンチの土層を中心に述べていきたい。

Aトレンチ 東西方向に設定したトレンチで、地表高は86.23mである。

土層は、第1層耕土、第2層灰色粘質土、第3層褐色スクモ層となり、第3層より田下駄、自然木などが出土した。

Bトレンチ 北東～南西方向に設定したトレンチで、地表高は86.23mである。

土層は、第1層耕土、第2層灰色粘質土、第3層褐色スクモ層、第4層青灰色粘質土、第5層暗黄褐色粘質土、第6層灰黒色粘質土であり、このうち第2層はさらに細かく分けることができ、灰色粘質土と灰色礫質土が交互に堆積している。第2層中の礫層は、湿田に体が沈むのを防ぐために入れられたものと考えられる。なお、第3層より田下駄が出土した。

Cトレンチ 北東～南西方向に設定したトレンチで、地表高は85.94mである。

土層は、第1層耕土、第2層灰色粘質土、第3層褐色スクモ層、第4層青灰色粘質土であり、第3層に木などの自然遺物を含む。

Dトレンチ 北東～南西方向に設定したトレンチで、地表高は85.79mである。

土層は、第1層耕土、第2層灰色粘質土、第3層黃青灰色粘質土、第4層褐色スクモ層であり、第4層に木などの自然遺物を含む。

Eトレンチ 南北方向に設定したトレンチで、地表高は85.54mである。

土層は、第1層耕土、第2層灰色粘質土、第3層灰色砂質土、第4層黃青灰色粘質土、第5層褐色スクモ層であり、第2層と第3層は基本的には同一層と考えられる。

Fトレンチ 北東～南西方向に設定したトレンチで、地表高は85.39mである。

土層は、第1層耕土、第2層灰色粘質土、第3層黃青灰色粘質土、第4層灰色粘質土、第5層黃青灰色粘質土（第3層より褐色かかる）、第6層褐色スクモ層であり、第2層から第5層までは、灰色粘質土と黄青灰色粘質

第2図 レンチ配置図



土が交互に重なりあって堆積している。なお、第5層より土師質小皿と土師質（瓦質か）壺（？）の破片が、また第6層からはやや摩滅した陶器片が出土している。

Gトレンチ 南北方向に設定したトレンチで、地表高は85.42mである。

上層は、第1層耕土、第2層灰色粘質土、第3層灰色礫質土、第4層褐色スクモ層であり、第2層に食込むように灰色砂質土が混っている。第4層中より自然木に混って、箸や用途不明の木製品などが出土した。

Hトレンチ 北東～南西方向に設定したトレンチで、地表高は85.57mである。

上層は、第1層耕土、第2層灰色粘質土、第3層灰褐色粘質土、第4層褐色スクモ層である。

Iトレンチ 北東～南西方向に設定したトレンチで、地表高は86.31mである。

土層は、第1層耕土、第2層灰褐色粘質土、第3層灰色砂質土、第4層褐色スクモ層であり、第2層と第3層は基本的には同一層と考えられる。

Jトレンチ 北東～南西方向に設定したトレンチで、地表高は87.30mである。

上層は、第1層耕土、第2層灰褐色粘質土、第3層褐色スクモ層である。

Kトレンチ 北東～南西方向に設定したトレンチで、地表高は87.30mである。

土層は、第1層耕土、第2層灰褐色粘質土、第3層褐色スクモ層である。

以上各トレンチの土層を中心に述べてきたが、各トレンチの土層堆積状況は比較的なだらかに堆積しており、急激な地形変化はなかったものと思われる。また、各トレンチで遺構は検出されなかった。

## 4 出土遺物

### (1) 土器

瓦質土器 壺かと考えられる頸部から肩部にかけての土器片がFトレンチから出土している。頸部は黒色を呈し外面に細かいヘラミガギが施され、肩部にあたる下半部は灰色を呈しヨコナデが認められるが、小破片であるため全体に行なわれているのかどうか明確ではない。内面は、頸部をヨコナデ整形、下半を不調整で仕上げる。胎土は精良で、微小の金雲母を含んでいる。

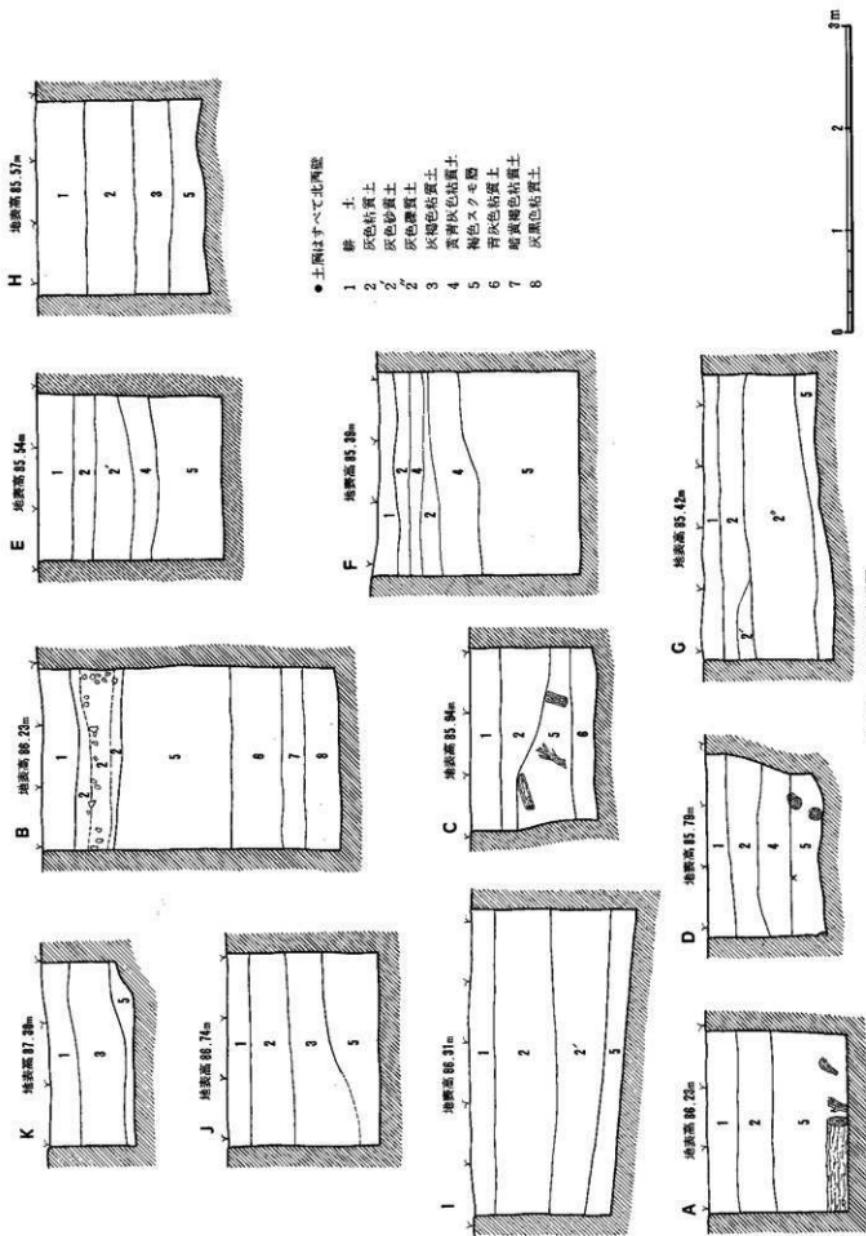


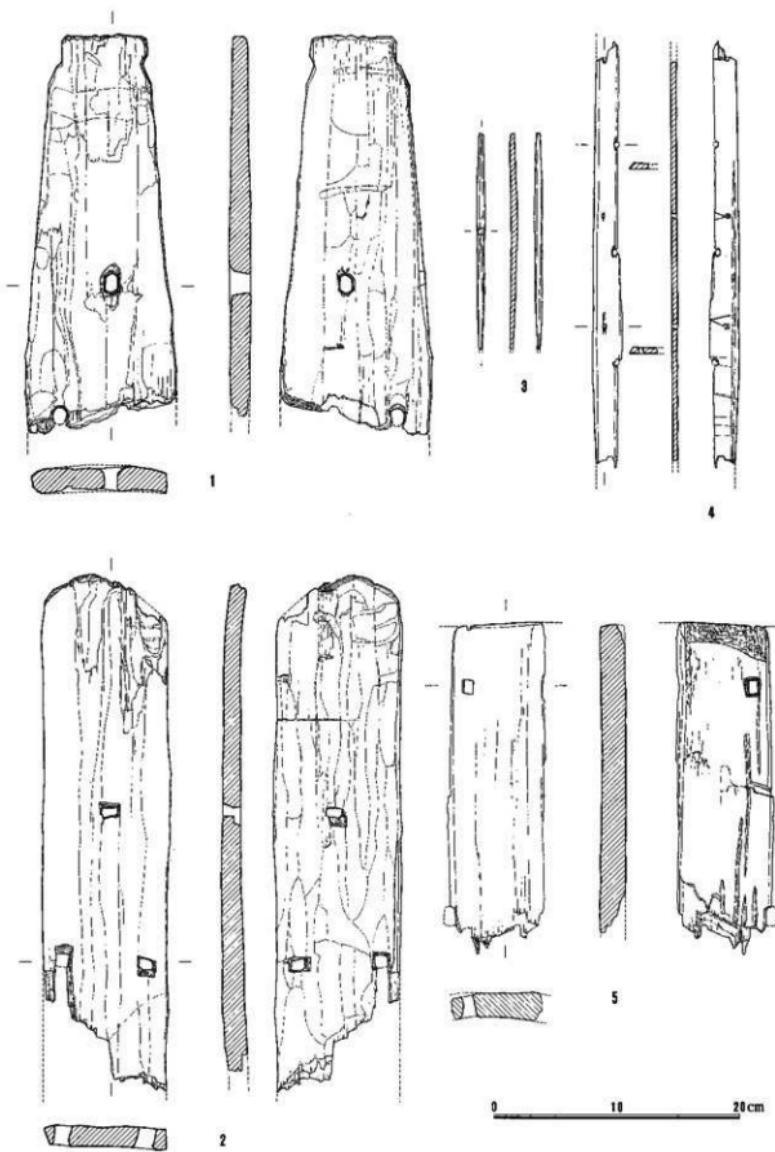
第3図 出土土器実測図

土師質土器 Fトレンチから、小皿の小破片が出土している。形態は、口縁部が体部にくらべてやや肥厚し、内面の口縁端部にわずかに殷のつく、底部の平らな小皿で、法量は復原口径 9.4cm、高さ 1.5mを割る。整形は口縁外面上部と内面をヨコナデで仕上げ、外下面は指頭圧痕を多く残した不調整のままである。胎土は精良で、色調は淡白褐色を呈する。

陶器 Bトレンチから信楽と思われる壺の破片、Fトレンチからは摩滅した常滑の壺の破片が各々1点づつ出土している。

第4図 レンチ土壌図





第5図 出土木製品実測図

## (2) 木製品

出土物(1、2) (1)は、端部の両側面にえぐりの入った足板で、裏面に枠のあたり痕が2カ所認められる。鼻緒孔は前と左横の2孔が残存し、鼻緒孔の前後間隔は約11cmである。現存長32.5cm、幅12.4cm、厚さ1.6cmを測り、復原すると足板は約60cmほどの長さになる(Aトレンチ出土)。

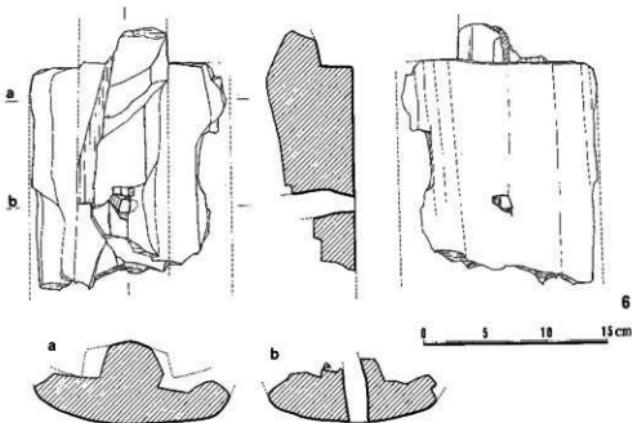
(2)は、先端を丸く整形した足板で、鼻緒孔は3カ所とも残存する。鼻緒孔の前後間隔は12cm、横間隔は7cmである。現存長42.2cm、幅10cm、厚さ1.3~1.9cmを測り、足板の復原長は63cmほどと推定される(Bトレンチ出土)。

箸(3) 多角に面取りし、両端に向って細く削り、本と末を区別する。本例は木の部分が残存する。現存長7.7cm、太さは最大径で6mmを測る(Gトレンチ出土)。

用途不明品(4~6) (4)は柾目を利用して薄い板で、小孔が3カ所づつ2列に交互にあけられている。孔の形は、直徑5mmほどの円形に近いものと、縦3mm横2mmほどの方形のものとがあり、方形孔の裏面には柾のあたり痕と思われるものがV字型に認められる。側面は斜めに削り、裏面には整形痕が一部残る。現存長34.7cm、現存幅2.5cmを測る(Gトレンチ出土)。

(5)は板状で、縦10mm横8mmの方形の孔が1カ所認められ、別にもう1カ所不明瞭であるが孔があけられているようである。全体に腐蝕が著しい。現存長26.9cm、現存幅8cm、厚さ2cmを測る(Gトレンチ出土)。

(6)は全体に厚手で、上面中央に突出した軸部を作り出し、なかほど下方に方形の孔を穿った木製品である。下面是緩かに彎曲し、樹皮をはいだだけの木軸を利用している。(5)と同様全体に腐蝕が著しい。現存長21.4cm、現存幅15.9cm、厚さは突出部を含めて6.9cmを測る(Gトレンチ出土)。



第6図 用途不明木製品実測図

## 5 結 び

調査の結果、当初予測された製鉄遺跡の広がりも、それ以外の遺構も確認されなかった。

本年度調査地域は土層から判断して、かつては沼地であったことが明らかになった。この沼地については、数少ない遺物ではあるがFトレーナー出土の土師質小皿などからみて、室町時代の15世紀頃はまだ存在していたようで、埋立てが行われて現在のように水田化されていったのは、おそらく近世以降のことと思われる。しかし、こうして開発された水田も、は場整備によって十分な排水が行われる以前は、旧沼地と水の集まりやすい谷状の地形といった自然条件のため、水はけの悪い畠田であった。そのため、作業中水田に体が深く沈むのを防ぐためBトレーナーでみられたように、耕土下に砂礫をまいている。同様に溝田帯で発掘調査を実施したマキノ町蛭口でも、やはり砂礫をまいたり、あるいは木を沈めたりして体が沈むのを防いでいる。<sup>①</sup>もっとも、沼地の存在していた中世においても、沼地の縁辺部の山麓よりに営まれたであろうと推定される水田は、やはり今日のような畠田であったのだろう。A、Bトレーナーで出土した田下駄は、そうした畠田で用いられたものが廃棄され、沼地に流れこみ堆積したものである。

さて、海岸遺跡で出土した田下駄は、マキノ町の湖西線沿いにある溝田で近作まで使用されていたものと同じ<sup>②</sup>で、また海岸より約2.9km西方に所在する蛭口の仏性寺遺跡から出土した奈良時代かと推定される田下駄の足板とも、細部は異なるが基本的な構造においては一致する。このように一地域の中で、古代、中世、現代と歴史的な流れの中で型式を確認したことは、今後農具の歴史、あるいは民具を考えるうえに貴重な資料となろう。

### 註

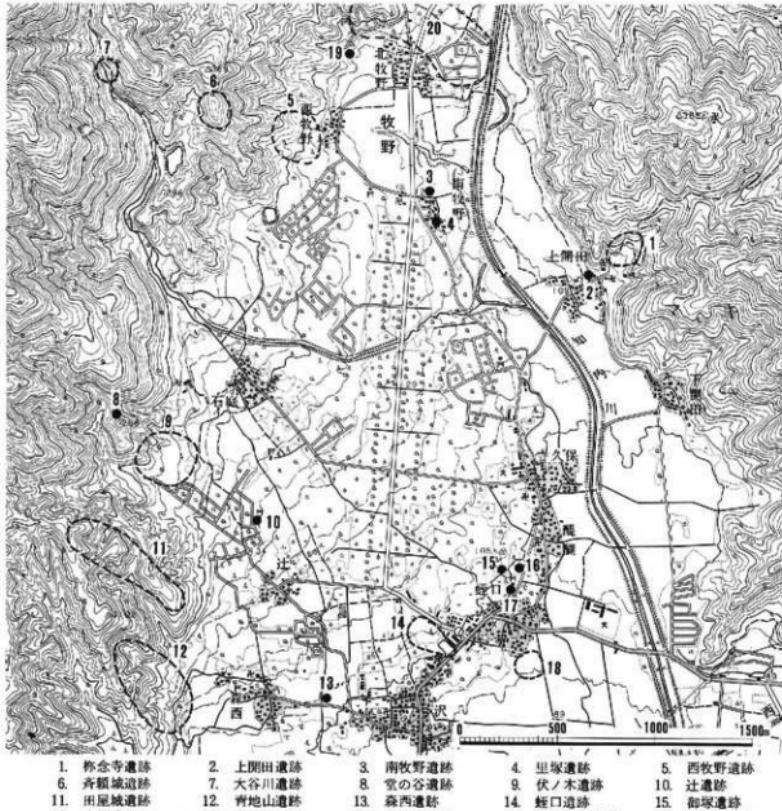
- ① 兼庭保明・本田修平他「高島郡マキノ町仏性寺遺跡」（『は場整備関係遺跡発掘調査報告書』VI-2、滋賀県教育委員会・滋賀県文化財保護協会、昭和54年）  
② 山口順子「高島郡マキノ町仏性寺遺跡出土の田下駄」（『滋賀文化財だより』32、滋賀県文化財保護協会、昭和54年）

## 第2章 高島郡マキノ町上開田遺跡

# 1 はじめに

本報告は、高島郡マキノ町上開田において昭和54年度に実施した、は場整備に伴う発掘調査の結果をまとめたものである。

上開田遺跡は、『滋賀県遺跡目録』（昭和40年度版、滋賀県教育委員会編）には標示されていないが、水田畦畔の石垣に室町時代の石仏が積まれていることや、上開田の山麓に中世寺院の堂坊跡と考えられる平坦地が残っていることなどから、地元よりは場整備に先立って発掘調査を実施し、埋蔵文化財の有無を明らかにしてほしいとの要望があった。そこで、町教育委員会の関係者と現地立合を行ったところ、は場整備の範囲は寺院の中心部から離れており特に問題はなかったが、畦畔の石垣に積まれた石仏は、中世寺院および現在の墓地との関係からみて、付近に中世墓地の所在していた可能性が考えられた。そこで、は場整備に先立って発掘調査を実施し、その結果をもとに協議することになった。



第1図 遺跡位置図

## 2 位置と環境

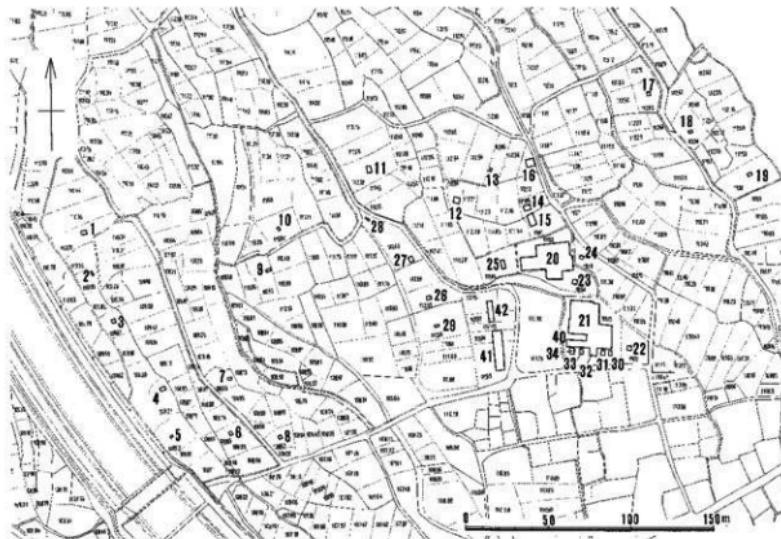
上開田は、国鉄湖西線マキノ駅北西約2.5kmに所在する。集落は、仲仙寺山の南山麓にあり、その西側を知内川が流れている。

上開田遺跡は、集落の北側、地形的には知内川の左岸段丘上に位置している。この付近は、これまで遺跡の分布が確認されていなかったが、西近江路に面した場所でもあり、記録によれば鞍田時代には上開田の村は存在していたようである。また、仲仙寺山々麓にある薬師堂や称名寺の周辺には、かつての堂坊跡かと思われる平坦地があり、境内には鎌倉時代の石造宝塔をはじめ、層塔など中世石造美術品の残欠も認められる。上畠山の集落の立地する場所は、こうした寺院の門前ともいべき位置を占めている。一方、中世遺跡とは別に、上開田より知内川を約1.5km下流に下った地点で、河川工事の際に地下約数mのところで須恵器が発見されている。須恵器の器体はあまりローリングをうけていないが、工事関係者より聞いた出土状況や本調査の知内川寄りの堆積などから類推して、現地点よりそう遠くない場所から流されてきたのではないだろうか。そうした場合、出土地点の上流にある寺久保や下開田の集落周辺に遺跡の埋もれている可能性が指摘できる。

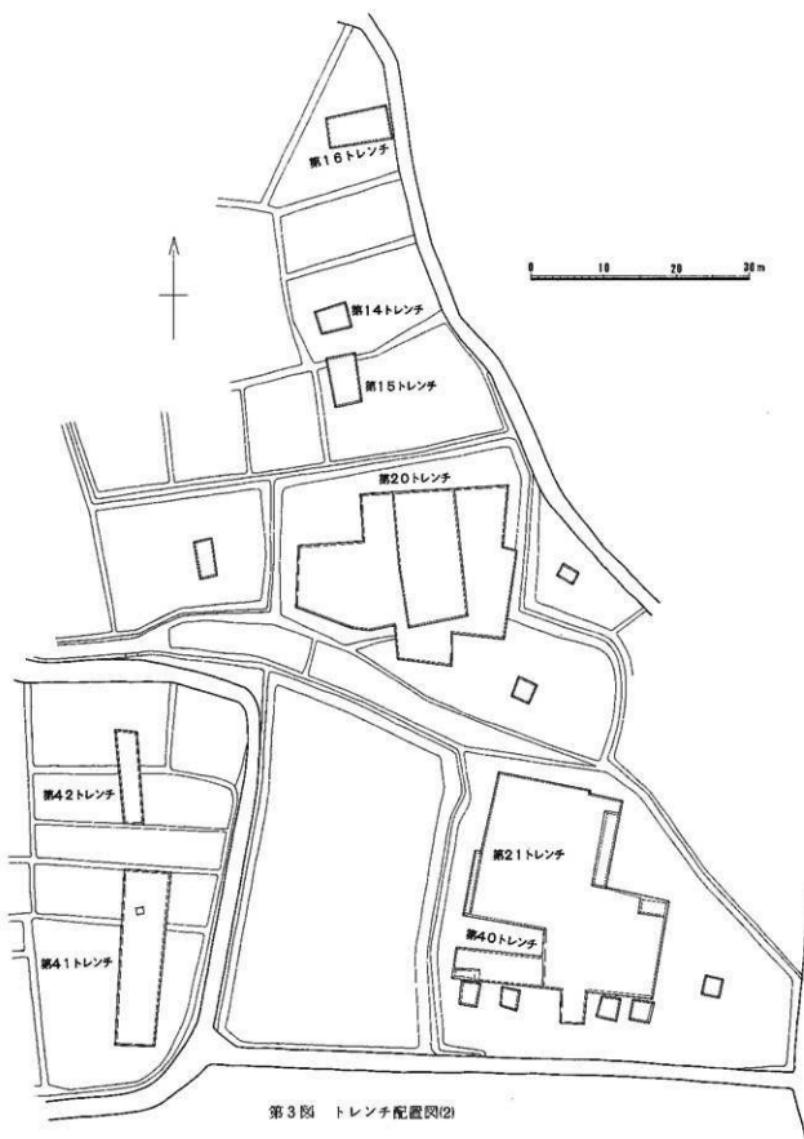
## 3 調査の経過

調査は、滋賀県教育委員会文化財保護課技師兼康保明を担当者とし、滋賀県文化財保護協会嘱託本田修平（現彦根市教育委員会）を主任に、は場整備の夏期施工区域を対象に昭和54年4月6日から5月10日まで実施した。

発掘調査は、まずは場整備によって削平される水田に、バックホウで順次約2~3m角の試掘坑を穿って、遺



第2図 トレンチ配置図(1)



第3図 トレンチ配置図(2)

物包含層および遺構の有無について確認を行った。試掘坑は総計42カ所となったが、その内上耕田の集落の北西側で小規模な古墳時代と中世の複合する遺跡を発見したほか、縄文時代中、後期の土器を多く含む二次堆積層を検出した。そこで、調査を集落北西側の工事によって削平をうける部分に集中し、遺跡の状況を把握するため試掘坑を拡張して行った。その結果、遺跡の広がり、二次的堆積の状況と旧地形などを明らかにすることができた。

## 4 調査の結果

### 第16トレンチ

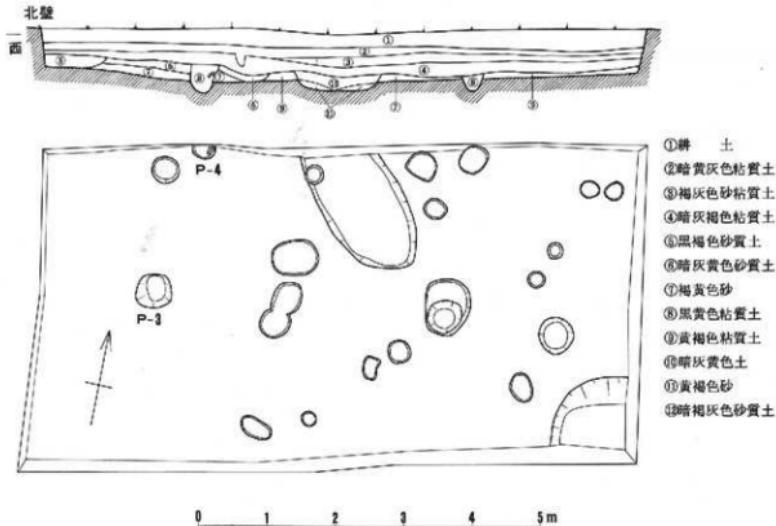
遺物包含層の確認される、最も北に位置するトレンチである。地形的には、仲仙寺山から延びる尾根の最先端にあたる。

耕土下約30cmほどで認められる第2層——暗黄灰色粘質土には、中世の遺物と縄文式土器の小破片が含まれていた。トレンチ北壁西側でみられる第3層——暗灰褐色粘質土層の上面で、ビットや土坑状の落ち込みが認められたが、トレンチの東南側は砂礫層となる。検出されたビットは規則性も無く、また土坑状の落込みも、羽釜などの遺物が入ってはいたが、燒土、炭などは認められず、遺構とは断定しがたいものである。

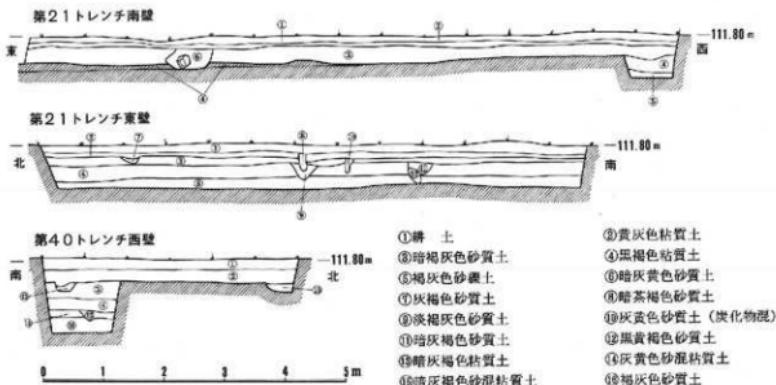
第16トレンチの南側に位置する第14、15トレンチでは、砂層に落込みが認められ中世の遺物が出土した。しかし、この遺物の含まれた落込みは、砂層上にできた窟みに遺物包含層が入込んだものであった。この事から、第16トレンチの落込みも、同様なものであると考えられる。

### 第20トレンチ

約30cmほどの深さの耕土を除くと、床土と思われる褐黄色粘質土となるが、面を広げると部分的に土色の違い



第4図 第16トレンチ遺構実測図



第5図 第21・第40トレンチ土層図

が認められ、あるいは這構面かと思われたが、結果的には二次的堆積の層の土の違いであることが判明した。縄文時代の遺物は、大半がこの層から出土する。遺物の出土状況は、前記した土色の違いによって密度が異なることはあるが、ほぼ全面に散布していた。出土の密度は、土色の褐色が強い部分に多く、遺物包含層の厚さは約60～70cmであった。出土遺物は、縄文時代中、後期の土器を主体に、石斧、石錐などの石器、さらに少量の須恵器などがあり、各々混在した状態で出土した。

この二次堆積の遺物包含層よりさらに下層を、バックホウで掘下げ確認を行った。その結果、第3層は上部にやや砂が混るが黄灰色粘土層で、層中より寛永通宝が出土した。また第4層では、植物遺体と粘土の混るスクモ層となつた。以上のことから、第2層と第3層が年代的に逆転していることと、第4層の状態から、東西に伸びる谷か沼状の湿地を、江戸時代に付近の縄文時代の遺跡のある土地を切取って、埋めたてに用いて現状の高さの水田に変えたものと推定される。

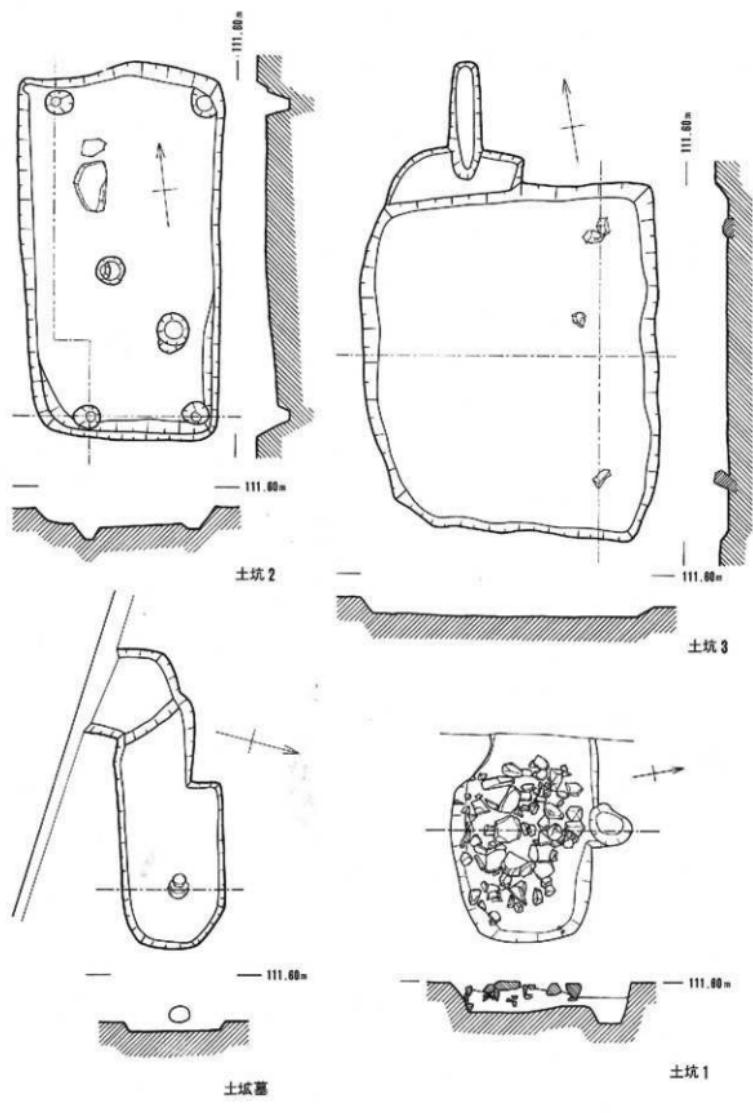
### 第21トレンチ

集落の北側に近接して広げたトレンチで、縄文時代の遺物が多量に出土した第20トレンチの南東側にあたり、田面で約50cm高いことから、縄文時代の遺構の検出が期待された。

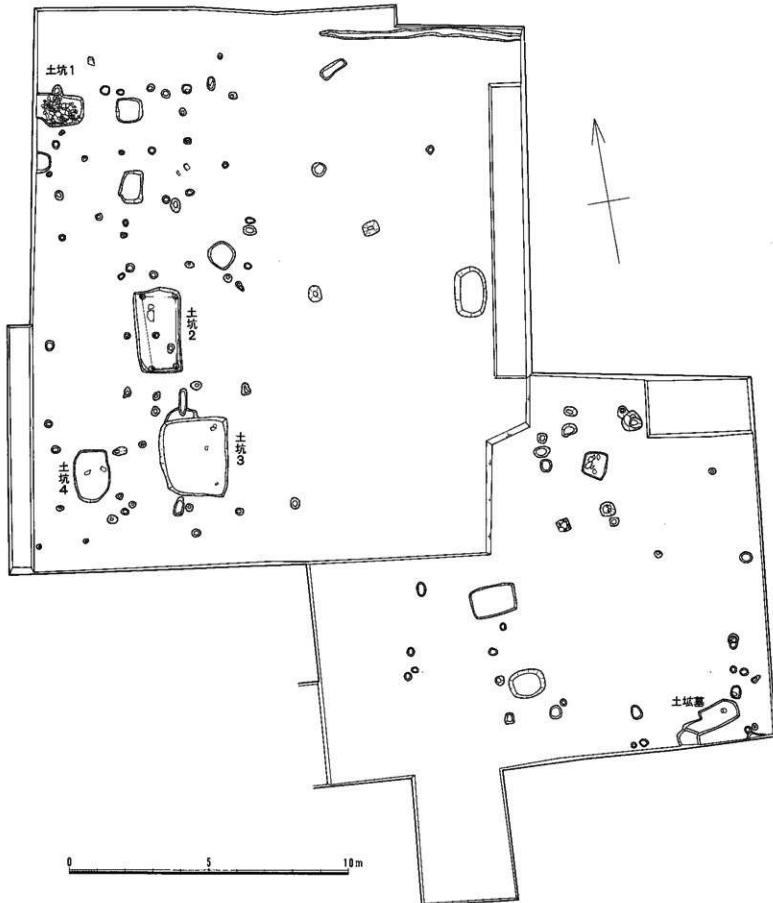
約10～15cmの厚さの耕土を除去すると、第2層は縄文式土器片と中世の土器が混在する黄灰色粘質土の包含層となり、第3層——暗褐灰色砂質土上で遺構が検出された。

遺構は、ピット、土坑などその性格が明らかでないものが大半を占め、第16トレンチ同様生活面上の窪みを包含層が覆つたため、一見遺構のように見えるものも含まれよう。このことは、トレンチの各部で下層の状況を的確に把握するために掘り下げた断面からも確認されている（第40トレンチ西壁）。現在、明確に遺構と考えられるものは、形状あるいは遺構の壁面がしっかりしたもの——古墳時代の土壙と、中世の土坑4カ所の計5カ所を数えるのみである。ピットについては、建物の柱穴を構成するものは無く、おそらく樅木等の由に関係するものであろう。

土壙墓　トレンチの南東端で検出されたもので、長軸約1.9m、短軸約90cm、深さ20cmを測る楕円形をした土壙である。土壙周辺の地山は砂質が強く、検出後の遺構壁面は崩れやすいものであった。土壙の西南端は他の土壙と重複しているが、相互の切り合いの前後については明確にできなかった。土壙内の北東部には、脚部を意



第6図 土坑及び土塚墓実測図



第7図 第21トレンチ遺構実測図

図的に欠いたと思われる合付壺が立てた状態で置かれ、土壙の形状、須恵器の出土状況から判断して、土壙革の可能性がきわめて強い。

土坑1 長辺1.7m以上、短辺1.2m、深さ20cmほどの楕円形をした土坑で、坑内に集石が認められ、集石の上部および集石中から炭および炭化米が少量検出された。また、集石中に、伝業の胴部と思われる破片が混り込んでいた。中世の整理坑かと推定される。

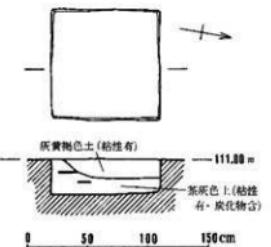
土坑2(小屋状遺構) 長辺3.1m、短辺1.6mの長方形の平面をもち、深さ20cmほどの皿状の底みをなす竪穴遺構で、四隅には斜めに入り込む柱穴がある。遺物はほとんど検出されていないが、ごく少量の櫛土巾の遺物からみて、土坑1と同様中世のものと考えられる。遺構の性格については不明な点も多いが、構造からみて簡単な小屋掛けを持っている野小屋的なものと理解している。

土坑3 土坑2の南側に近接して位置し、長辺2.8m、短辺2.4m、深さ10cmを割る方形の土坑で、遺物はほとんど検出されなかった。規模、形態より考えて、土坑2と同様な性格と年代を有するものと推定される。

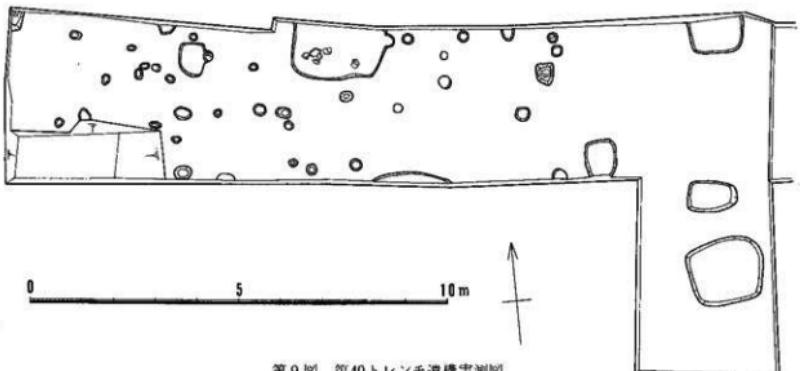
土坑4 土坑3の西側に位置する、長辺1.8m、短辺1.3mの南側に丸味をもつ不整形な土坑である。遺物は検出されず、遺構の性格についても不明である。

#### 第41トレンチ

集落の北西端で、第21・40トレンチの東方の、地形が周囲より約50cmほど高い水田に設定した、南北に長いトレンチである。本トレンチは、第20・21・40トレンチを中心として出土した縄文式土器に関連する、遺構および遺物包含層を確認することに主眼をおいた。しかし、13世紀頃の遺物に混じって微量の縄文式土器の小片が検出されたにとどまる。また、第3層の黄褐色粘質土を掘り込んで、一辺が約90cmのほぼ正方形をした、深さ約30cmの土壙が確認された。この土壙は、横内の四周の壁が焼けており、底に約6cmほどの厚さで灰の層があった。遺物は出土しておらず、年代は不明であるが、本トレンチの両側に道を隔てて墓地があり、そこ①に1基の石祠がある。その大きさが、土壙の上部施設と考えるとよく一致し、あるいは石祠と関係するなら、江戸初期の火葬墓の可能性が推測される。



第8図 第41トレンチ・焼土壙実測図



第9図 第40トレンチ遺構実測図

## 5 出土遺物

縄文時代の土器と歴史時代の土器が同一層より出土している。ここでは一応縄文時代と古墳時代及び歴史時代の土器とに分けて考えていく。

### (1) 縄文式土器

主に第20トレンチからの出土であり、それ以外のトレンチからの出土は極めて少ない。現在整理の途中であり、整理が進むに従ってさらに詳しく判るものと考えられる。絶対的に器壁への鉄分付着が著しく、残りは非常に悪い、精製と粗製の別はあるが、器形は鉢、注口土器の二種類である。

(1) は上ド2つの円弧の凸凹に笠状工具によりきざみ目をつけ、その円弧間はやや堅めの繊維による縄文をつけ地文様にしている。(2) の器表の地文様も(1)と同一であり、(1)、(2)ともに深鉢になるものと思われる。

(3)、(4)の深鉢は地文様を無節縄文でおおい、(4)には貼付突帯を付ける。

精製深鉢はその口縁部の形態、外面の施文等の違いにより大きく分けて6つに分類することができる。

A類(5)、巾5mmの太めの平行沈線を伴う磨消繩文で、口縁部は内弯し、口縁端部は水平に面取りを行う。沈線間に沈線の原体と思われる竹筋で竹管文をつける。

B類(6)、巾3mmの平行沈線を伴う磨消繩文で、口縁部は内弯しており、口縁端部を内側に大きくつまみ出している。外面下部は無文帶になっている。

C類(7、8)、A類より細めの巾2mmの平行沈線を伴う磨消繩文で、形態はA類とはほぼ同様である。

D類(9、10)、円弧や平行沈線を施した大きなキャリバー状になる深鉢の波状口縁部で、口縁端部は丸くおさまる。外面下部は無文である。

E類(11~13)、D類に比べて施文構成が單純化しているキャリバー状になる深鉢の口縁部で、外面下部は恐らく無文になるものと思われる。(13)は刺突文を伴う。

F類(14)、口縁部が逆「くの字」状になり、口縁端部は内傾し尖りぎみにおさまる。内傾した端部外面に縦方向に粘土縫を貼付け、その上に笠状工具により刻み目をつける。

A~F類以外に胴部ではあるが沈線文のもの(16)、被杉文と沈線文の組み合わせのもの(15)があり、(15)はあるいは注口土器の胴部になるかもしれない。

粗製の深鉢はその口縁部の形態により、大きく3つに分類することができる。

A類(18)、口縁部がやや内弯している。

B類(19)、口縁部はほぼ直線的に外上方に開く。

C類(20~23)、口縁部は外反している。

粗製深鉢の底部はその形態により、大きく3つに分類することができる。

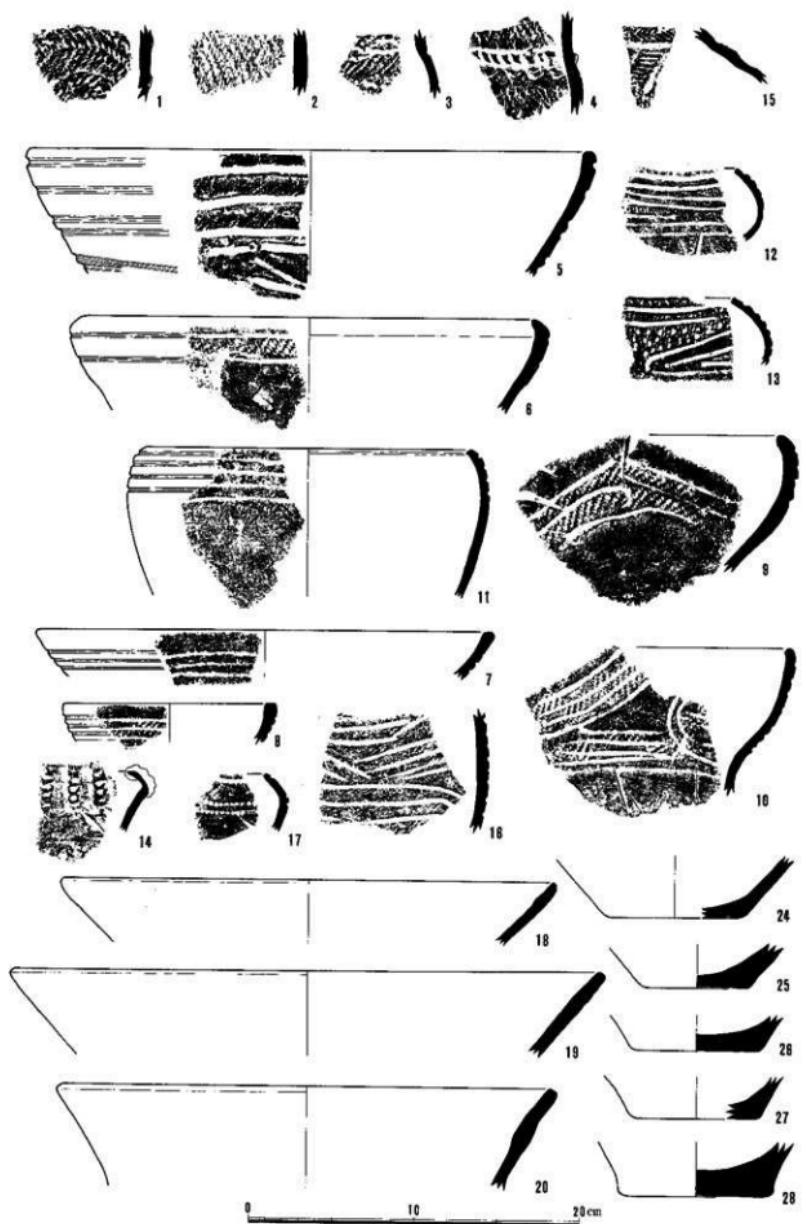
a類(24~37)、底部が平底かそれに近いものである。

b類(38)、平底で底部に網代痕を残すものである。

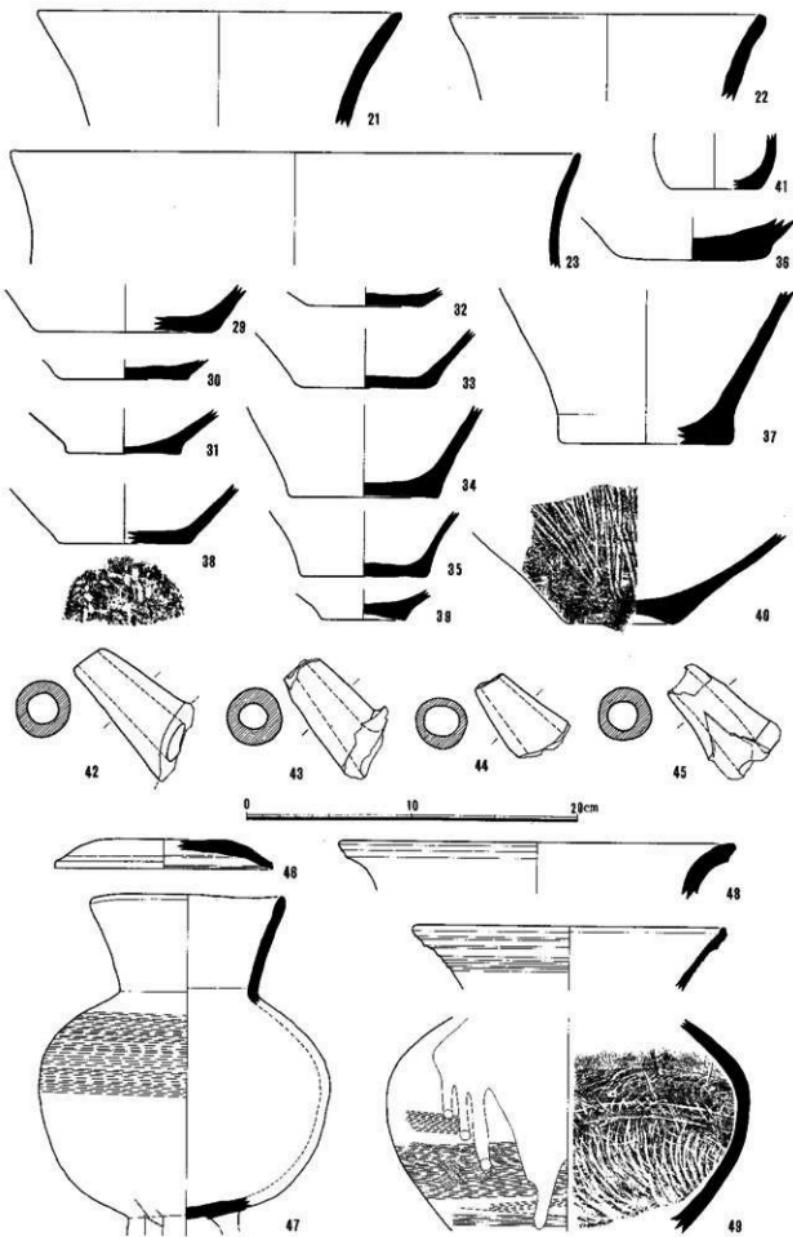
c類(39、40)、座み底になるもので、(40)は胴部外面に恐らく貝殻を使ったであろうと思われる条痕文を施している。

a~c類以外で底部が平底になるものがあり、恐らく小型のコップ状のものになると思われる。(41)

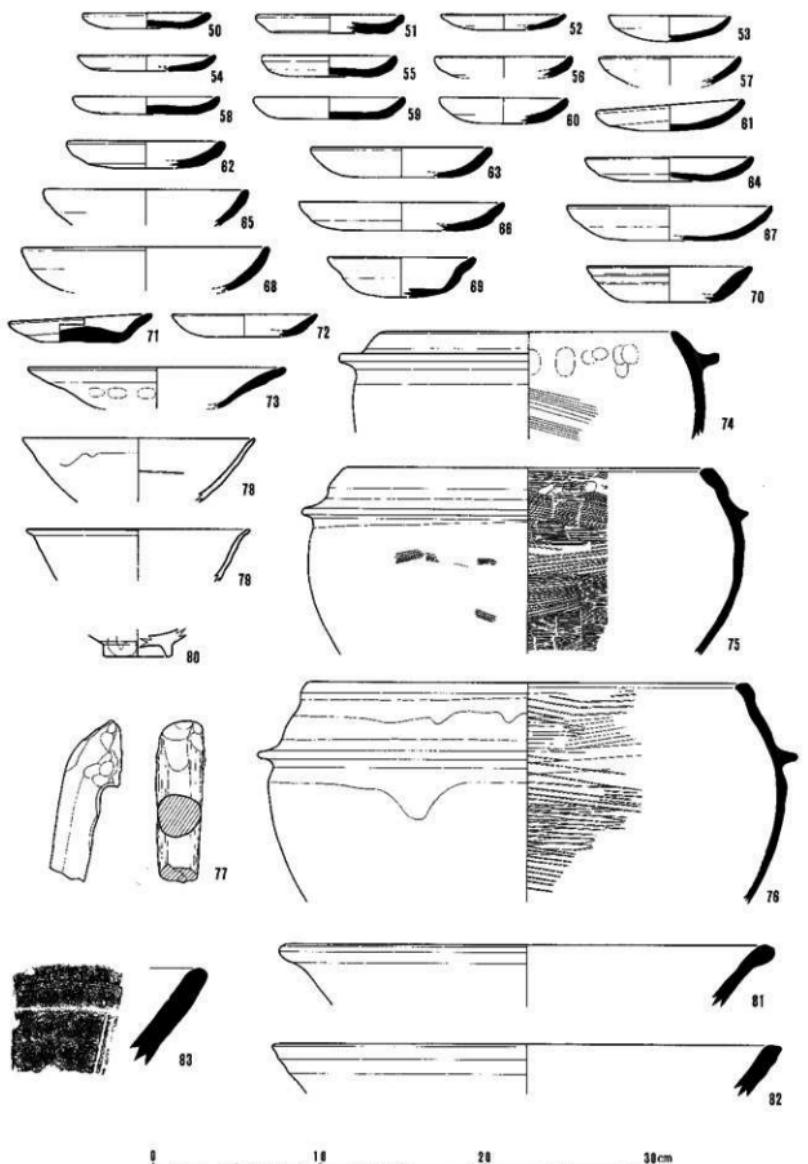
注口土器は、口縁部(17)と注口部(42~45)が出土している。(17)は口縁部と体部の3カ所に棒状工具に



第10図 繩文式土器実測図



第11図 條文式土器・須恵器実面図



第12図 中世土器実測図

より連続刻突文を巡らせる。注口部は長いもの（42、43）と短いもの（44、45）とがある。いずれもがほぼ直線的に先細りになっている。

## （2）古墳時代～歴史時代の遺物

古墳時代の遺物は、第20、第21トレンチから、歴史時代の遺物は、主に第16トレンチからの出土であり、それ以外のトレンチからの出土は極めて少ない。器形は土師質の皿が圧倒的に多く、他に須恵器の壺蓋・甕・壺・土師質・瓦製の羽釜、磁器の碗、陶器の搗り鉢・鉢と種々の器形があり、時代もさまざまである。

### 須恵器

壺蓋（46）は内面のかえりが消滅し、口縁部はやや外下方にさがる。天井部は中央がやや窪んでおり、器高は低く器壁は厚い。

合付壺（47）は口縁部がわずかに外反しながら立ち上る。口縁部は焼成時の歪みがみられる。頭部はあまり屈曲せず、胴部は球体である。三方透かしの貼り付け脚部は、貼り付け後に透かし窓を開けているようである。

甕（48）は口縁部が外反し、口縁端部で一度屈曲し外面に面を作る。器壁は厚い。

甕（49）は口縁部と胴部の破片であり、恐らく同一個体と思われる。緩やかに外反する口縁部は口縁端部においてやや屈曲し、その後内弯して丸くおさめる。胴部は球体である。

### 土師器・土師質土器

土師質の皿は、いくつかの形態があるが、口径の法量により小皿（50～62、69～72）、中皿（63～67）、大皿（68、73）の三種類に分類することができるが、小破片からの復元で、法量に多少誤差の生じているものも含まれよう。

（50～62、72）は概ね口縁部に面取りを施す箇内で一般的にみられるもので、整形は口縁部内外面に横ナデを施し、底部外面は不調整である。

（71）は口縁部が外反する。

（69）は口縁部中程で屈曲し、再び外方へのびている深い小皿である。

（70）は口縁部内面が外弯し、器壁がやや厚いものである。

大皿は口縁部が内凹するもの（68）と口縁端部がやや肥厚し外反するもの（73）の二種類がある。

羽釜は口径より大・中・小の三種類がある。

（74）は小型で、口縁部は内弯し口縁端部が丸くおさまる。つば部はやや上向きながら水平であり、先端は角になる。

（75）は中型で、口縁部は内弯し口縁端部はやや内面肥厚している。つば部は断面三角形の短いもので、瓦質の可能性もある。内面に横刷毛を施す。

（76）は大型で、口縁部は内弯し口縁端部はやや内面肥厚している。つば部は短くほぼ水平で先端は丸い。内面には粗い横刷毛を施す。

（77）は羽釜の脚部で脚部下方を欠いているが、羽釜胴部への接合方法を知りえる好例になると思われる。

### 陶磁器

青磁の碗（78、79）は共に口縁部を外方に強く引き出したもので、文様はみられないが、（78）は内面中程に一条の沈線が入る。

（80）は大口碗（瀬戸）の高台で、高台はやや外にふんばり内側で接する。

（81）は底地不明の鉢で、ゆるやかに外反した口縁部は、口縁端部で外側肥厚し丸くおさまる。

(82、83)は共に信楽の鉢であり、(82)は口縁部にゆるい一条のナデによる凹線が入る。(83)は口縁部下方の内面に沈線を周らし、2本以上を単位とする条線が入る。

### (3) 小 結

以上出土遺物の形態を中心にしてきたのであるが、大部分の土器が同一層よりの出土であり、層位別による時期区分は困難な状態である。以下縄文式土器と古墳時代及び歴史時代の遺物に分けて、時期決定を混じながら補足していきたい。

縄文式土器はその大部分が深鉢であり、器形的にみてバラエティーに富んでいるとはいえない。しかし同一器形においてもその施文パターン及び形態の違い等から中期中頃から後期中頃までの時期に分類することができる。

(1~4)はその施文パターン及び地文様の特徴等からして船元式と思われる。また個々の土器を細かくみていくと、(1)は凸唇の隆起が里木貝塚出土の船元式土器よりも少なく刻み目も浅い感じがする。これが時期的な差を表わすものか、滋賀県における船元式の地域的な特徴を表わすものかは現在のところ不明である。今後滋賀県及び隣接各県の発見例が増加するに従って解明されるかもしれない。また(4)の貼付突帯下方の円弧は、縄文施文時の紐のあたりと思われ、縄文施文の方法を知りえる好例になるものと思われる。

粗製深鉢のA類は、その施文パターン及び口縁端部の形状等からして中津式のものである。しかし、この期に属するものは1点のみであった。B類は口縁端部の様相が、内側に大きくなっていますといふ点で中津式とはやや異なり、中津式より後出の福田KII式の範疇に入るものと思われる。ただ沈線の大きさが福田KII式に比べるとやや細く、これも地域的な特徴なのかもしれない。C類はその施文パターン等からして関東の加曾利BI式にその類形を求めるができる。他の精製土器については、恐らく福田KII式から北白川上層式に該当する後期中頃を中心とする時期の遺物であろう。

精製土器については、精製土器に比べて詳細な時期を決定する良好な資料はみあたらないが、底部の形態を中心にみていくと、当遺跡出土の底部を大きく3つに分類したが、b類の底部は一乗寺K式に多くみることができ、続く元住吉山式においてはほとんどみられなくなり、次第に窪み底であるC類に移っていく。ただ当遺跡出土の底部では、b、c類の割り合が低く、これに対応する型の精製土器が認められないことから、この数点だけからして精製土器の時期を決定するのは早急すぎると思われる。全体的にみれば粗製土器も精製土器と同様に後期中頃(福田KII式～一乗寺K式)を中心とする時期のものと考えられる。

須恵器の脚台付蓋(47)は、類例として兵庫県西宮市具足塚石室床面出土土器群と比較した場合、胴部はこの土器の方が丸く、口縁端部もやや厚く丸みをおびている点等から考えて6世紀後半頃のものと考えられる。(49)の甕は、口縁部はあまり外反せず凸線は明確でない。内面の円弧文の叩きが一部スリ消されており、外面も平行叩き後、2次調整としてカキ目を施している。湖西線関係遺跡V D区東半6号墓出土の甕と比べてみた場合、当遺跡出土土器の方が全体的にややシャープである。また陶邑TG 203号窯出土土器と比較した場合、この遺物の方が外反度が少なく、凸線の脱さにおいては劣るが、口縁端部に面はもたない。これらの点等から考えて6世紀後半頃のものと考えられる。(46)の环蓋は、内面のかえりが消滅し、器形の低い扁平な蓋で、弘川遺跡出土例等からして、8世紀から9世紀初め頃のものと考えられる。(48)の甕は口縁部の感じが厚く、恐らく8世紀代のものと思われる。

土師質の皿は小皿・中皿・大皿の別はあるが、概ね口縁部に面取りを行うものである。これらの土器は、中之坊遺跡第102トレンチ出土遺物に類例を求めることが可能で、12世紀後半から13世紀初め頃に比定できると思われる。ただこの範囲に入らないものに(69~71、73)がある。これらの土器は前述のものに比べ、出土状況において

は層位が異なり、また形態的にも口縁部が外反しており、口縁端部外面の面取りも見受けられず、時期がやや下り14世紀以後のものと思われる。

土師器の羽釜は三種類あるが、口縁部が内寄し、つば部下方に模の付着がみられる。高波遺跡出土遺物や中之坊遺跡第102トレンチ出土遺物及び当遺跡出土の上師質の皿との伴出関係から考えて、恐らく13世紀頃に比定できるものと思われる。<sup>⑧</sup>

青磁の碗については、他の土師器と同様に13世紀頃のものと考えられる。

他の陶器については、他の土師器同様に13世紀から14世紀にかけてのものと考えられる。ただ(83)の描り鉢は、室町時代に下るものと思われる。

出土遺物を時期的に分けると

- (1) 繩文時代中期の船元式を中心とする一群
- (2) 繩文時代後期福田KII式より北白川上層式を中心とする一群で、本遺跡出土の繩文式土器の中心となる時期
- (3) 古墳時代後期の6世紀後半の一群
- (4) 平安時代初期の一組
- (5) 鎌倉時代初期を中心とする一群で、木造跡出土の土師器の中心となる時期
- (6) 室町時代の一組

## 6 まとめ

以上、今回の調査によって知りえたことをまとめ列記すると次のようになる。

(1) 調査当初予測された寺院関係の遺構は検出されなかった。しいてあれば、奈良～平安時代頃の須恵器がそれに関連したものかもしれないが、集落の遺物が流入した可能性もあり断定はできない。

(2) 第20トレンチで、繩文時代の遺物包含層（おそらく遺構もあったと思われる）が切り取られて浅い谷の造成に再堆積した状態で検出された。おそらく付近に、小規模な繩文時代の遺跡が所在していたものと推定されるが、調査範囲内では確認できなかった。

(3) 繩文時代後期の上器についてみれば、同じ知内川の下流の平野部に仏性寺遺跡があり、やはり後期の土器をかなりまとった状態で調査している。この両遺跡を比較すれば、仏性寺遺跡が中津式、福田KII式、北白川上層式、上開田遺跡が福田KII式、北白川上層式、一乗寺K式に主体があり、上開田遺跡の方が新しい様相を持っている。この両遺跡の土器をまず型式的に分類し、同一型式によってならべ組み立てれば、知内川流域における繩文時代後期前～中葉にかけての編年が可能である。<sup>⑨</sup>

(4) 知内川左岸には、北牧野、西牧野両古墳群をはじめとする群集墳が所在するのに対し、右岸には古墳はほとんど知られないなかった。今回、古墳時代後期の土壤薙が一基検出されたことから、今後群集墳形成期の古墳を築造することのできなかつた階層の墓制を考えるうえでの一資料となろう。

(5) 中世の遺物は、鎌倉、室町時代の二時期の遺物が出土しているが、顯著な遺構は少なかった。小規模な方形の竪穴遺構は、柱穴状のピットをもつことから、野小屋的な性格をもつものと考えている。第41トレンチで検出された火葬墓と考えられる土塚も単独であり、特に墓地を形成していない。畦間にみられた室町時代の石仏と対応させるには、すでに石仏の数の方が多い、おそらく直接関係するものではないであろう。

これらのことと地形から考えて、当該地は中世においては、山麓で水温も低く、平坦地も少い小丘の連なりで、現在のように十分開墾されておらず、あるいは畠地が点在していたような状態であったかもしれない。おそらく今日のような農村景観をなすのは、第20トレンチでみられたような造成のなされる江戸時代以降のことであろう。

#### 註

- ① 勿谷石製（凝灰岩）の石祠で、中にやはり勿谷石製の一石五輪塔を収めている。
- ② 間賀忠彦・間賀慶子『里木貝塚』（倉敷考古館研究集録第7号、倉敷考古館、昭和46年）
- ③ 具足塚発掘調査閉幕『具足塚発掘調査報告』（西宮市教育委員会、昭和51年）
- ④ 湖西線関係遺跡発掘調査閉幕『湖西線関係遺跡調査報告書』（滋賀県教育委員会、昭和48年）
- ⑤ 中村浩・高島敬他『陶邑』II（大阪府文化財調査報告書第29輯、大阪府教育委員会、昭和53年）
- ⑥ 田中勝弘『弘川遺跡発掘調査報告書』（滋賀県教育委員会・滋賀県文化財保護協会、昭和54年）
- ⑦ 萩原保明『高島町中ノ坊遺跡』（『は場整備関係遺跡発掘調査報告書』V、滋賀県教育委員会・滋賀県文化財保護協会、昭和53年）
- ⑧ 丸山竜平・山口辰一他『野洲郡野洲町竈波遺跡調査報告』（『滋賀県文化財調査年報』昭和48年度、滋賀県教育委員会、昭和50年）
- ⑨ 萩原保明・本田修平・堀内宏司『高島郡マキノ町仏性寺遺跡』（『は場整備関係遺跡発掘調査報告書』VI-2、滋賀県教育委員会・滋賀県文化財保護協会、昭和54年）
- ⑩ 高島郡マキノ町仏性寺遺跡、同上掘出遺跡の羅文式土器については、整理完了後、湖西の他遺跡出土の羅文式土器と共に別途報告を計画している。
- ⑪ 類例は、大阪府高槻市川西遺跡、奈良県桜原市蛭池北遺跡などにみられる。  
河音能平・原口正三「中世在郷村落と農民の生活」（『高槻市史』第1巻、高槻市役所、昭和52年）  
奈良国立文化財研究所編『蛭池北遺跡発掘調査報告』（蛭池北遺跡調査会、昭和52年）

# 上開田遺跡出土土器観察表

## 縄文時代の遺物

器 形	No	形 塗 の 特 徴	手 法 の 特 徴	文 様	備 考
中期縄文式土器					
深 鉢	1	胴部はほぼ直である。外 面に2本の円弧の凸帯を貼 による縄文。	地文様は堅めの縦縞に による縄文。	円弧上に刺み目を入れ る。	40トレンチ 第3層 茶 褐色 小石を含む。
	2	胴部はほぼ直である。	地文様は堅めの縦縞に による縄文。		40トレンチ 第3層 淡 茶褐色 小石を含む。
	3	胴部は内凹後上方でやや外 反。	地文様は無節縄文。		20トレンチ 第2層 茶 褐色 小石を含む。
	4	貼り付け突常を中心に上方 は外反、下方は内凹した胴 部。	外側は無節縄文、内面 は丁寧なナデ。	貼り付け突常。	21トレンチ 第3層 淡 茶褐色 1mm位の微砂を 含む。
後期縄文式土器					
精製深鉢	A 類 5	口縁端部に面取りを行う。	磨消縄文。	3条の平行沈線と縦文、 竹背文。	20トレンチ 第2層 茶 褐色 微粒の金雲母片含む。
	B 類 6	口縁部は内凹し、口縁端部 は内面肥厚。	磨消縄文。	2条の平行沈線。	20トレンチ 第3層 淡 褐色、微粒砂を含む。
	C 類 7、8	口縁端部はほぼ丸くおさま る。	磨消縄文。	7は3条、8は4条の 平行沈線。	8、40トレンチ 第3層 黄褐色、微粒砂を含む。 7、20トレンチ 第2層 赤茶褐色、微砂を含む。
	D 類 9、10	大きなキャリパー状になる 放状口縁部。	磨消縄文。	10は波状にそった4条 の平行沈線と円弧と線 分 9は波状にそった平行 沈線と沈線端部を折り 曲げた線分。	10、20トレンチ 第2層 茶褐色、微砂を含む。 9、31トレンチ 第2層 赤茶褐色、微粒の金雲母 片を含む。
	E 類 11~13	キャリパー状になる口縁部	磨消縄文。	11は4条の平行沈線、 13はZ字状に流れる沈 線文と刺突文、12は沈 線文。	11、20トレンチ 第2層 淡黄褐色、微砂を含む。 13、20トレンチ 第2層 黄茶褐色、微粒砂を含む 12、20トレンチ 第2層 黄褐色、微砂を含む。
	F 類 14	口縁端部は内凹。	内外面共に荒磨きと思 われる。	内傾した端部外面に継 に粘土被を貼り付け、 その上に刺み目を入れ る。	42トレンチ 第3層 暗 褐色、微粒砂を含む。
	15	胴部はほぼ直である。		被杉文と沈線文の組み 合わせ。	20トレンチ 第2層 淡 茶白色、微砂を含む。
	16	胴部は内凹している。	外面は削り、内面はナ デ。	沈線文。	20トレンチ 第2層 黄 茶褐色、微砂を含む。
	A 類 18	口縁部は内凹している。	外面は削り、外面は不 明。		20トレンチ 第2層 黄 褐色、微砂を含む。
	B 類 19	口縁部はほぼ直線的に立ち 上る。	外面は削り、内面はナ デ。		31トレンチ 土坑内 灰 褐色、微砂を含む。
	C 類 20~23	口縁部は外反している。	20内外面共に磨き 21外面は削り、内面は		20、31トレンチ 第2層 黄褐色、微砂を含む。
粗製深鉢					

			ナデ。 22 内外面共に不明。 23 外面は削り、内面はナデ。		21, 22, 23, 20 トレンチ 第2層、淡茶褐色、微砂を含む。
a 類	24~37	底部はほぼ平底である。	外面に磨きを施すものが多い。		25, 31 トレンチ 第2層 27, 40 トレンチ 第3層 他は20トレンチ 第2層 色調は淡黄褐色か淡赤褐色系統で、胎土は概ね微砂を含む。
b 類	38	底部は平底である。	底部に褐色陶を残す。 他の内外面は磨き。		20 トレンチ 第2層 淡茶褐色、微粒砂を含む。
c 類	39, 40	底部は窪み底である。	外面は磨き、40は外面に貝を使った条紋。		39, 20 トレンチ 第2層 濃灰色、石英片等を含む 40, 20 トレンチ 第2層 茶褐色、微砂を含む。
コップ状の鉢	41	底部は平底で、体部は内湾している。	塞きと思われる。		20 トレンチ 第2層 茶褐色、微砂を含む。
注 口	17	口縁部は内湾している。	内外面共に磨き。	口縁端部と口縁部中程 外面に計3つの丸棒状 工具による連続刺突列 点文を囲らす。	20 トレンチ 第2層 赤褐色、微粒砂を含む。
	42~45	先端よりする注口部。	外面は磨き。		42, 20 トレンチ 第2層 黄白色、微砂を含む。 43, 20 トレンチ 第2層 濃茶褐色、微砂を含む。 45, 40 トレンチ 第4層 土坑 4-4 黄白色、微砂を含む。 44, 40 トレンチ 第3層 赤褐色、微粒の金雲母片を含む。

#### 古墳～歴史時代の遺物

器 形	No	法 量 (cm)	形 態 の 特 徴	手 法 の 特 徴	備 考
<b>須 恵 器</b>					
坏 盖	46	口径 14.1 器高 1.8	内面のかえりが消滅、口縁部は外下方にあり、口縁端部は丸くおさまる。	天井部の不調整を除いて、他の内外面はミズビキ調整。	色調 淡灰褐色 胎土 石英片等を含む。 焼成 硬 38トレンチ 第2層 我1/4
合付蓋	47	口径 11.3	口縁部はわずかに外反しながら立ち上る。副部は球体で、脚部は三方透しの貼り付け。	口縁部内外面はミズビキ調整、副部上半はカキ口、下半は裏削り、透しは貼り付け後に穿つ。	色調 青灰色 胎土 2mm位の小石を含む。 焼成 硬 21トレンチ 土塼墓 脚部を除いてほぼ完形
甕	48	口径 23.5	口縁部は外反し、口縁端部で上方につまみ上げる。	外面はミズビキ調整、内面は横ナデ調整。	色調 暗灰色 胎土 精良 焼成 硬

				16トレンチ 管1/8
49	口径 18.5	縁やかに外反する口縁部は、口縁端部で上方につまみ上げる。胴部は球体である。	胴部外面は平行叩き後恐らく全面にカキ付調整。胴部内面上方はミズビキ調整、下方は一部スリ消した円弧文の叩き。口縁部外面下方には工具等を使った強めの横ナデ。	色調 暗褐色 胎土 精良 焼成 硬 20トレンチ 第2層 外面に自然難が付着 残1/4

### 土 師 器

小皿	50 62 · 72	口径 7.4 9.1 1.0 1.95	口縁部は外反し、口縁端部外面に面取りを行う。	口縁部外面及び内面は横ナデ 底部は不調整。	色調 淡黄褐色 胎土 精良 焼成 硬 72、37トレンチ 第2層 他は16トレンチ 第2層 残1/3～1/7
	69	口径 8.6 器高 2.5	口縁部中程で屈曲する深い小皿。	口縁部外面及び内面は横ナデ 底部は不調整。	色調 淡褐色 胎土 精良 焼成 硬 16トレンチ 第3層土坑 11 残1/7
	70	口径 9.8	口縁部内面が外反している。	内外面共に横ナデ。	色調 淡褐色 胎土 精良 焼成 やや軟 16トレンチ 第4層 残 1/6
	71	口径 8.2 器高 1.7	口縁部は外反し底部内面が盛り上る。	口縁部外面及び内面は横ナデ 底部は不調整。	色調 黄褐色 胎土 精良 焼成 硬 37トレンチ 第2層 残 1/3
中皿	63 71 67	口径 9.7 12.3 器高 21.5	口縁部は外反し、口縁端部は丸くおさまる。	口縁部外面及び内面は横ナデ 底部は不調整。	色調 淡黄褐色系統 胎土 精良 焼成 硬 16トレンチ 第3層 残 1/4～1/7
大皿	68	口径 14.7	口縁部は内弯し、口縁端部外面に面取りを行う。	内外面共に横ナデ。	色調 淡黄褐色 胎土 精良 焼成 硬 16トレンチ 第3層 残 1/9
	73	口径 15.3	口縁部は大きく外反し、口縁端部はやや肥厚する。	内外面共に横ナデ。	色調 淡黄褐色 胎土 精良 焼成 硬 37トレンチ 第2層 残 1/4
羽釜	74	口径 17.4	口縁部は内弯し、口縁端部が丸くおさまる。	口縁部外面は横ナデ、内面は刷毛後上方のみナデ。	色調 暗褐色 胎土 精良 焼成 硬 41トレンチ 第3層 外面に疑が付着 残1/5
	75～76	口径 75.2 18.8 76.24.6	口縁部は内弯し、口縁端部はやや内面肥厚している。	口縁部外面は横ナデ、内面は刷毛調整、76は粗い刷毛、胴	色調 茶褐色 胎土 精良

			部外面は焼付着のため詳細は不明。	焼成 75軟 76硬 75, 16トレンチ ピット 4 残1/6 76, 16トレンチ 残1/8 いずれも外面にススが付着
77		脚部下方を欠いている。	脚部は窓削り、接合部は指おさえが残る。	色調 暗褐色 胎土 1mm位の微砂を含む。 焼成 硬 41トレンチ 第3層

### 陶磁器

青磁碗	78, 79	口径 78 14.0 79 13.3	口縁部を外方に強く引き出し U縁端部は丸くおさまる。78は内面中程に一条の沈線がある。	内外面共に横ナデ。	色調 78 緑灰色 79 淡褐色 胎土 精良 焼成 硬 78, 40トレンチ 第4層 土坑4-7 残1/9 79, 14トレンチ 第3層 残1/13 いずれも文様はない。
天目碗	80	高台径 3.4	「八の字」型の高台である。	脚部外面は窓削り、他は横ナデ。	色調 淡黄灰色 胎土 精良 焼成 硬 16トレンチ 残1/2
鉢	81	口径 28.6	U縁部は緩やかに外反し、U縁端部で外面肥厚する。	内外面共にロクロナデ。	色調 淡黄褐色 胎土 2~3mmの小石を含む。 焼成 硬 16トレンチ ピット3 残1/8
信楽鉢	82	口径 29.6	口縁部は内窓する。	内外面共にロクロナデ。	色調 赤茶褐色 胎土 精良 焼成 硬 21トレンチ 残1/12
	83		口縁部は内窓する。口縁部内面下方に沈線を図らす。	内外面共にロクロナデ。内面に2木以上を単位とする条線をつける。	色調 外淡赤褐色 内赤茶褐色 胎土 1mm位の微砂を含む。 焼成 やや硬



### 第3章 高島郡マキノ町南牧野遺跡 (事業名 北牧野遺跡)

## 1 はじめに

本報告は、高島郡マキノ町北牧野、南牧野において、事業名「北牧野遺跡」として昭和54年度に実施したは場整備事業に伴う発掘調査の結果をまとめたものである。当該事業地の北半は、北牧野古墳群に近接するため現在の水田下に、墳丘の削平された古墳跡の存在が予測された。ところが調査の結果、当初遺構の検出が期待された北牧野によった地域では一片の土器片すら出土せず、予想もしなかった南牧野で遺構および遺物包含層が発見された。したがって、遺跡の性格も所在地も当初と異なることから、南牧野遺跡として報告する。

さて調査地は、国鉄湖西線マキノ駅北西約3.2kmの地点にある。さらに調査地域を詳細にのべるなら、知内川右岸の段丘上に立地し、南牧野から北牧野に至る県道287号線（小荒路、牧野、蛭口線）の東側で、北は北牧野の集落の南端から、南は南牧野の集落の北端までの範囲である。

## 2 調査の経過

調査は、滋賀県教育委員会文化財保護課技師兼康保明を担当者として、春と秋に二回、は場整備の実施に先立って行った。

第1次（春）調査は、滋賀県文化財保護協会嘱託久米雅雄（現大阪府教育委員会）を主任に、昭和54年4月19日から5月31日まで実施した。調査は、は場整備実施工区の北側に農道をはさんで境を接する墓地の周辺が、北牧野古墳群に最も近接することから、開墾などによって削平された古墳の存在を推定して試掘を行った（第1～ほトレンチ）。しかし結果は、耕土と土床を除去すると、地元で「クロボク」とよんでいる黒褐色粘質土層と砂礫層になり、遺構の存在はまったく認められなかった。そこで、水田化される以前の旧地形を確認することをも兼ねて、は場整備で削平された個々の水田に試掘坑を穿ち、遺物包含層、遺構の有無について確認を行った。その結果、大半の試掘坑では、遺物包含層および遺構は検出されなかったが、南牧野の集落に近接して中世遺物が出土した。そのため調査を南牧野に集中し、調査面を拡張して遺跡の性格を追究したところ、搅乱はうけているものの、中世の住居の一部ではないかとの結論を得た。

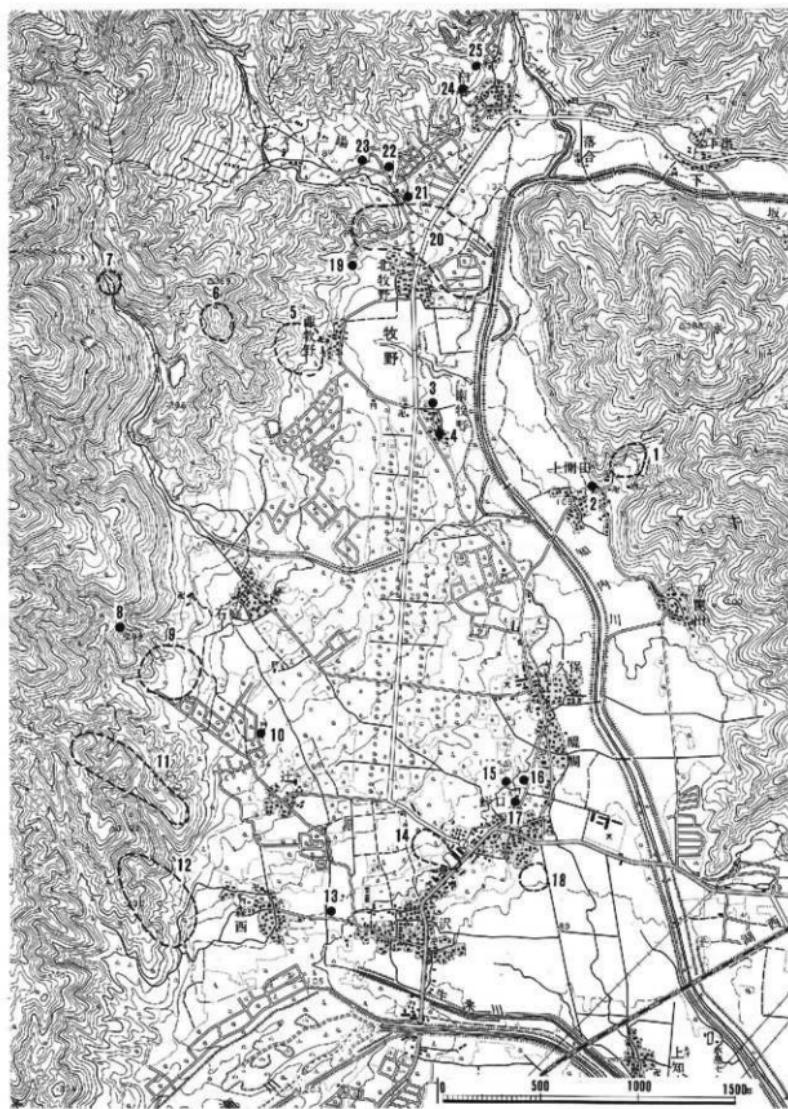
第2次（秋）調査は、昭和54年9月10日から9月24日まで、兼旗が現場を担当した。調査は、第1次調査で住居の一部と思われる石列を検出したHトレンチと、農道をはさんで相対する南側の地域を対象に行った。しかし、第1次調査地点に接する付近のトレンチでわずかに遺物が出土したのみで、その他の場所では何ら遺構、遺物は検出されなかったため調査を打切った。

## 3 歴史的環境

調査のいきさつと遺跡の性格を理解する助けとなるよう、今回はは場整備を実施した地域とその周辺に所在する遺跡についてみてみよう。

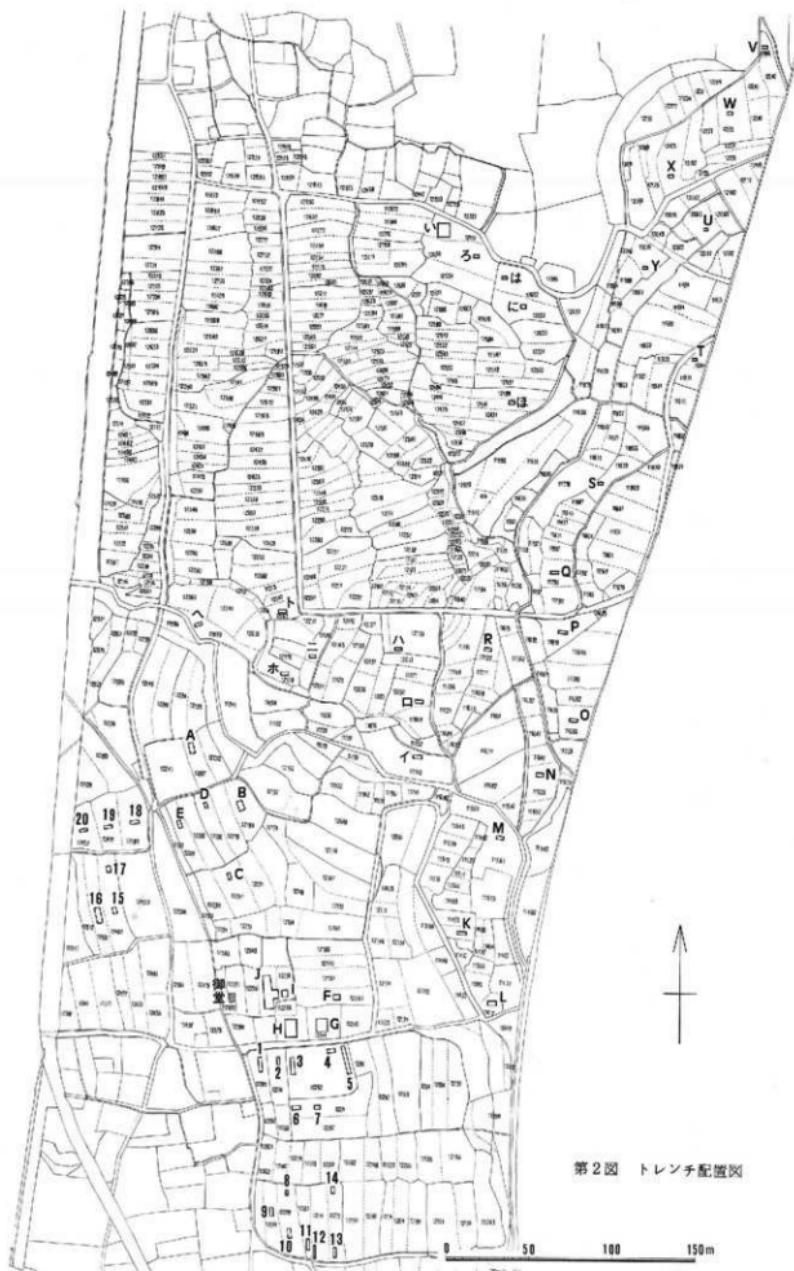
当地域においては今までのところ、縄文、弥生時代の遺跡、遺物は発見されておらず、古墳時代以降遺跡が認められるようになる。

北牧野は、集落の北側から東側にかけて北牧野古墳群が所在する。この古墳群は、横穴式石室を内部主体とする古墳時代後期の群集墳で、現在25基以上の存在が確認されている。しかし、完存するものは少なく、墳丘が削



- |            |            |            |            |            |
|------------|------------|------------|------------|------------|
| 1. 称念寺遺跡   | 2. 上間田遺跡   | 3. 南牧野遺跡   | 4. 里塚遺跡    | 5. 西牧野遺跡   |
| 6. 齊領城遺跡   | 7. 大谷川遺跡   | 8. 宮の谷遺跡   | 9. 伏ノ木遺跡   | 10. 辻畠跡    |
| 11. 田尾城遺跡  | 12. 青地山遺跡  | 13. 春西遺跡   | 14. 鮎口遺跡   | 15. 鶴澤遺跡   |
| 16. 小原遺跡   | 17. 宮遺跡    | 18. 仏性寺遺跡  | 19. 北牧野D遺跡 | 20. 北牧野遺跡  |
| 21. 北牧野A遺跡 | 22. 北牧野E遺跡 | 23. 北牧野C遺跡 | 24. 向方谷遺跡  | 25. 茶ワン山遺跡 |

第1図 遺跡位置図



第2図 トレンチ配置図

半されたり、石室の石材が露頭しているものが大半を占める。

また西牧野も、集落の背後の山麓に西牧野古墳群が所在する。この古墳群も、北牧野古墳群と同様に横穴式石室を内部主体とする後期群集墳で、17基以上所在し、なかでも壹岐原古墳は玄室に石棚のある特異なものとして注目される。

こうした二つの古墳群の前面に広がる水田が、昭和54～56年にかけては発掘調査が実施される地域である。こうしたことから、古墳群に近接するところでは削平された古墳、また、古墳群の前面に広がる水田下には、遺物の散布こそ認められないものの、古墳時代の集落跡の存在が推定されていたのである。

一方、奈良、平安時代になると、北牧野では北牧野A～E遺跡とよばれる製鉄遺跡の存在がある。この遺跡は、『続日本紀』天平宝字6年（762）2月の記事にみられる恵美押勝の贈った近江國高島郡の鉄穴との関連で注目されている。<sup>①</sup>

中世の遺跡については、本地域においてはこれまであまり注意されていなかった。ただ石造品についてみれば、南牧野の瑞光院境内に石造宝塔が所在することや、北牧野付近でI・事中に出土したと伝えられる宝塔の残欠が北牧野の東漸寺に保管されている。また、宝町時代の小石仏も、寺や墓地、あるいは畦畔に認められ、おそらくこの時期には集落の形成が十分にうかがえるのである。伝承によればこの地域の開発は、康平年間（11世紀）に源斎頼（あるいは僧西来とも伝える）が山野を開拓したと伝えられており、現在の村が古墳などの示す年代とはかなりへだたった時代の開拓によるものであるとする点興味深い。

## 4 調査の結果

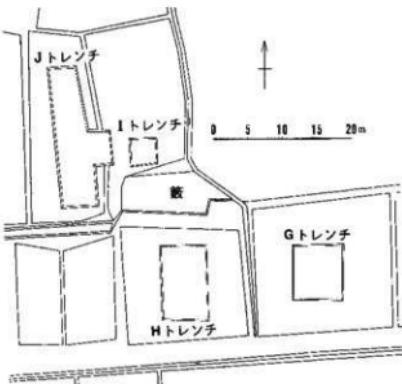
春秋2次にわたる調査で穿った試掘坑の数は、第2図に示すように57カ所におよぶ。

### （1）北牧野遺跡の調査

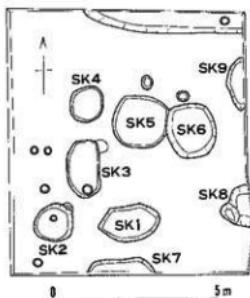
試掘坑のうち、北牧野の墓地に近接する、い、～ほ、U～Yトレンチは遺構検出の可能性が強く最も期待されていたが、全てクロボクとよばれる黒褐色粘質土と礫層からなり、い、トレンチで幅約2m、深さ約60cmの自然流路（図版18）が検出されたのみである。

### （2）南牧野遺跡の調査

南牧野の集落の北東端の水田に、小さな藪が残されている。この藪は、自然にできたものとみるとあまりにも不自然で、人為的に植えて作られたもののように感じられた。その理由は、付近の農家の内には、家の北側に風よけのために木を植え垣にしたもののがみられるからである。そこで藪の周囲に試掘坑を掘ったところ、その南側で遺物が出土したため、試掘坑を拡張して調査を進めた（第3図）。遺構は、G、H、Jトレンチで検出された。各トレンチにおける層位は第5回のとおりであるが、包含層の認められるG、Hトレンチの場合、面で遺構を追っている時は、土色の変化が明確ではなくきわめて識別しがたかった。尚トレン



第3図 G・H・I・Jトレンチ配置図

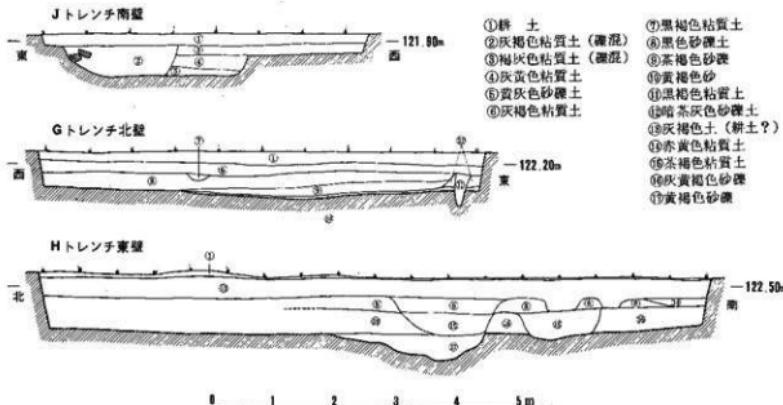


第4図 Gトレーニチ平面図  
ト内からもやはり近世の擂鉢が出土している。さて遺構の年代であるが、土坑内の埋土に認められる微量な土器片のみをもって、直ちに土坑の年代を決定することは難しい。

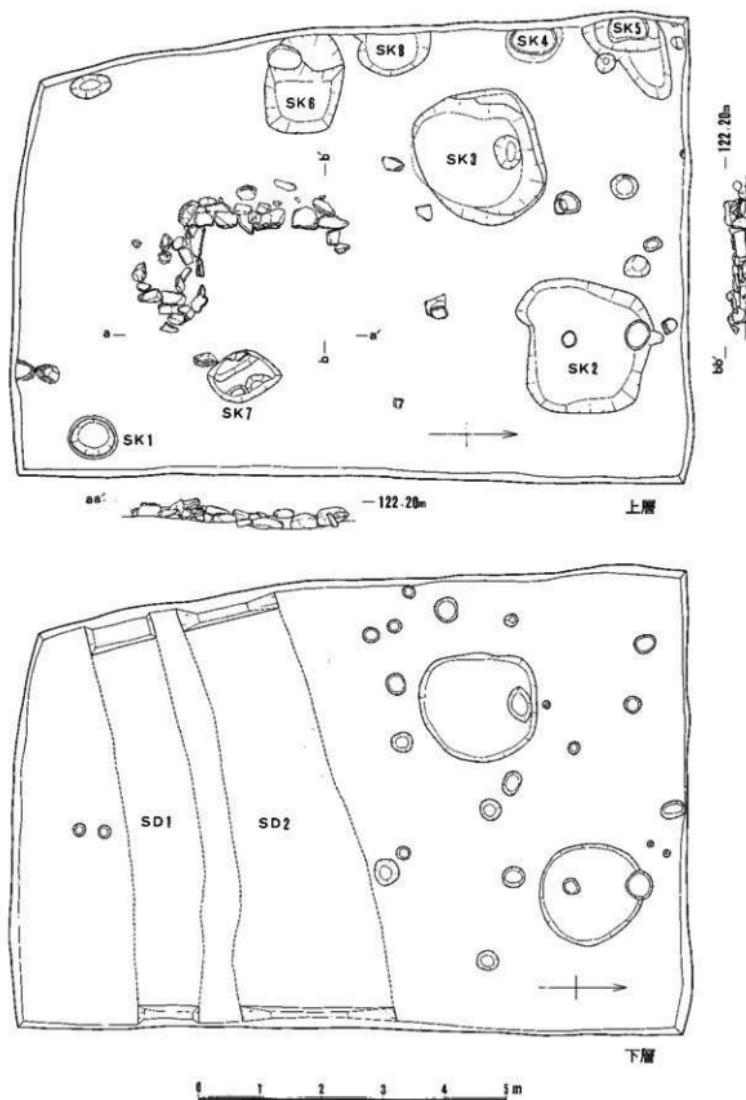
#### Hトレーニチ

土坑と石列が確認されたが、すでに述べたように遺構検出の種々な土層で、東壁の土層断面間にみられるように、掘下げすぎて失われた土坑と思われる落込みも若干ある。遺物はGトレーニチ同様、室町時代と近世のものが混在するが、各遺構を検出した面（遺構面）でとらえられる遺物は、ほぼ室町時代のものに限定される。

（土坑）SK1とSK4は、共に土坑の周囲に黄色粘土がめぐら（第6図、土坑周囲のアミ部分）、土坑内は砂で埋っていた。土坑内の遺物は微量で、SK1からは銅製の煙管の先と炭化物、SK4からは近世のものと考えられる陶磁器の小破片が出土したのみである。土坑の性格については、土坑の周囲に粘土がめぐらされていることから考えて、土坑内に桶のような木製品を埋めてその周囲に粘土を巻いて固定したのではないかと思われるが確証はない。SK1、4以外の土坑は、規模の大小はあるがこれといった特徴はなく、Gトレーニチの土坑同様、遺物の出土しないものもあり、また出土しても微量である。遺物は、SK3から天日茶碗かと思われる土器の口縁部の小破片と、SK5から近世の擂鉢の破片と錢文不明の銅錢片が出土したにすぎない。これら土坑の性格も、



第5図 J・G・Hトレーニチ土層図



第6図 Hトレンチ平面図

G トレンチ同様不明である。ただ、土坑中最大の SK 2、3 は、ゴミ穴か擾乱によるものではないかと考えている。

(石列) 唯一の遺構らしい遺構で、幅30~40cmほどの河原石を1~2石積み、東と北側の面をそろえてL字形の石列を作る。石列の東南に散在する石も、東面する石列としてL字形の石列につながっていたものであるかも知れない。なお、L字形の石列を構成する石の間から、わずかではあるが土器片が出土した。

(下層の調査) 本トレンチの遺構面は、は場整備の際に削平されるレベルにあるため、下層に遺構があるかどうかを確認するためさらに掘下げて調査を行った。その結果、上部で見落したピットと思われるものや、自然的要因によると思われるピットが検出された。また、トレンチの南側で、東西方向に流れる幅1.2m、深さ40cmの溝(SD 1)と、その北に幅1.6~2.5m、深さ40cmの溝(SD 2)とが確認された。東壁土層図でこの2本の溝の肩の落込みを見ると、SD 1の方がSD 2よりも上層に溝の肩があり、SD 2より新しいことが判る。また、SD 1の上面には石列があることから、すでに遺構形成時にはSD 1は埋っていたものと理解できる。遺物については、上層からの混入か、上層の遺構検出で見落したピットに伴うと思われるものが数片あるほか、全く遺物は含まれていなかった。溝の性格については、遺物が下層で出土しないことや、溝の方向が地形に応じていることなどから、北牧野古墳群に近い、トレンチでみられるのと同様な自然流路と考えるのが妥当であろう。

#### J トレンチ

南牧野の集落の配置から見ると、藪の外側にあたるためか、遺構、遺物はG、H トレンチにくらべ少なかった。また、G、H トレンチでは認められた遺物包含層が無く、すぐに遺構が検出された。検出された遺構のうち上坑は、大小形態は異なるが、深さ30~40cmの浅いもので、各土坑内からわずかに土師質土器片が出土した。上坑の性格は、H、G トレンチ同様不明である。また、南北方向に並ぶ直径10~20cmの円形のピットは、ピット内の上から判断して稻木の抜きあとと考えられる。

トレンチの中央部よりやや南で、G トレンチ下層の溝と同じく東流する幅約3mほどの自然流路が確認された。SK 3は、この溝と重複するが、溝が埋って後に掘込んだもので、G トレンチの上層遺構と下層の構の関係と矛盾しない。

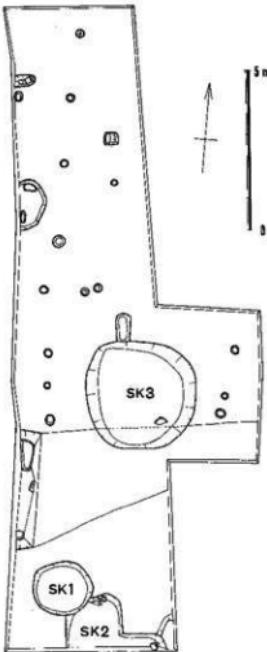
#### 第2次調査

G、H トレンチと農道をはさんで南側の地点を発掘した。当初は、H トレンチで検出された石列などに連なる遺構が続くものと期待されたが、I トレンチに包含層が続くのみで遺構はなかった。また包含層も、G、H トレンチにくらべると遺物の出土量は極めて少く、遺跡の中心部からはずれているようである。

#### (3) 南牧野遺跡・遺構小結

これまで各トレンチごとにみてきた南牧野遺跡の遺構についてまとめる」と、次のようになる。

まず共通する遺物包含層は、G、H トレンチの黒色砂礫土であるが、遺物の出土状況は層中と、遺物包含層を除去した遺構検出面上（以下遺構面とよぶ）で様相が異なる。すなわち、遺物包含層中の土器は近世の陶磁器を主体とし、遺構面上では中世——室町時代の土器がほとんどである（遺構面上においても、近世の遺物が2片は



第7図 J トレンチ平面図

ど出土しているが、おそらく遺物包含層中のものが混入したものと考えられる）。南牧野で出土した遺物は、各層、各遺構内出土のものとも小破片ばかりであるが、ローリングはうけておらず、また遺物の出土するトレントも限定されることなどから、現地点かその周辺で廻収されたものであろう。

次に遺構の年代であるが、Gトレントの説明の中でも述べたように、土坑内の埋土に認められる微量な土器片のみをもって、直ちに土坑廻収の年代にあてるのは難しいと思われる。つまり本遺跡の場合、遺構に伴う遺物の出土状況は、遺構内に埋めたり捨てたりしたものではなく、遺構が埋まって行く過程で混入したと考えるべきものである。ただ遺構面上の遺物に、ある程度の時期幅を容認すれば同時性が認められることから、石列などはこうした遺構面上の薄い遺物包含層をかぶったものと考え、遺構の年代を知る一つの手がかりを得たと思うのである。おそらく室町時代——15世紀頃を遺構の年代とし、近世には埋っていたと考えられる。土坑については、遺物の量が少ないとはいうものの、土坑内に中世と近世の遺物が混在する例は1例しかなく、かなり遺物では中世と近世が明確に分離できる。おそらく、中世遺物を含む土坑の場合は、遺構面上の遺物堆積の時期とそう相前後しない時期の所産で、遺物包含層の形成された近世には埋っていたのではないだろうか。

遺構の性格については不明な点が多いが、中世の遺構のうちで石列は、現在の集落に近接して検出されたことや、中世の遺物の出土範囲が限定されることなどと関連して、室町時代の住居の一部ではないかと推定される。また、各種の土坑については、その当時のゴミ穴か搅乱によってできたものではないだろうか。

## 5 出土遺物

出土遺物は、全て南牧野の集落北東部に設けたトレントからの出土で、中でもG、H、Jトレントに集中している。しかし、出土した遺物はいずれも小破片で、出土総数も約60点ほどである。

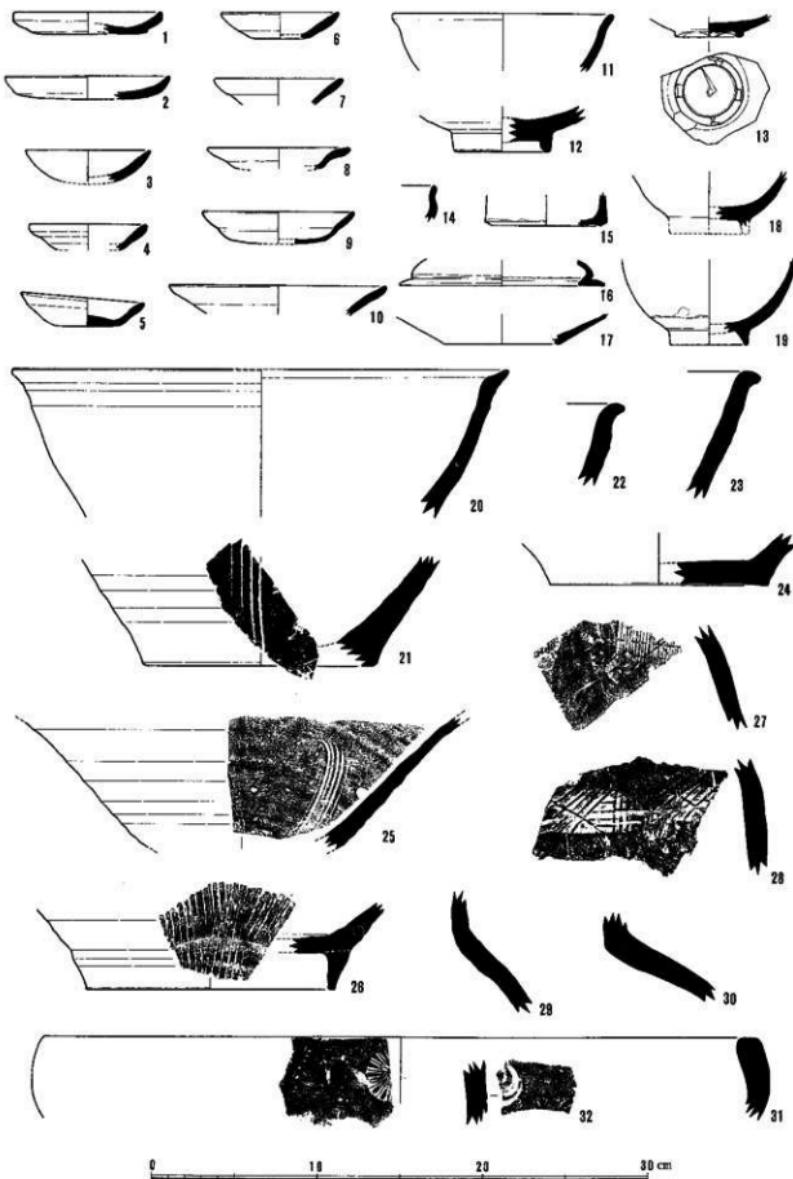
### (1) 土師器・土師質土器

①、②は、法量、形態、口縁端部に面取りを行う手法など、同じ高島郡内では高島町中ノ坊遺跡第102トレント出土の土師器小皿（I類）に類似する。他の皿と形態や法量も異なり、細部の手法にも相違がある。おそらく、本遺跡出土遺物中で最も古く、鎌倉時代（13世紀）ごろのものと思われる。

③～⑨は、直径7～8cm代の小形の皿で、⑥、⑦、⑧は口縁が外方へ開き、口縁部の器壁が肥厚する、底部が平らかあるいはやや上げ底になるなど、室町時代の土器の特徴を示している。⑩は法量こそ異なるが、⑥、⑨と形態や、口縁端部をわずかにつまむなどの手法に共通する特色が認められることから、小皿と同時期のものと考えてよいだろう。これら土器は、高島町中ノ坊遺跡第20トレント出土のものより後出的な要素をもち、かつ遺構あるいは遺構面上の共伴遺物などから考えて、室町時代（15世紀頃）の所産と推定される（なお⑩については、④～⑩、⑨と法量において類似を示すが、形態的には特色はない。石列内の共伴遺物よりみて、④～⑩などと同じ時期のものと理解している）。

### (2) 陶磁器

（近世） ⑪、⑫は形態と土器の外面に煤が付着していることなどから、行平とよばれている片口や把手のついた土鍋の蓋と底部の破片である。⑬は、特色ある光沢のない青緑色をした碗で、他に⑭、⑮の信楽と思われる擂鉢や、小破片のため器形のわからない⑯の底部、染付などが新しい時期の遺物を構成する。近世でも、江戸時代後期以降の新しい時期のものではないだろうか。



第8図 南牧野遺跡出土土器実測図

#### (中世)

擂鉢（ゆ、ゆ～ゆ）、甕（ゆ、ゆ）、壺（ゆ）があるが、擂鉢は軟質の物を除いて、胎土、色調などからみて全て信楽であり、壺も図示できなかった数個体分の体部の破片も含めてやはり信楽であった。ただ甕のみは、胎土、色調、押印の文様などからみて、信楽とは判定しがたく、あえて窯地を比定するなら常滑ではないかと思われる。

陶器の年代についてみると、各器形とも小破片であるが、比較的形態の特色がつかめる擂鉢では、口縁部を外方へ丸く引き出しておさめる作りは、室町時代後期のものにみられる、口縁内面に半縁の内凹みのしっかりした面をもつものより、型式的に占い様相を示しているものと思われる。

輸入陶器としては、⑩、⑪の青磁碗が認められるが、同一個体の可能性もある。この種の無文の青磁碗は、今津町岸脇遺跡からも出土している。しかし、両者を比較すると、底部の施釉法に、本例は高台外面まで施釉するに対し、岸脇遺跡例は内面にまでおよんでおり、本例の方がやや占い様相を示している。

#### (3) 瓦質土器

火呑の口縁部付近の破片で、器体のカーブから復原すると約41cmほどの直径のものであろう（⑫）。破片は2点あり、共に押印が認められる。巻は菊花文であるが、中房は無く、花弁は粗雑で残りの悪い部分では、中心部より介のなごりとをどめる放射状の直線のみの退化したものである。巻は巴文で、巴の頭部が失われているが、巴の尾の太く短い感じは室町時代以降の軒丸瓦の文様に似る。

#### (4) 石製品

幅2.9cm、長さ13.0cm、厚さ2.1cm（最大）の長方形をした、表面のなめらかな仕上砥石が1点出土している。この砥石の片面半分は、使用のため最も厚い部分の半分ほどにすり減っている。石材はアジノール板岩で、Hトレンチの遺構面上から出土した。

#### (5) 金属製品

HトレンチのSK1より煙管と釘釘の鉄製品の破片、SK5より鐵文不明の穴あき鉄が各1点ずつ出土した。

煙管は銅製で雁首と吸口の部分が出土した。形態は近世の出土煙管としては一般的なもので、雁首と羅宇の接続部に加工を施す。管は、薄い銅板を丸めて接合したものである。

#### (6) 遺物小結

南牧野遺跡の土器を大別すると、鎌倉時代と室町時代、江戸時代に分けられる。鎌倉時代のものは、すでにみてきたように土師器の小皿であ

り、おそらく13世紀も中～後半までのものであろう。室町時代のものは、出土状況や土師器からみてもそういう年代幅のあるものではなく、おそらく15世紀頃とみてよいだろう。江戸時代のものは、特に根拠とするだけの資料をもたないが、近年の県下各地の調査例からみて、後期以降のものと思われる。

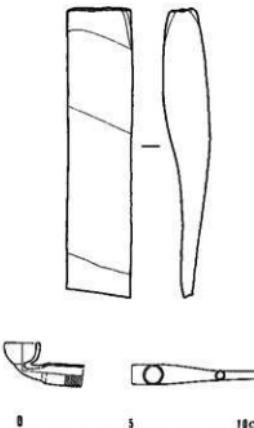
第9図

Hトレンチ出土砥石・煙管実測図

り、おそらく13世紀も中～後半までのものであろう。室町時代のものは、

出土状況や土師器からみてもそういう年代幅のあるものではなく、おそらく15世紀頃とみてよいだろう。江戸時代の

ものは、特に根拠とするだけの資料をもたないが、近年の県下各地の調査例からみて、後期以降のものと思われる。



## 6 要 説

昭和54年度の調査の結果、当初予測された北牧野古墳群の一部が削平され水田化しているのではないかという見解は否定された。一方、南牧野遺跡の新たな発見は、中世の村を考えるうえに一つの素材を与えてくれた。ここでは、南牧野遺跡の調査結果を踏まえて室町時代の村について考えてみたい。

中世の村落を求めて、昭和53年よりは場整備に関連して機会あるごとに湖西北半のマキノ町、今津町の集落の周辺に試掘坑をあけて行った。その結果、室町時代の遺物の散布が認められることはあっても、村を構成する個々の住居などの遺構は未だ検出されていなかった。しかし、幸いにも南牧野遺跡の場合、集落の一角を思わせる遺構が検出されたことなどから、現集落が中世以来現在の位置をほとんど動くことなく今日に至っていることを、具体的に示すことができたのである。おそらく、現集落の周辺で中世の遺物の出土したところでは、中世の住居跡などはほとんど、現在の集落と重複して所在すると推察できるのである。

さて次に、出土した土器をみると、出土量こそごくわずかではあるが、一応輸入品をも含めて各種の土器が認められるのは、いったい何を意味しているのだろう。現在、輸入陶磁器の出土は各地において珍しいものではなくなってきているが、例えば中世の墓地の副葬例で見ると、墓地の構成員に一般的に認められるといったものではない。食膳具の場合、材質的にも椀の座を木地椀や漆椀に譲ってしまった室町時代において、村における青磁碗の使用は、特定の用途なりある地位の人々に限定されていたとは考えられはしないだろうか。また壺にしても、近江で生産される信楽の陶器をあえて使用していないのは、信楽が吸水性が高く液体の保存に適していないことを前提に、常滑を使用している節がある。つまり、南牧野の村は、用途と要求に応じた陶器を入手する手段を持っていたようである。それは、湖上の水運の拠点の一つである海津と南牧野が距離的にそうへだたっていないことや、街道に沿った村といった立地の良さもあるが、そうした交通路との関係とは別に、流通する商品を購入し消費する経済力の一端が認められる。これは、今津町岸駒遺跡などの調査結果でも、同じような土器の組成傾向を示している。これは近江が京に接しており、かつ湖西の場合、越前、若狭への陸路、琵琶湖を介しての近江各地との水運など、交通路として物資の往来を生み出す位置にあり、こうした環境の中からおそらく農、漁業以外にも商業や運輸などへの発達があり、地域的に豊かさを持つに至ったのではないかろうか。マキノ町の中世の各村の経済力を示す例として、現在地表で観察できる石造品をみてみよう。町内の中世の石造品を一齊しただけでも、上開田、南牧野、北牧野（残欠）に宝塔、姫口（残欠）、中庄（残欠）に宝篋印塔が見られる。さらに室町時代中～後期の小形の石塔、石仏の増加は著しい。宝塔、宝篋印塔については、出岡香逸氏の言わるよう⑤に近江の石造美術の中心を占めており、複雑な構造の塔形式が選ばれたのは、単に中世近江における好みだけではなく、造立者の経済的基礎の豊かさによるものであり、マキノ町においても同様に考えてよいだろう。それとは別に、室町時代中～後期の小形石塔の増加は、墓地での供養塔としての意味ももっている。これら石造品の造立者は、けっして特別な人々ではなく、その数から単純に考えても村を構成する人々を抜きに語ることはできない。この現象については、墓地の構成から庶民層の地位と経済力の向上によるものとして説明される。また、湖東八日市市今掘町の今掘文書の永正17年（1520）の村控にみられる、罰則が金銭や米などの支払いで済まされている点などから、「すべて罰金主義であることは、ある意味では村の編成がきわめてドライなものであり、何どとも金品で解決する」という、商業・農業兼業の村落である」と指摘されている。やや南牧野遺跡と年代的に差はあるが、こうした他の姿が早く湖西にも存在し、経済力を向上させつつあったのだろう。そうした状況の中にあっての輸入陶磁器の位置は、町の文化の香りを伝えるものであったに迷いない。また、水壺の選択一つをとっても、

単に陶器の流通網としてだけでなく、購買力を持つことによって製品を選定するだけの余裕が生じつつあったのであろう。極論するなら、単に水を溜るだけの岩器であるなら、桶などの木器をもってしてもその用をなすはずである。

南牧野遺跡を手がかりに、一つの中世像を描いてみた。中世の村が、現在の集落立地とほとんど変りない場合、今回の調査のような形からのアプローチが、村自体を掘れないまでも、集落立地、耕地の開発、生活の様相などを一つ一つ押えて年代などを与えて行くことができる。この、一見落穂拾い的な発掘調査の蓄積と、文献や石造美術品などの調査が互いに補いあって、中世村落の実態が明らかにされる日もそう遠くないものと思われる。

#### 註

- ① 森浩一「滋賀県北牧野製鉄遺跡調査報告」（『若狭・近江・濃岐・阿波における古代生産遺跡の調査』、同志社大学文学部考古学調査報告第4冊、同志社大学考古学研究室、昭和46年）
- ② 兼康保明「高島町中ノ坊遺跡」（『は場整備関係遺跡発掘調査報告書』V、滋賀県教育委員会・滋賀県文化財保護協会、昭和53年）
- ③ 室町時代の土師質土器の年代観については、大津市延喜守東塔法華経持院跡出土資料を標式として用いた。  
兼康保明「法華経持院の調査——室町時代の遺物を中心に——」（第6回広島考古学研究会レジメ、昭和56年）
- ④ 本報告書、第4章。
- ⑤ 田岡香逸「近江の石造美術」6（民俗文化研究会、昭和48年）
- ⑥ 坪井良平「山城木津惣墓標の研究」（『考古学』10-6、東京考古学会、昭和14年）  
田岡香逸「石造美術概説」（総芸舎、昭和43年）
- 木下密連「石塔彌」（『日本仏教民俗基礎資料集成』第4巻 元興寺極楽坊IV、中央公論美術出版、昭和52年）
- ⑦ 仲村研「湖東・湖西の中世村落」（『湖団と文化』第5号、滋賀県文化体育振興事業団、昭和53年）

## 南牧野遺跡出土土器観察表

器 形	No	法 量 (cm)	形 態 の 特 徴	手 法 の 特 徴	備 考
土 師 質 土 器					
小 盆	1	口径 8.8 器高 1.4	○体部は内青気味に外上方に のび、端部は尖り気味である。 ○底部はやや上げ度で、外面に 縁をもたせる。	○口縁部内外面、及び、底部 内面は横ナデ。 ○底部外面は不調整。	(色調) 淡黄褐色 (胎土) 精良 (焼成) 硬 (残部) 1/5 (地区) 埼玉
	2	口径 9.9 器高 1.4	○体部は外上方にのび、口縁 端部は丸くおわる。 ○底部は平底で丸味をもつ。	○口縁部内外面、及び、底部 内面は横ナデ。 ○底部外面は不調整。	(色調) 淡黄褐色 (胎土) 精良 (焼成) 硬 (残部) 1/6 (地区) 1トレンチ包含層
	3	口径 7.4	○体部は内青気味に外上方に のび、口縁端部は尖り気味 である。 ○底部は丸味をもつ。	○口縁部内外面、及び、底部 内面は横ナデ。 ○底部外面は不調整。	(色調) 黄白色 (胎土) 精良 (焼成) 硬 (残部) 1/10 (地区) Hトレンチ石組内
	4	口径 7.1 器高 1.6	○体部は外青気味に外上方に のび、口縁端部は丸くおわ る。	○口縁部内外面、及び、底部 内面は横ナデ。 ○底部外面は不調整。	(色調) 黄灰色 (胎土) 精良 (焼成) 硬 (残部) 1/10 (地区) Hトレンチ包含層
	5	口径 7.3 器高 2.1	○体部は外青気味に外上方に のび、端部は丸くおわる。 ○底部は平底で丸味をもつ。	○口縁部内外面、及び、底部 内面は横ナデ。 ○底部外面は不調整。	(色調) 黄白色 (胎土) 精良 (焼成) 硬 (残部) ほぼ完形 (地区) GトレンチSK K
	6	口径 7.0 器高 1.7	○体部は内青気味に外上方に のび、口縁端部はやや尖り 気味に丸くおわる。	○口縁部内外面、及び、底部 内面は横ナデ。 ○底部外面は不調整。	(色調) 黄褐色 (胎土) 精良 (焼成) 硬 (残部) 1/10 (地区) JトレンチSK 2
	7	口径 7.6	○体部は外上方にのび、口縁 端部は丸くおわる。 ○底部欠失。	○口縁部内外面横ナデ。 ○体部外面仕上げナデ。	(色調) 淡黄褐色 (胎土) 精良 (焼成) 硬 (残部) 1/10 (地区) JトレンチSK 3
	8	口径 8.4 器高 1.3	○体部は屈曲をもち外上方に のび、口縁端部は丸くおわ る。	○摩滅のため不明瞭。	(色調) 黄褐色 (胎土) 精良 (焼成) 硬 (残部) 1/10 (地区) JトレンチSK 1
	9	口径 9.0 器高 1.2	○体部は屈曲をもち外上方に のび、口縁端部は丸くおわ る。 ○底部は上げ度である(ひず みか?)。	○口縁部内外面、及び、底部 内面は横ナデ。 ○底部外面は不調整。	(色調) 淡黄褐色 (胎土) 精良 (焼成) 硬 (残部) 1/6 (地区) JトレンチSK 1
	10	口径 13.0	○体部は外上方にのび、口縁 端部は丸くおわる。 ○底部は欠失。	○口縁部内外面横ナデ。 ○体部外面不調整。	(色調) 淡黄褐色 (胎土) 精良 (焼成) 硬 (残部) 1/20
大 盆					

				(地区) J トレンチ SK 1
<b>陶 磁 器</b>				
碗 は か	1 1 (青磁)	口径 13.2	○体部は内窓気味であり、口縁部を外削させ、口縁端部は丸くおわる。	○内外面ロクロナデ。  (色調) 淡緑色 (胎土) 精微 (焼成) 蠕 (残部) 1/10 (地区) H トレンチ石組内
	1 2 (青磁)	底径 5.0	○体部は内窓気味に外上方にのびる。 ○底部は高台をもち内側に向をもたせる。	○内外面ロクロナデ。  (色調) 緑色 (胎土) 精微 (焼成) 硬 (残部) 1/5 (地区) H トレンチ遺構面
	1 3 (墨磁)	底径 3.8	○体部は内窓喜味に外上方にのびる。 ○底部は高台をもち外側に向をもち、4ヶ所を削る。	○内外面ロクロナデ。 ○高台には4ヶ所ヘラによる削りがみられる。  (残部) 2/3 (地区) 表採 窓邊ね焼きの痕跡を残す。 (色調) 白色 (胎土) 精微 (焼成) 硬
	1 4		○体部は内窓気味で、口縁部直下がやくびれ、窓部は丸くおわる。	○内外面ロクロナデ。  (色調) 茶褐色(鉄釉) (胎土) 精微 (焼成) 硬 (残部) 1/10 (地区) H トレンチ SK 3
	1 5 底径 6.6		○体部は上方にまっすぐにのび底部は上げ底である。 ○外面地に半廻面をもつ。	○内外面ロクロナデ。  (色調) 赤褐色 (胎土) 精微 (焼成) 硬 (残部) 1/10 (地区) H トレンチ
行 平	1 6 口径 9.2 (美)		○内窓する体部をもち、L1縫窓部外に横に突出する幅広い面をもたせる。	○内外面ロクロナデ。  (色調) 赤褐色 (胎土) 咖茶褐色 (胎土) 精微 (焼成) 硬 (残部) 1/10 (地区) H トレンチ包含層 臺山縁部外面スス付着
	1 7 底径 6.6		○体部はまっすぐに外上方にのびる。	○内外面ロクロナデ。  (色調) 黒灰色 (内面は黄白色) (胎土) 精微 (焼成) 硬 (残部) 1/10 (地区) H トレンチ包含層 臺外面にススの付着?
碗	1 8 (窓戸 ・美濃 系)		○体部は内窓気味で外上方にのびる。 ○底部は高台をもつが欠失する。	○内外面ロクロナデ。  ○貼付け高台。  (色調) 淡黄緑色 (胎土) 精微 (焼成) 硬 (残部) 1/3 (地区) 2 トレンチ第3層
	1 9 底径 4.2		○体部は内窓気味に外上方にのびる。 ○底部は高台をもち窓部は方	○内外面ロクロナデ。  (色調) 青緑色 (胎土) 精微 (焼成) 硬

			形状におわる。		(残部) 1/3 (地区) Hトレンチ造構面直上
描 鉢	2 0	口径 2 6.2	○口縁部は外上方につまみ出し丸味をもつ。 ○休部は内寄気味に内下方にのびる。	○口縁部内外面クロナデ。 ○体部内外面不調整。	(色調) 淡黄色 (内面) 黒み帯びる (胎土) 精良 (焼成) 軟 (残部) 1/10 (地区) 表探 土上研磨か?
	2 1 (信頼)	底径 1 3.6	○休部は外上方にのびる。 ○底部は平底である。	○体部内外面クロナデ。 ○底部外周不調整。 ○内面に4条の溝が刻まれる。 ○内面は使用のため平滑である。	(色調) 赤褐色 (胎土) 精微 (焼成) 硬 (残部) 1/10 (地区) Hトレンチ造構面直上
	2 2 (信頼)		○口縁部は外反し端部を丸くおわる。 ○休部は内寄気味に内下方にのびる。	○内外面クロナデ。	(色調) 赤褐色 (胎土) 精微 (焼成) 硬 (残部) 1/20 (地区) GトレンチSK2
	2 3 (信頼)		○口縁部は外反し端部を丸くおわる。 ○休部は内寄気味に内下方にのびる。	○内外面クロナデ。	(色調) 赤褐色 (胎土) 精微 (焼成) 硬 (残部) 1/20 (地区) GトレンチSK1
	2 4 (信頼)	底径 1 3.2	○休部は外上方にのびる。 ○底部は平底である。	○体部内外面、及び、底部内面はクロナデ。 ○底部外周は不調整。 ○内面はたいへん平滑である。	(色調) 赤褐色 (胎土) 精微 (焼成) 硬 (残部) 1/5 (地区) GトレンチSK1
	2 5 (信頼) ?		○休部は外上方にまっすぐにのびる。	○内外面クロナデ。 ○内面に7条の溝が下より上に向って刻まれる。 ○内外面輪がかかる。	(色調) 紫褐色 (胎土) 精良 (焼成) 硬 (残部) 1/20 (地区) Gトレンチpit
	2 6 (信頼)	底径 1 4.2	○休部は外上方にのびる。 ○底部は平底で、高台は内下方にのび、端部は方形状におわる。	○内外面クロナデ。 ○底部は貼り付け高台。 ○内面に6条の溝が刻まれる。	(色調) 暗茶褐色 (胎土) 精微 (焼成) 硬 (残部) 1/10 (地区) HトレンチSK5
鑑	2 7 (常滑) ?		○肩部の部分	○内外面クロナデ。 ○外面に刻印を押す。	(色調) 淡灰色 (胎土) 精微 (焼成) 硬 (残部) 1/20 (地区) Iトレンチ包含層
	2 8 (常滑) ?		○体部の部分	○内外面クロナデ。 ○外面に刻印を押す。	(色調) 赤褐色 (胎土) 精微 (焼成) 硬 (残部) 1/10 (地区) GトレンチSK3
鑑	2 9 (信頼)		○頸部の部分	○内外面クロナデ。	(色調) 赤褐色 (胎土) 精微

				(焼成) 硬 (残部) 1/20 (地区) H トレンチ遺構面
黒 30		○頸部の部分	○内外面ロクロナデ。	(色調) 淡黄灰色 (胎土) 精微 (焼成) 硬 (残部) 1/20 (地区) H トレンチ遺構面 直下
火 命	31 口径 41.0	○口縁部は内寄し端部は平坦におわる。	○口縁端部上面、外面は横方向のヘラ磨き。 ○口縁部内外面ロクロナデ。 ○外面に菊花文を刻印。	(色調) 黒灰色 (胎土) 精良(瓦質) (焼成) 硬 (残部) 1/8 (地区) H トレンチ遺構面
	32	○口縁部の部分	○内外面ロクロナデ。 ○外面に巴文を刻印。	(色調) 淡墨灰色 (胎土) 精良(瓦質) (焼成) 硬 (残部) 1/20 (地区) H トレンチ石組内

## 第4章 高島郡今津町岸脇遺跡 (事業名 心妙寺遺跡)

## 1 はじめに

本報告は、高島郡今津町岸脇で実施した、昭和54年度の団体営ほ場整備に伴う発掘調査の結果をまとめたものである。

調査は、「滋賀県遺跡目録」（昭和40年度版、滋賀県教育委員会編）に標示されている地点——心妙寺遺跡（寺院伝承地）として実施した。ところが「心妙寺」の小字名と伝承をもつ場所は、台帳標示の地点より約250m東の岸脇と井ノ口との境界に近い場所であることが判った（なおこの地点は、同年県営ほ場整備に伴い「妙見山遺跡」として調査を実施した）。また、本調査の結果、検出された遺構等から考えて、寺院跡としての確立たる証拠は認められず、むしろ現在の岸脇の集落との関係の方が密接であり、遺跡名としては岸脇遺跡とする方が妥当ではないかと考える。

## 2 位置と環境

今津町岸脇は石田川の左岸段丘上に所在し、国道303号線と161号線との合流点より北西約2kmのところに位置している。集落の西には隣接して岸脇神社が鎮座し、東には平野部に独立して存在する妙見山の丘陵、北方には赤坂山・箱館山、南方には饗庭野丘陵をのぞむ景勝の地である。付近は明治末年に耕地整理にかかっているほか、開拓地もあり、旧地形に若干の変化が認められる。



第1図 遺跡位置図

当該遺跡地は、岸脇の集落の北側に接して認められるが、周辺遺跡の主要なものについてみると、西約 250 m にある「心妙寺」の小字と伝承を持つ場所で、古墳時代中・後期と平安時代の住居跡が調査されている。また、「心妙寺」と上郷川をはさんで対岸の妙見山には尾根上に 10 基からなる木棺葬群と推定される妙見山古墳群が所在する。さらに石田川をはさんで東南東には、弥生時代から平安時代までの集落・古代の郷倉と推定される遺構が認められた弘川遺跡、嘉吉年間にあったという宮内大輔橋義忠の高田館跡伝承地、北の赤坂山南裾には古墳時代後期の酒波古墳群、酒波寺遺跡などがあげられる。またそれ以外にも、赤坂山、箱館山裾部や要庭野丘陵部に沿って多数の古墳が分布し、西明寺遺跡、沙弥寺遺跡、興福寺遺跡、コクリュウ寺遺跡、梅ヶ原遺跡などの寺院跡、寺院伝承地が知られている。

### 3 調査の経過

調査は滋賀県教育委員会文化財保護課技師兼康保明を担当者とし、夏期実施区域を第 1 次調査として昭和 54 年 5 月 15 日から 6 月 22 日まで、滋賀県文化財保護協会嘱託本町修平（現彦根市教育委員会）を主任に実施した。また通常実施区域は第 2 次調査として同年 10 月 2 日から 24 日まで、滋賀県文化財保護協会調査員山口順子（現滋賀県埋蔵文化財センター）、藤野道成によって実施した。

調査の方法は、遺跡が伝承地であるため、その規模、内容などがまったく不明なため、第 1 次調査では場整備によって削平をうける水田に、バックホウで 1 ~ 29 番まで順次試掘坑を穿ち、必要に応じて試掘坑の面積を広げて遺構、遺物包含層の有無について確認を行った。その結果、岸脇の集落の北側を東西に走る道路に沿って溝状遺構が存在すること、同じく溝状遺構の北側に近接して少量ではあるが中世の遺物の散布地が認められたため、工事によって削平をうけ損壊する場所についてのみ、トレンチを拡張して精査した。

第 2 次調査では、第 1 次調査で検出した溝状遺構の西側延長部分と、岸脇の集落の西端——岸脇神社の北東に近接する水田に残る「塚」の伝承地を調査した（A ~ E トレンチ）。

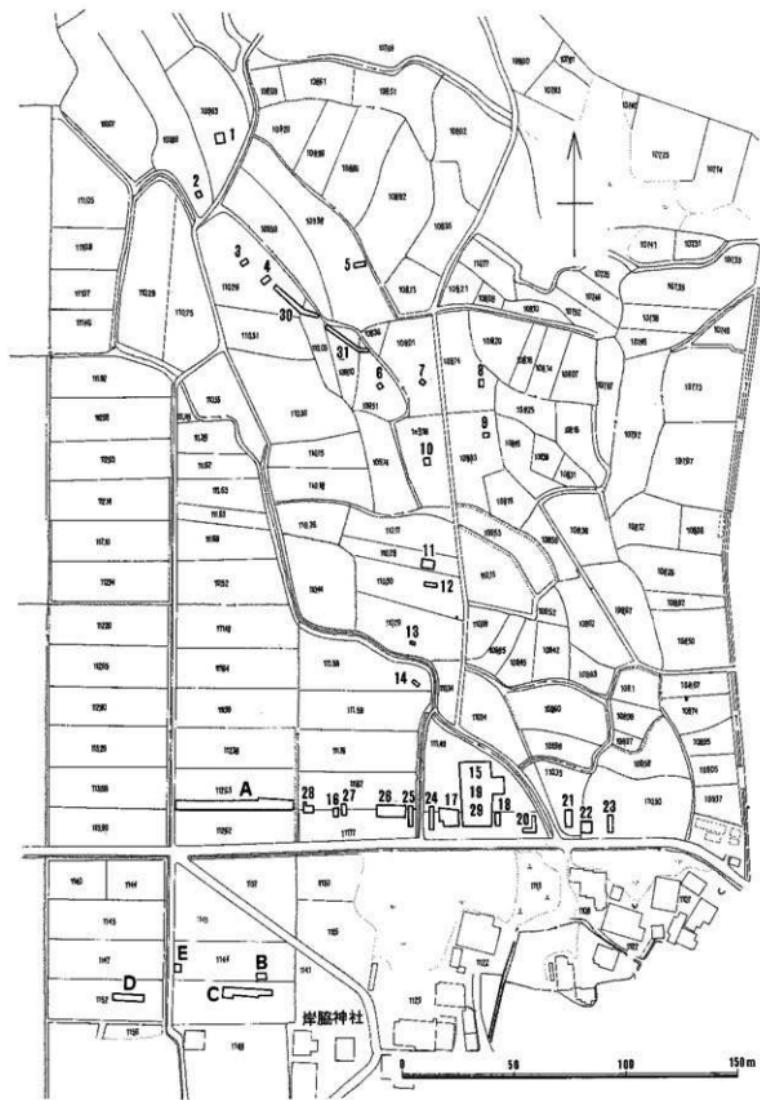
なお調査にあたっては、今津町公民館、今津町農地改良課、地元岸脇の方々から援助を得た。調査・整理にあたっては、船内宏司、越出佑代子、田中正彦、米田実、松井正規、高田一弘、出口秀夫諸氏の協力を得た。また調査中、地元河原田健一氏からは種々御配慮を賜わったほか、滋賀民俗学会の青沼見次郎、川村博氏から「温氣抜き」についての助言をいただいた。記して諸氏、諸機関に厚くお礼申しあげたい。

### 4 調査の結果

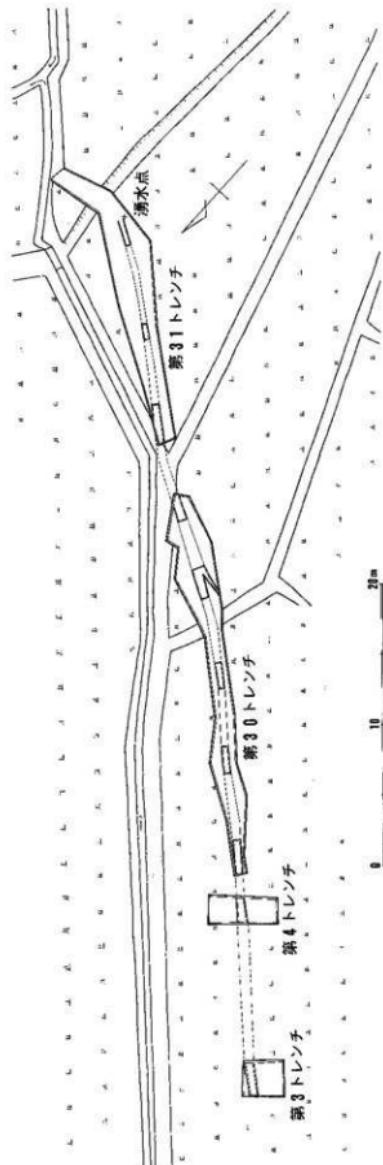
調査地域内は、北側の上郷川寄りの場所は湿田で湧水点も高く、標高 108 m 台の水田に穿った第 5、7 ~ 10 トレンチでは表土を除去すると湿地帯独特の粘りの強い青灰色粘土となり、トレンチによっては地下水の圧力で調査面がふくれ上ったり、あるいは水が湧き出すものもあった。そうした水田より少し高い場所の水田に設定した第 3、4、30、31 トレンチでは、耕土下に「温氣抜き」と思われる溝状遺構が検出された。一方、標高 110 m 以上の水田になると、耕土下は赤土層となる。また、遺物の散布が認められた第 15、19、29 トレンチは各々調査面積を拡大して一つのトレンチとして調査したが、明確な遺構は検出されなかった。

#### 1. 温氣抜き

「温氣抜き」は、第 3 トレンチで耕土を除去した際、調査面の粘土層に淡く灰色に変色した柔らかい土の入



第2図 岸藍遺跡トレンチ配置図



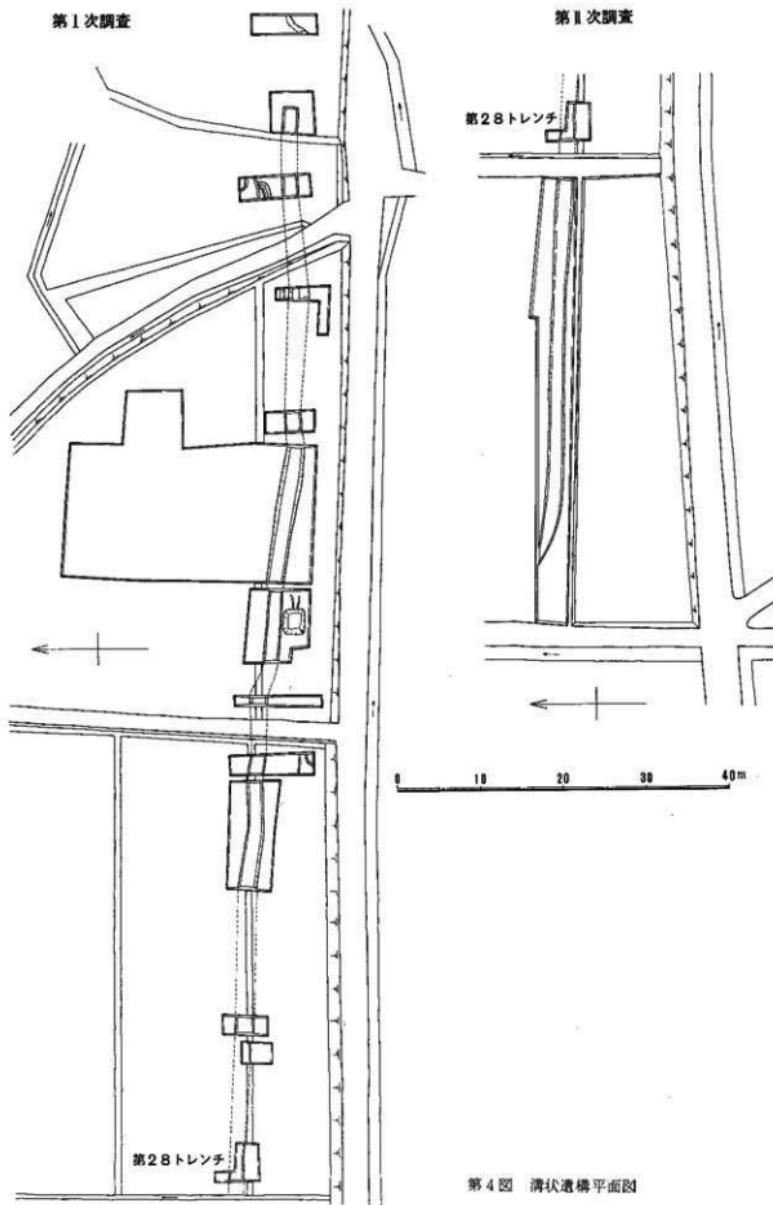
第3図 「温気抜き」平面図

った溝状のプランが認められたことから、第4、30、31トレンチとその延長を求めて調査していくと、各トレンチで続けて検出された。溝の幅は約60cm、深さは約60cmで、第31トレンチの南に行くにしたがって浅くなる。溝の底のレベルも北側の第4トレンチの方が第31トレンチのものより高く、「温気抜き」に集まつた水は北側（北東）から南側（南東）へ流れていったことが判った。途中第30トレンチでは、別の溝が合流する。また、第31トレンチの溝の南端部付近に地下水の湧水点（第3図、第31トレンチ溝南端の×印）が認められた。

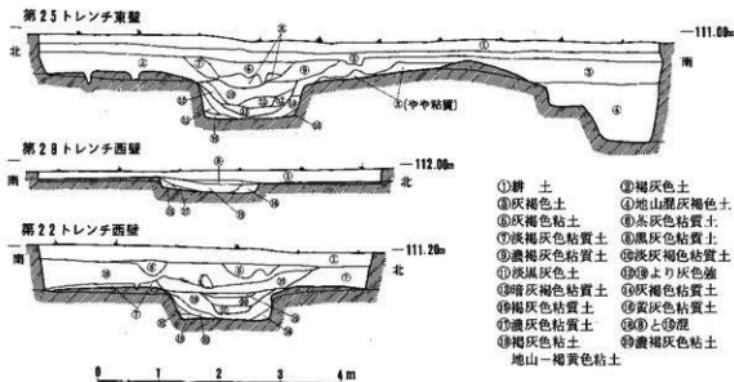
この溝は素掘りで、壁面はほぼ垂直に掘りこまれ、底面は平坦である。おそらく検出状況から考えて、年代は不明であるが現在の水出に伴うものとして理解できる。

## 2. 溝状構造

第1次調査において、岸脇の集落の北——井戸口から岸脇を通って梅ヶ原に至る道路の北側に、第16トレンチを設定したところ、トレンチ内の北端で地山を掘り込んだ落込みの肩を検出した。この落込みは、後に調査が進展するにつれて、溝状構造の南肩であることが判った。次に第16トレンチから50m東に第17トレンチを設けたところ、幅約2m、深さ約70cmほどの溝状構造を検出した。そこで、さらに溝状構造の範囲を確認するため、第18~29トレンチまで順次設定し発掘調査を行なった。その結果、溝状構造は幅約2mで東西に長く伸びていることが判り、第22トレンチではその東端が確認された。第2次調査では第28トレンチの西側にAトレンチを設定したところ、同じ溝状構造の続きを検出することができた。なおこの溝状構造はトレンチの西側になるとついに北にカーブするため、西端は確認することはできなかった。しかし、溝状構造は西に行くほど浅くなることから、Aトレンチの西端付近では終了するのではないだろうか。なおこの溝状構造の底部のレベルは、西の方が東より高く、東へ流れることが確認されている。また、どのトレンチにおいても、溝状構造の壁（側）面は鋭利な工具によっ



第4図 溝状遺構平面図

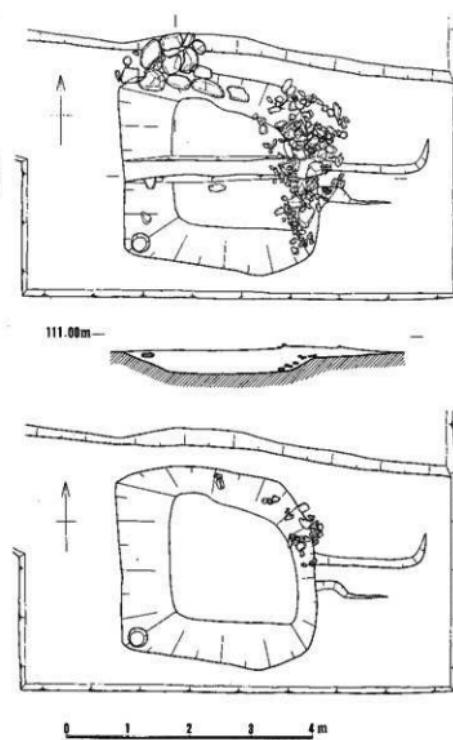


第5図 第22・25・28トレンチ土層図

て掘り込まれたようにすき  
りとした様相を示しており、  
底面もほぼ平坦である。また、  
溝状遺構から遺物はほとんど  
出土しておらず、わずかに第  
22トレンチで底部付近より土  
師器の皿、壺、須恵器の壺の  
計3点が出土したのみである。

その他溝状遺構に接して、  
第20、21トレンチでは、溝状  
遺構の北側に深さ20cmほどの  
落ち込みがあり、あるいは小  
規模な溝になる可能性がある。  
また、第25トレンチでも溝状  
遺構の南側で、最も深い部分  
で約1mほどある落ち込みを  
検出したが、東隣の第24トレン  
チではその続きが認められ  
ないため、どのような形状を  
示すものか決めがたい。

第17トレンチでは、溝状遺  
構の南側に接して→辺3mほ  
どの方形の土坑があり、土坑  
の北側の軒には縦約20cm、横



第6図 第17トレンチ土坑実測図

約40cmほどの石がならべられたような状態で検出された。また、同じ土坑の東側の肩付近にも直径5~10cmほどの石が多数検出されたが、土坑内からは何も遺物は出土しなかった。土坑と溝状遺構の関係は、土坑北側の石の検出状況からみて、石が溝の肩から内側にはほぼ似たレベルでならんでおり、溝が掘られて以後のものであることは明らかである。

### 3. 第15、19、29トレンチの調査

本トレンチ内では、南端部で検出された東西方向の溝状遺構以外に、大小の土坑やピットが多数検出されたが、明確に遺構と考えられるものはほとんど無く、亦土盤上の凹凸や上層からの掘り込みや打ち込みによるものであろう。

なお土坑内から遺物等の出土したものは次とおりである。

SK1 1m × 0.9m の方形に近いプランで、深さ約30cmを測る。土坑底部から直径5~20cmほどの石が数個検出された。土坑内の堆積は1層で、遺物は含まれていない。

SK2 1.7m × 1.4m の不定形の土坑で、深さ約20cmを測る。土坑内の堆積は1層で、底部から鉄器片が数点出土した。

SK3 2.4m × 1.5m の楕円形の土坑で、深さ40cmを測る。土坑内の堆積は2層で、上層から上師器片と焼土を検出した。

SK4 直径1mほどの円形に近い土坑で、深さ1mを測る。土坑内の堆積は4層で、遺物は含まれていない。

また、南北方向よりやや東に軸を振って並ぶピット列が3カ所認められるが、①それに付随する遺構、遺物が無いこと、②各々のピット列の関連性が薄いこと、③周辺の水田の畔壁の方向にはば合致することなどから、稻木の跡ではないかと理解している。

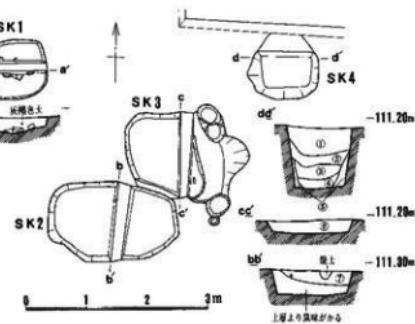
### 4. 塚状遺構（「首塚」）

岸脇神社の北側の水田中にある。これは、50m程離れた藪の中で切られた人の首が、塚のある場所まで飛んだという伝承のため、地元では掘ればたたりがあると、今まで残されたものであった。

現状は、直径5~30cm程の石を無造作に積みあげた直徑2m程の塚で、水田面から約50cm程の高さであった。調査は、まず、現状の $\frac{1}{10}$ の平面図を作成し、次に断面図をとりながら積み石を除いていくと、黒褐色粘質土が10cm程認められた。さらに地山まで掘り下げるに、直徑2.5m程の円形プランをもつ、高さ5~15cm程の地山を整形した遺構を検出できた。さらに遺構の中央から西よりに、直径1m程の土壠を確認したため、掘り下げたところ、60cm程の深さであった。

遺物は、土壠内にはもなく、伝承にあるような人骨なども検出できなかった。なお上部の積み石の間からは、時期不明の須恵器1、擂り鉢2、陶磁器2、瓦、鉄釘1、砥石1、扁平打製石斧1、鐵錠1が出土した。また、五輪塔の地輪1、水輪1、空風輪1、空輪1も含まれていた。

塚の時期であるが断面図をみると、耕作上が黒褐色粘質土の下に入りこんでいるため、墳丘を形成する積み石



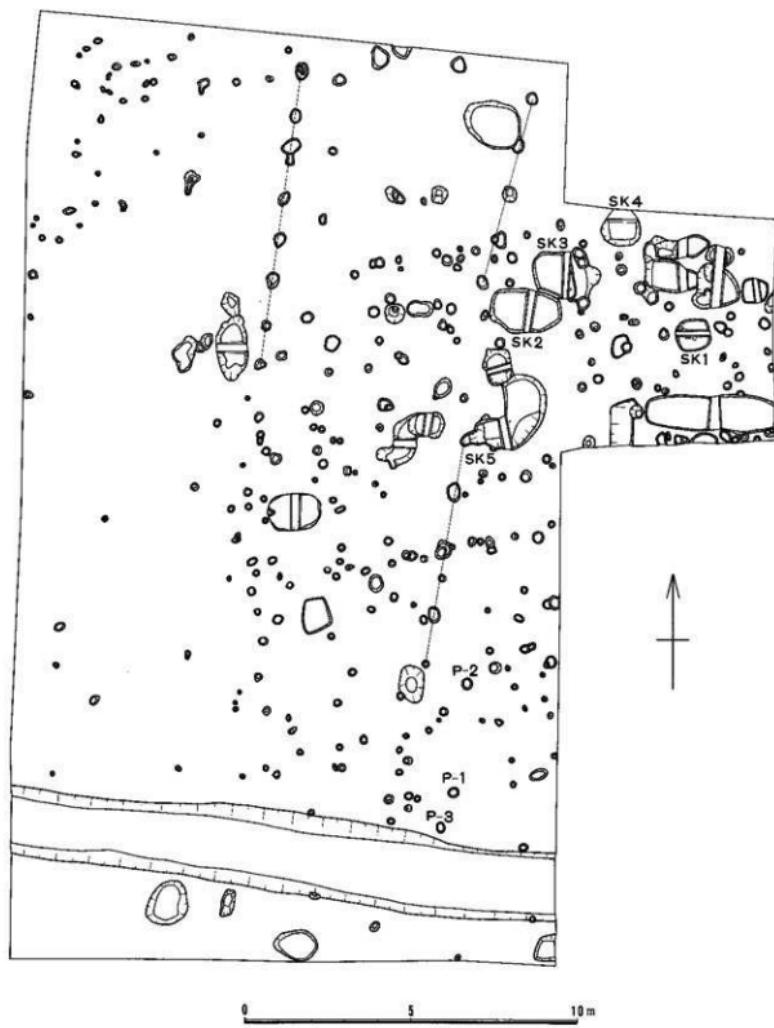
第7図 第15・19・29トレンチ土坑実測図

① 黒褐色粘質土 ② 暗黄褐色粘質土 ③ 暗褐色粘質土 ④ 褐黄色粘質土  
 ⑤ 暗灰褐色粘質土 ⑥ 暗褐色粘質土 (灰色粘質土ブロック混)  
 ⑦ 暗灰褐色粘質土 (灰色粘質土、黄褐色粘質土ブロック混)

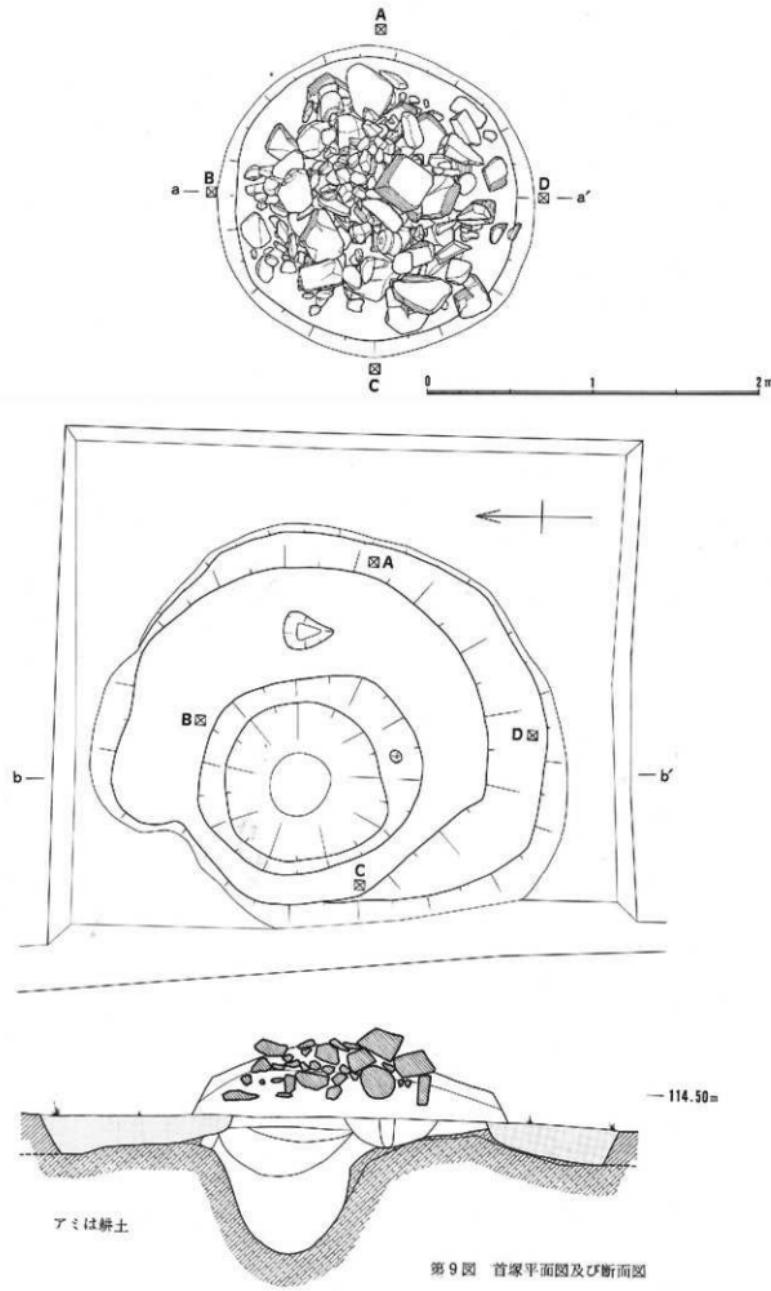
上層より黒褐色がかる

1 2 3m

上層より黒褐色がかる



第8図 第15・19・29トレンチ平面図



第9図 首塚平面図及び断面図

・黒褐色粘質土共に新しい堆積と考えられる。故に、五輪塔の残欠も当初からあったものではなく、付近から寄せ集められたものであろう。しかし、下層の地山を整形したマウンドの残骸状の遺構は、耕作によって削られており、当初この地に塚状のものがあった可能性を示している。

## 5 出土遺物

各トレンチより出土した遺物のうち、ここでは器形のある程度復元出来るものを、各トレンチ別に述べていくことにする。

第19トレンチより土師質土器の皿が9点と常滑の甕、青磁の碗、砾石各1点が出土している。

皿は内湾するもの（1、5、6、7）と外反するもの（2、3、4、8、9）の二種があり、外反するものは概ね上げ底である。口端部は全て丸くおさまる。このうち（1、2、3、4、7）は土壇よりの出土であり、（8）はP-2より出土している。口径 7.6cm～10.8cm、器高は 1.2cm～1.8cmにはば納まるものと思われる。色調は黄褐色系統が多く、胎土はほぼ精良で、焼成は概ね硬い。

常滑の甕（23）はP-1よりの出土であり、恐らく肩が大きく張る器形と思われる。頸部はしまらず外反したまま口縁部になり、口縁部は円のように二重に重なり合い口端部は丸くおさまる。全体的にロクロナデを行い、口縁部のみみずびき調整しているようである。色調は茶褐色で、胎土は3mm～5mmの小石を含み、焼成は硬い。

青磁の碗（20）はP-3内よりの出土であり、恐らく南方青磁と思われる。体部は内湾して立ち上り、口縁部において外反し口端部は丸くおさまる。高台端部はほぼ水平である。内外面共に釉薬を丁寧にかけているが、底部外面の一部に釉薬のかかっていない所がある。口径 14.4cm、高台径 5.2cm、器高 6.6cm である。色調は淡灰色で、胎土はやや気泡が目立ち、焼成は硬い。

砾石（29）はアジノール板岩製のもので両端は欠落している。四面全てを使っており、恐らく仕上げ用に使われたものであろう。

第22トレンチの溝下層より須恵器の环と土師器の环と皿各1点が出土している。

須恵器の环（15）は、貼り付けの高台をもち、高台内側で接する。底部と口縁部との境には明確な稜はつかない。口縁部は内湾し口端部は丸くおさまる。口縁部内外面及び底部内面はみずびき調整を行い、底部外面は荒切り後不調整である。高台の貼り付け部分は荒先でナデされているようである。口径 11.9cm、高台径 7.4cm、器高 4.4cm である。色調は淡青灰色、胎土は精良、焼成は硬い。

土師器の环（B）は、ながらに内湾しながら立ち上る口縁部で、口端部は丸くおさまる。外面下方の一部は不調整であるが、他の内外面は丁寧に横ナデ調整を行う。口径 13.0cm、色調は赤褐色、胎土は精良、焼成は硬い。

土師器の皿（14）は、底部はほぼ平底で体部にかけて緩やかに内湾し、口縁部ではやや外反し口端部は丸くおさまる。口縁部は内外面共に横ナデにより調整し、他の内外面は不調整ではあるが外面のみ比較的丁寧に仕上げている。口径 20.4cm、器高 2.8cm である。色調は淡赤褐色、胎土にはごくわずかに砂粒を含むが精良、焼成は硬い。

塚の積み石の間より擂り鉢 2点、器形不明の須恵器・碗・砾石・打製石斧・釘・鉄斧各1点と五輪塔の残欠 4点が出土している。

須恵器（16）は、底部はほぼ水平で体部はやや外反し、底部と体部との境には明確な稜はつかない。体部内外面及び底部内面はみずびき調整で、底部外面は荒いナデを加えるだけである。恐らく何かの底部であろう。底径

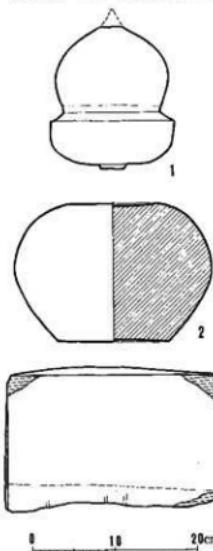
8.6 cm、色調は暗青灰色、胎土は精良、焼成は硬い。

磁器碗（18）は、体部がなめらかに内窓し体部と高台との境には明確な接はつかず、高台端部はほぼ水平である。内外面共に横ナデにより調整されている。高台径 4.1 cm、色調は白色、胎土は精良、焼成は硬い。

信楽産の擂り鉢は器壁の厚いもの（25）とやや薄いもの（24）の2通りある。底部はどちらも半底であり、体部は外反する。（25）は底部と体部との境に段がつく。内面には2本以上の単位による条線が所々につく。色調は淡黄褐色、胎土には1 mm位の石英片等を含む、焼成は硬い。（24）は底部と体部との境は明瞭でない。内面には5本を単位とする条線がびっしりと付けられている。体部内外面及び底部内面はロクロナデで、底部外面は不調整である。色調は赤茶褐色、胎土は精良、焼成は硬い。この2つの擂り鉢の内面の条線の付け方の違いは時代差の現われであり、（25）の方が時代が古く、時代による条線の変化がうかがわれる。

砥石（30）は低質頁岩製で、両端と1側面を欠落しており詳細は不明である。2面を使用し、うち1面には明瞭な使用痕と思われる痕跡が残る。

打製石斧（31）は高質頁岩製で、片面に自然面を残す。着装部の括れが少なく、着装部より刃部にかけてあまり閉かない。刃部は両面より打ち欠いて作り出している。頭部は欠けているものと思われる。



第10図 五輪塔実測図

五輪塔は4点とも花崗岩製であり、積み石の中に寄せ集められていたもので、空風輪（第10図-1）水輪（第10図-2）地輪（第10図-3）空輪で、空輪は摩滅が激しく残さなかつた。この4点は組み合せ式のもので、同一の五輪塔かどうかは不明である。

地輪は風化のため表面に3 mm～5 mmの石英粒が日立つ。長さ26.0 cm、高さ16.5 cmで、下方は整形していないが、恐らく上方より14.0 cm位の所から下が埋め込まれていたために、タガネ等を使用して打ち欠いただけで終ったものであろう。その痕跡が一部分ではあるが残っている。上方は水輪との組み合わせに適するように約1.0 cm中心部がわざわざ盛り上っている。

水輪は、高さ16.8 cm、最大径24.0 cm、上方径10.5 cm、下方径13.5 cmで、上下にはそれぞれ火輪・地輪との組み合せに適するように3 mm、2 mm窄ませて作られている。

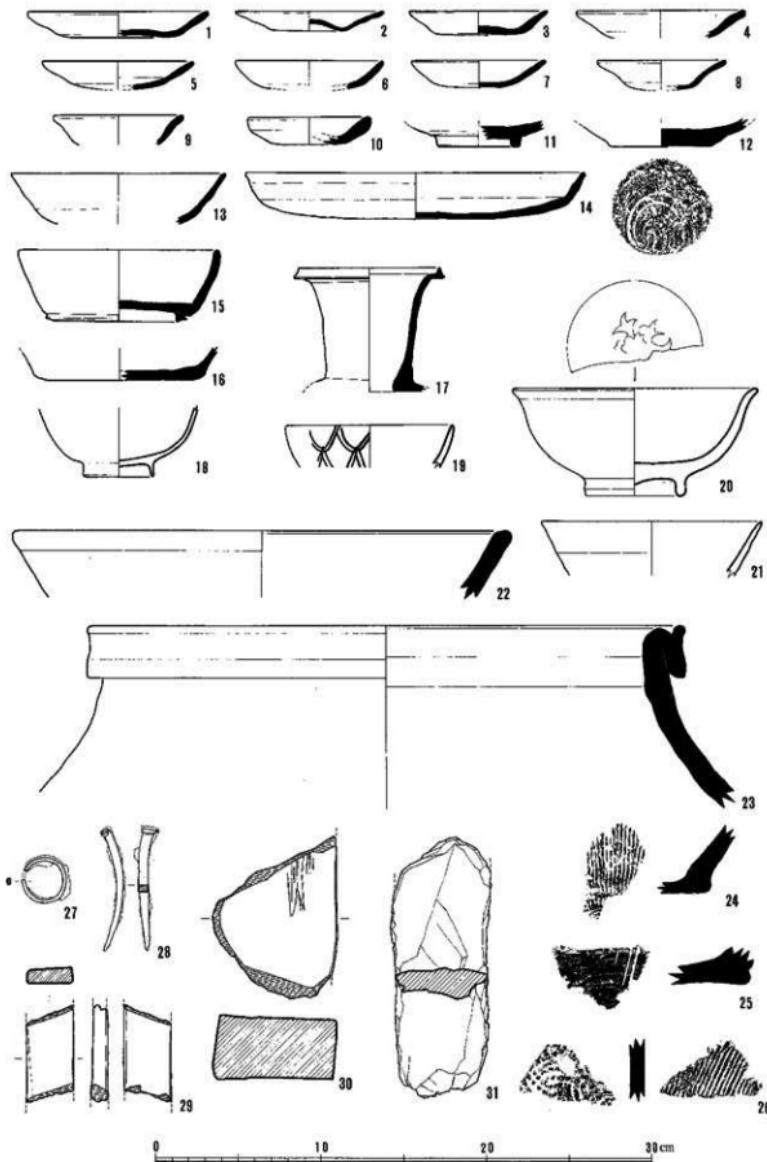
空風輪は一石作りで、やや風化しており空輪頂部は欠落している。残存高は17.4 cmであり空輪部分の最大径13.6 cm、風輪部分は上方14.6 cm下方9.0 cmである。火輪との接合部分は最大径3.3 cmで残りが悪く、高さは8 mmしか測ることが出来ず、やや欠けているものと思われる。

釘（28）は、長さ7.55 cm、巾6 mm、厚み4.5 mmの角釘で、頭部を折り曲げて頭部を作っている。

鉄津（図版26）はこぶし大位の大きさであり摩滅が著しい。北西1 kmの山裾に谷八種製鐵遺跡があり、そこから流出してきたものかもしれない。

その他に瓦（図版26）が出土しており、光沢をもった近世以降の新しい時期のものである。

第31トレンチの湿気抜きの溝内より須恵器の瓶（17）が出土している。瓶は口縁部が外反し口端部は図のように上方につまみ上げられており丸くおさまる。頭部はあまりくびれず明確な接はつかない。口端部はつまみ上げた後で、他の内外面と同様にみすびき調整を行う。口径8.4 cm、色調は濃灰色、胎土は精良、焼成は硬い。



第11図 出土遺物実測図

第25トレンチの第2層よりは、磁器碗2点が出土している。(11)は高台部分だけであり、全体的な器形は不明である。高台端部は水平である。高台と腹部との貼り付け部には先端によるナデが加えられている。外面は範削りを行い、内面は横ナデにより調整されている。底部内面には重ね焼きの跡が明瞭に残っている。高台径4.1cm、色調は淡灰色、胎土は精良、焼成は硬い。(19)は口縁部が内凹し、口端部は丸くおさまる。内外面共に横ナデによって調整し、外面には細い筆状のもので向かい合った横円状の蓝色の染付絵が描かれている。口径9.9cm、色調は白色、胎土は精良、焼成は硬い。

第26トレンチの第3層ピット内よりは信楽窯と思われる鉢(22)が出土している。口縁部は内寄して立ち上り、口端部は内傾している。内外面共にロクロナデを行う。口径29.2cm、色調は赤黄褐色、胎土には1mm位の腐り縁を含む、焼成は硬い。

他に表記ではあるが土師器の皿の底部(12)や須恵器の壺腹(26)青磁の碗(21)等が出土している。

第19トレンチSK3より鐵環(27)が出土している。内径2.25cm、巾4mm、厚み2mmで、断面は長方形である。

Cトレンチより寛永通宝(第11図)が出土している。地元で「くろぼく」と通称されている黒褐色粘質土(第3層)よりの出土である。



第12図 Cトレンチ出土寛永通宝

以上出土遺物について土器を中心に述べてきたのであるが、土器の時期について若干の補足を加えてみたい。

第22トレンチの溝下層より出土した土器(13、14、15)と、第31トレンチの溝気抜き溝より出土の土器(17)は、平安時代前中期のものと思われる。(20)の碗は南方青磁で、15世紀頃のものと思われる。(19、18、24)は近世のものであり、それ以外の土師器や陶磁器は室町時代のものと思われる。

## 6 結 び

調査の結果明確に遺構とよべるのは、東西方向に掘られた溝状遺構のみであった。この溝状遺構は、これに付随する他の遺構がなかったことから、立地より推定して次の二つの性格を考えている。一つは、岸壁の集落の北限の溝——つまり堀のようなものが想定できる。しかし、今回の調査で溝状遺構の東西両端を確認していることから、集落を囲むようなものでないことは確かである。二つは、現在井ノ口から岸壁を通り梅原に至る道路があり、その道のかつての側溝ではないかとの考え方である。しかし、溝状遺構が岸壁付近だけにしか存在しないため断定は難しい。このように遺構の性格については不明な点も多いが、溝状遺構の東端の溝底より出土した遺物から見て、本遺跡で最も古い平安時代前期の遺構であることはまちがいない。

次に集落の両端に所在した「首塚」の伝承地について考えてみよう。「首塚」は、おそらく塚の周囲が現在のように水田化される以前に、地山を整形し、あるいは岩下の盛り土を持ったわずかなマウンドがあったことに伝承の原因が求められそうである。発掘調査の結果からも判るように、現在地表にある積み石および高まりは当初のものではなく、周囲の水田化以後に形成されたものである。空想的な見方をすれば、開墾によって当所にあった塚の上部を破壊したところたちまち「たたり」があり、以後その場所を神聖視したといったところだが、これを積極的に証明する手立ては今のところない。ただ積み石については、同様な石が付近の溝や水田の石垣、畦など

どにも使用されており、開墾などによって出た石が自ずとこの場所に集められ積み石塚の体をなしたものであろう。したがって形状は類似するが本塚よりも規模の大きい、広島県森山積石塚や阿品積石塚などのような広島県下に多く見られる中世の墳墓あるいは供養塚とはややニュアンスの異なるものである。さて、この塚の地下遺構についても、土壤のみで何ら副葬品を伴出せずその年代、性格など実態はまったく不明であるといってよく、仮に伝承をある程度傍証資料に使用したとしても「墳墓の可能性がある」としか言えないであろう。ただ、もし墳墓であるとするなら、土壤の大きさから考えて火葬か、あるいは土葬の場合人体の一部か改葬によらねば埋葬することのできないスペースである。もっとも土壤内の土に火葬骨、炭、灰のようなものは認められなかつたため、土葬と思われるが、これも一つの仮説にすぎない。ここでは可能性をあげるにとどめ、類例の増加を待って結論を求めるべきであろう。

「湿気抜き」は特に埋蔵文化財の問題ではないが、すでに民俗学の分野で橋本鉄男氏により問題提起がなされ<sup>④</sup>おり、この機会を利用して考古学的な方法を用いて調査してみた。この「溝（湿気抜き）」については、調査中に地元の方々にたずねてみたが覚えがないとのことで、かなり以前に行われなくなつて廃棄（？）されたものと思われる。溝の機能については、溝内の土の堆積が掘った土を再び埋め戻しただけのものであり、しかも埋め土が粘土質であるため、この部分に土の固さの違いから水分が集まりはしても、喧嘩機能をはたすものではない。郡内の農作業の例からみて、出おこしする前に溝を掘ってショウズを集めて落とす溝と考えるべきである。ちょうどこの水田の位置する場所は、一段低い場所の水田のように水が湧くほど湿気でおらず、かといってそれより高い水の湧かない水田にくらべると湿気が多い。それゆえ、季節的にショウズヌキが必要であったのだろう。

#### 註

- ① 地山整形のみで盛り土をせす塚を作った例は、県下においては大津市雄琴町新池東地区の丘陵尾根上に所在する4基の塚などをあげることができる。

松浦俊和「日本住宅公園仰木地区土地区調整備事業対象地区内埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告」（『大津市文化財調査報告書（11）』、大津市教育委員会、昭和55年）

- ② 小郡隊、木村妙子『広島県高田郡吉田町森山積石塚発掘調査概報』（広島県教育委員会・広島県文化財協会、昭和50年）

- ③ 小郡隆、中田昭『山田積石塚発掘調査報告』（甲田町文化財保護委員会、昭和47年）

- ④ 橋本鉄男「物を以て物を織る」（『民俗文化』22、滋賀民俗学会、昭和40年）

- 橋本鉄男『比良山系東麓のショウズヌキについて』（滋賀民俗学会、昭和40年）

## 第5章 高島郡今津町梅ヶ原遺跡

## 1はじめに

今回、は場整備事業の対象地となり、発掘調査を実施した梅ヶ原遺跡は、高島郡今津町大字梅原小字梵野、中野、雨野の3つの小字にまたがるおよそ77,000m<sup>2</sup>の水田である。

本遺跡は、昭和41年発行の『滋賀県遺跡目録 昭和40年度』(滋賀県教育委員会)に遺跡番号23として立地は台地、地目は宅地で、寺院跡の伝承地として記載される周知の遺跡である。但し、この遺跡地は『滋賀県遺跡目録』に記載されている梅ヶ原遺跡の赤丸は、現梅原集落の西側、小字野出にプロットされており、その間500m程距たっている。

しかし、当該地がその所在地の確定しない伝承地であることから、的を出来る限り広くするとともに、若干ながらも土師片の採集出来た今回はは場整備区域をも調査対象地に加えることになった。

## 2位置と環境

梅ヶ原遺跡の所在する高島郡今津町梅原は、今津町の中央に位置し、東は岸脇、南は鶴生、西は岩狭岡との境をなす山地が迫り、北は箱館山山麓に三谷の集落がある。南側には段丘崖上に石田川が東流し、琵琶湖へ注いでいる。

このような地理的位置ではあるが、村の西方山裾に鎮まる氏神は弓削八幡宮と称し、式内社（「延喜式」927年完成 神名帳に記載されている）弓削神社といわれている。

また、この弓削八幡宮から北東山ぞいには大規模な製鉄遺跡が大字梅原小字北頃谷に知られており谷八幡遺跡と呼ばれている。さらにこの八幡宮一帯は小字芋谷と呼ばれているが、半とは鉄物のことであり、この谷筋にも同様な遺跡が存在するものと思われる。

なお、石田川を南に距てて、西近江路と分岐して西・若狭へ至る若狭街道が東西に走っており、この街道に面するように古代からの大集落が知られている。その著名なものは縄文時代から弥生前期、中、後期さらには古墳時代を経て奈良、平安時代に至る弘川遺跡である。

そして、最近明らかにされた上弘部から下弘部にかけて広がる大床遺跡もまた、一部鶴生地先から縄文時代の大集落が発見されるとともに弥生時代後期、古墳時代、奈良・平安時代に及ぶ、建物跡や古墳なども明らかにされた。

さらに岩狭街道を距てた人猿山や小猿山、饗庭野台地には大小の古墳や須恵器の窯跡、製鉄所跡など豊かな資料が知られている。

梅原の歴史についてはそのほとんどが今後の考古学的研究をまたなければならないが、小字名のなかにうかがえるように「野」のつく地名が多く、さらに中江、久保、川原など肥沃な土地はほとんど望めなかったようである。『物産誌』に「地味薄く百穀その実を結ばず」とあることはその実情をよく物語っているといえる。

## 3 調査の経過

調査は、伝承地の実在を確定するため、全域にわたって試掘場を設定することから始めた。このため該当するは場整備区域内に均一に端から端まで機械により機械的に調査を実施した。なおまた、区域内においても、整備

事業にともない掘削あるいは削平工事のなされる区域に重点を置いた。結果的において、試掘場は小字兎野では石田川寄りで段違いに一条、また、第12号支線道路に沿って一条を現田面一枚あたり一個所の割で設けた。しかし、遺構の発見個所では試掘場をさらに設けることになった。

小字中野、南野地区も同様であって、大きく二条、いずれも地形等に合せて段違いに設定することになった。

#### 4 調査の結果

試掘場は都合35箇所にのぼったが、小規模なものは $5\text{ m} \times 5\text{ m}$ 、大規模なものは $5\text{ m} \times 50\text{ m}$ に及ぶものも生じた。

特に東寄りの試掘場は現田面の規模が大きかったこともあり長大なものとなり、地山検出までの深さも1m以上に及んだ。

その結果、各試掘場全面にわたって黒色の褐色味を帯びた粘質土層が耕土を形成し、床土の明確なものは不明のまま地山（ローム層・灰黄色粘質土層）に達している。この表土層が耕土ともなる褐色味帶黑色粘質土層は東へ行くほど厚みを増し、当地がかつて土地改良地として農業改善事業がなされたことを物語っていた。

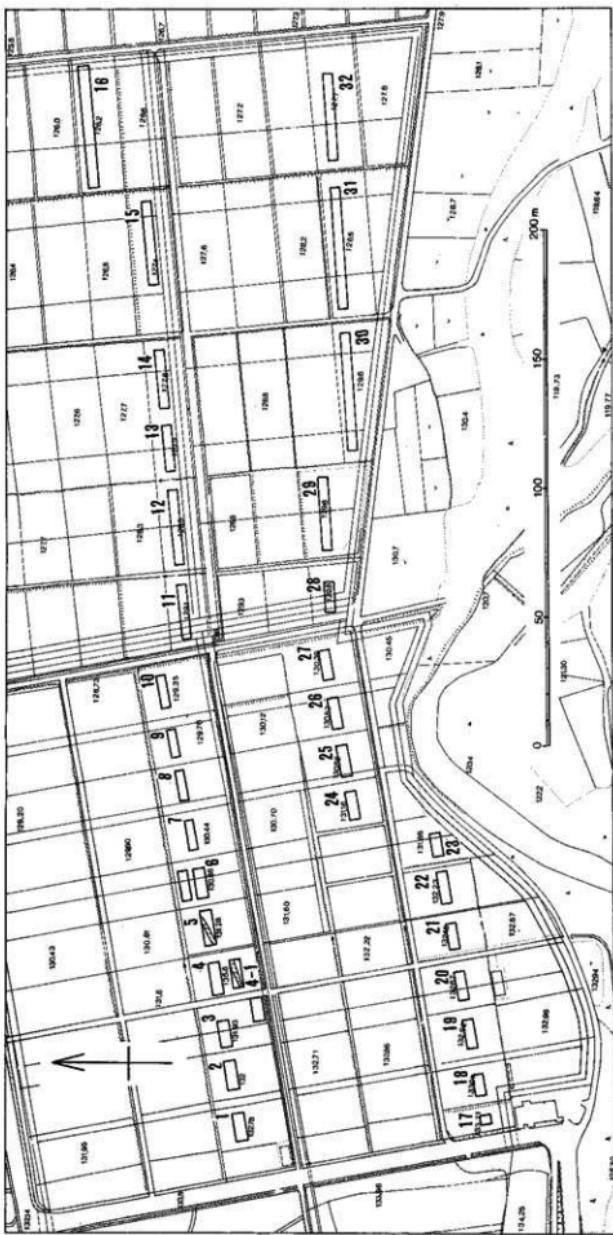
第2試掘場と第5、第4-1試掘場において土壌および一条溝、さらには多数のピットが認められた。特にピット群は北西部部分の試掘場で多数検出された。

その年代も溝内で検出された土師器片や染付などからみて江戸時代をはるかに遡るものではないと言える。

この地味薄い梅ヶ原においてもこの原野に近い荒れはてた台地が、なんとか稔りある土地に変ることを繰いつつ数百年に渡って耕地の開発が果されつつあったことがこの調査のなかからもおぼろげながら判明するのである。



第1図 遺跡位置図



第2圖 箱々原道跡試掘配図



## 第6章 高島郡今津町弘川遺跡

## 1 弘川遺跡の概要

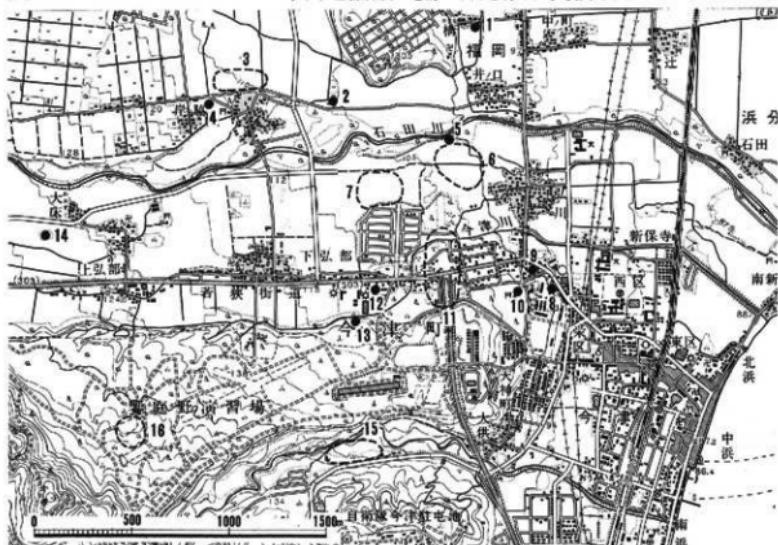
滋賀県高島郡今津町弘川に所在する弘川遺跡は、平安時代初頭の郷倉跡として知られている。滋賀県教育委員会が昭和54年に発行した『弘川遺跡発掘調査報告書』によれば、遺跡の範囲は、今津川を北限とする南北約200m、東西は宅地造成等で確認できなかったが、西の円山塚古墳までの約200mにわたると推定されている。遺構は、門跡・溝跡・孤立柱建物跡・柵列・大型土壙・ピット等が検出され、遺構に伴う8世紀後半から10世紀の須恵器・土師器・縄文陶器・灰釉陶器・黒色土器等が出土した。他に縄文式土器・弥生式土器・古墳時代須恵器・石器等もわずかに出土しており、弘川遺跡周辺に郷倉以外の遺構の存在を暗示している。

## 2 位置

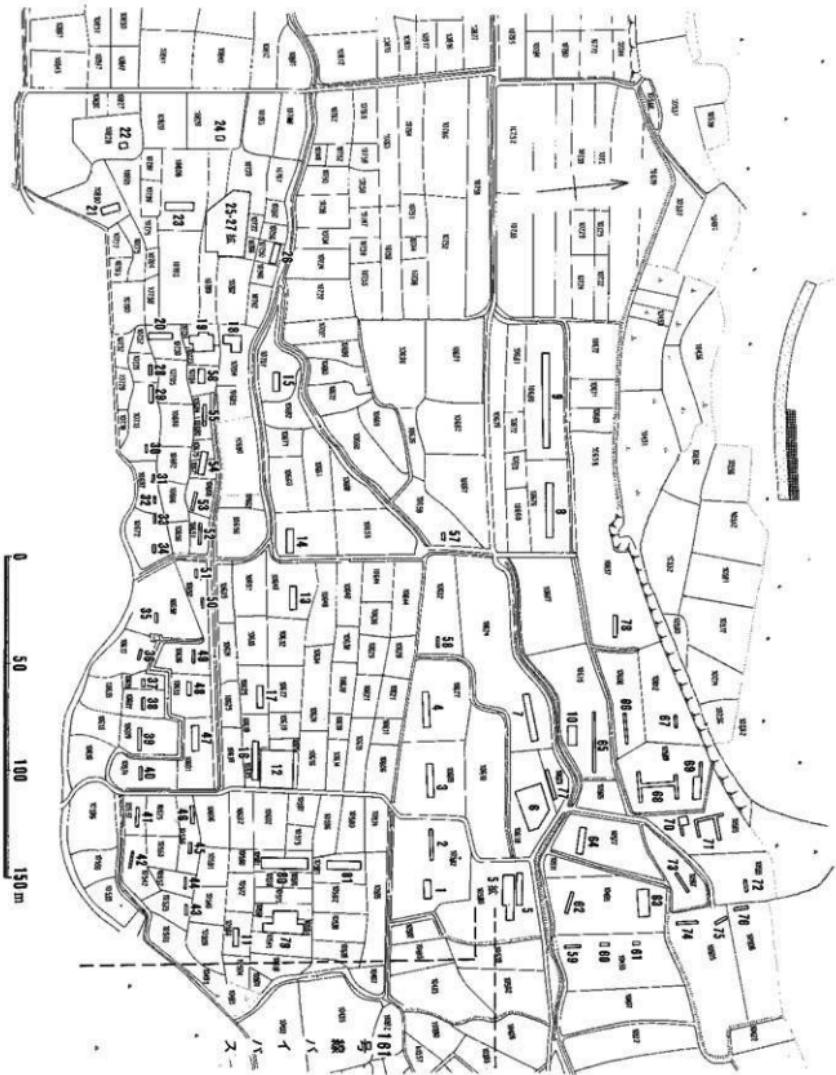
今回発掘調査を行った地点は、弘川遺跡の北西にあたり、石田川以南、国道161号線バイパス予定地の西側約1,575kmの範囲である。ここは弘川遺跡（郷倉跡）が立地する、小さく舌状に張り出した台地の裾部にあたる。

## 3 調査の経過

発掘調査は、は場整備事業に先立って、昭和54年10月16日から11月27日まで実施した。調査は、削平をうける各水田にバックホウを用いてトレンチを穿ち、包含層及び遺構の確認を行った。検出されたトレンチについては、



第1図 遺跡位置図



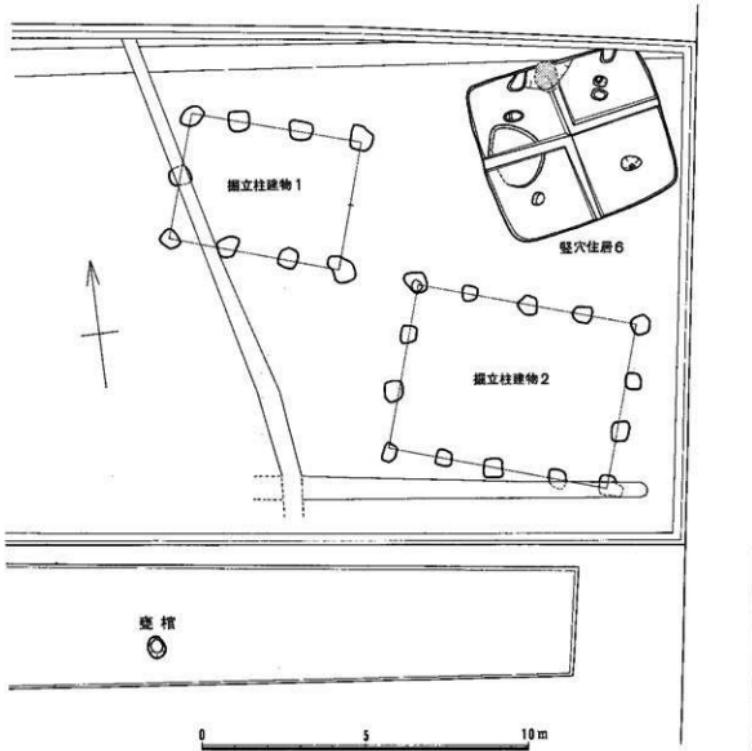
第2図 弘川遺跡トレンチ配置図

保存のため協議し、設計変更を行ったが、変更不能なものについてはトレンチを拡張して、遺構の広がりを調査した。穿ったトレンチは第2図に示すように全部で81カ所、うち包含層及び遺構の検出されたトレンチは、第5・6・12・16・19・25・27・49・68・69・70・71・79トレンチであった。他のトレンチについては、「事の削平面まで掘り下げ、土層を記録するにとどめた。

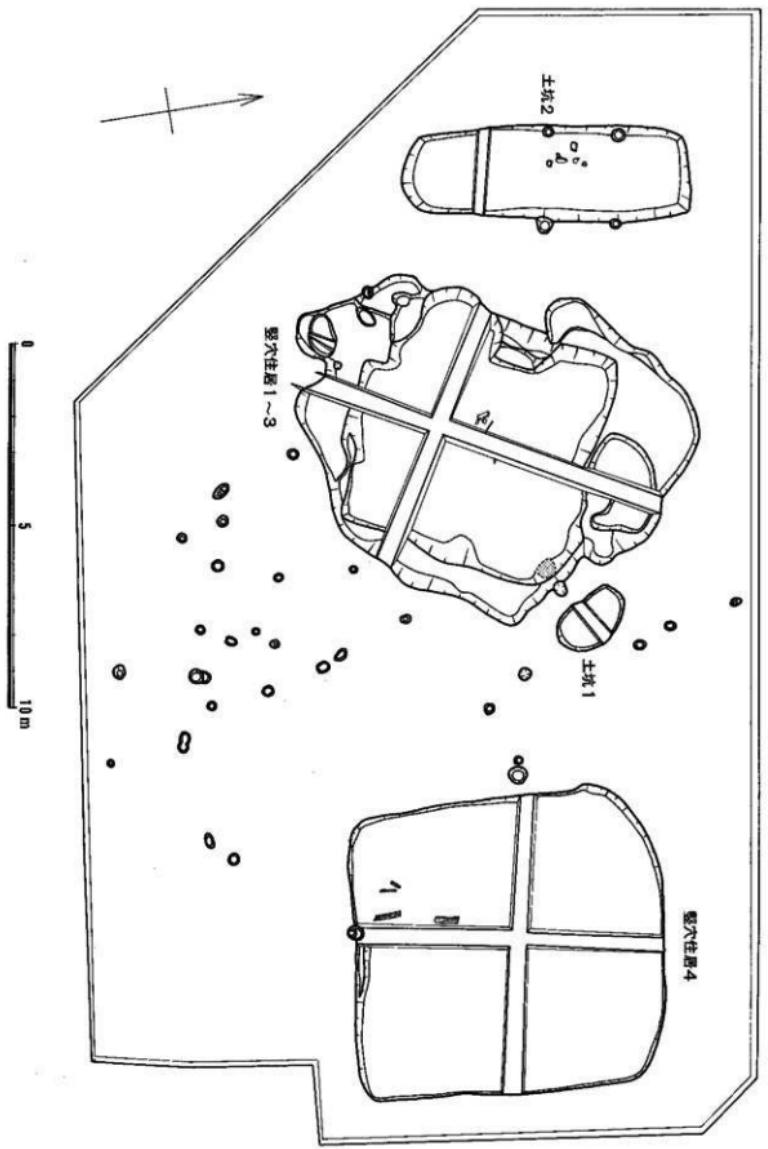
#### 4 遺構

斐棺、堅穴住居跡、掘立柱建物跡、土壙等を検出した。各遺構の関連については、次年度の調査結果とあわせて報告することとし、ここではその概要を示すにとどめたい。

斐棺 第16トレンチで検出。耕土約25cmを除去すると、上半部が削平をうけた状態で出土した。約50度の傾斜をもって埋置された単棺で、蓋の痕跡は認められず、骨や副葬品なども検出されなかった。色調は暗褐色を呈し、黒雲母を含む砂っぽい胎土で、縄文晩期のものである。



第3図 第12・16トレンチ平面図

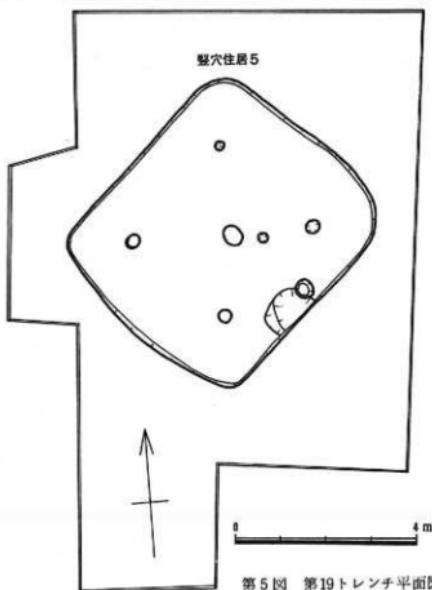


第4図 第25・27拡張トレンチ平面図

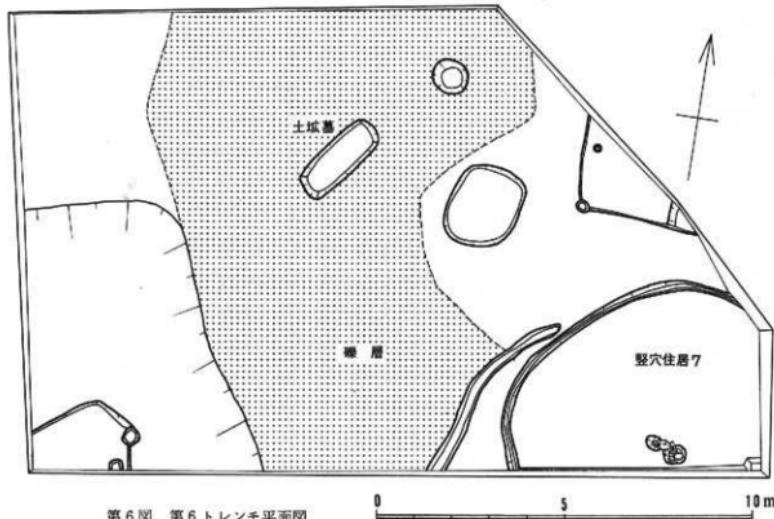
竪穴住居1～3 第25・27拡張トレンチで検出。方形プランをもつ規模一辺6.5mの竪穴住居で、ほぼ同じ場所で3回建て替えた結果とみてよいだろう。床面に柱穴は無く、焼土が北東隅に1カ所検出された。飛鳥時代の須恵器の杯、線刻のある壺、土師器の壺・鍋・壺片・壺・椀・砥石が出土している。主軸方向は北東をさす。

竪穴住居4 第25・27拡張トレンチで検出。一辺約8.5mの方形プランをもち、住居の残存する深さは20cmを測る。柱穴・炉跡・焼土等は検出されなかったが、炭化した柱の一部が北西部分の床面上で検出された。遺物は、弥生時代後期から古墳時代初頭の時期と思われる壺・甕・器台・有孔円板が出土した。主軸方向は、ほぼ南北をさす。

竪穴住居5 第19トレンチで検出。一辺約5mの四丸方形プランをもち、4本の主柱穴が方形に配置されている。住居の残存する深さは、10cmを測る。また、ほぼ中央に炉跡と思われるピットが検出



第5図 第19トレンチ平面図



第6図 第6トレンチ平面図

された。遺物は、南東辺のほぼ中程にある落ち込み付近に集中しており、残りは悪いが、弥生時代末から古墳時代初頭の時期と思われる土師器の壺・甕・器台・高杯等が出土している。主軸方向は、北東をさす。

竪穴住居6 第12トレンチで検出。5.6×4.5mの方形プランをもち、4本の主柱穴がほぼ方形に配置されている。住居の残存する深さは、約10cmを測る。また、住居内の北側で焼土が検出された。遺物は、飛鳥時代の土師器の壺・甕等が出土している。主軸方向は南北をさす。

竪穴住居7 第6トレンチで検出。直径8m程の円形住居かと思われる。住居の残存する深さは30cmを測り、住居の壁面にそって側溝がめぐらされている。柱穴は検出されなかったが、中央部に石の詰ったビット2個が残存していた。遺物は、壺・甕・器台等が出土しており、弥生時代後期のものである。

掘立柱建物1 第12トレンチで検出。東西3間(5.20m)×南北2間(3.84m)で、建物方向は、N-73-Wに偏っている。柱穴は掘り下げなかったため、深さは未確認である。

掘立柱建物2 第12トレンチで検出。東西4間(6.72m)×南北3間(5.04m)で、建物方向は、N-73-Wに偏っている。柱穴は掘り下げなかったため、深さは未確認である。

掘立柱建物3 第79トレンチで検出。東西2間(3.84m)×南北4間(6.4m)で、建物方向は、N-5-Eに偏っている。柱の振り方は約0.4mの方形を呈し、柱穴の大きさは直径0.4～0.5mである。また、柱穴の深さは、0.1～0.5mとまちまちであった。

掘立柱建物3棟の時期については、主軸方向からみると、弘川遺跡の昭和52年調査地区で検出された掘立柱建物跡の、IV(9世紀後半)、V期(10世紀代)に対応できると考えられる。

土坑1 第25・27拡張トレンチで検出。形状は、2.0×1.2m、深さ0.25mの楕円形を呈する。遺物は土師器が数点出土しているが、器形、時期とも不明である。

土坑2 第25・27拡張トレンチの竪穴住居跡1～3の西側で検出。形状は、2.5×8.0m、深さ0.1～0.4mの長方形を呈する。土坑の北寄りに、土坑の幅で方形に配置された4個のビットを検出した。遺物は土師皿がほとんどで、時期は鎌倉時代と思われる。

土坑3 第71トレンチで検出。一部しか検出していないが、深さ10cm程度っていた。遺物は、飛鳥時代の須恵器の杯、土師器の甕・椀等が出土している。

以上が明確な遺構であるが、他に土壤・落ち込み等を検出した。第25・27拡張トレンチでは、遺構とは関連のない径30cm程のビットを多数検出し、住居跡1～3の南側では、長頸壺・高杯等を含む遺物包含層を検出している。第6トレンチでは、中央の南北につらなる自然流路と思われる礫層を掘り込んだ土壤を検出した。大きさは1×2.5m、深さ約40cmを測り、遺物等は検出されなかったが、形状などからみて土壤層になる可能性が強い。第49トレンチでは、地表より約25cm程掘り下げた粘質土層中で、足跡と思われる4個の窪みを検出した。時期については、遺物等を伴出してないため、明確ではない。第5トレンチでは、約20cmの耕土・床土、約10cmの暗灰色土をとりのぞくと、約10cm程の黒褐色粘質土になり、その上層内に弥生時代前期・後期の土器が検出された。遺構確認のため両側にも拡張トレンチをあけ調査した結果、自然の落ち込み内に土器が漬った状態であることが判明した。第55トレンチでは、表土・耕土を掘り下げるとき居跡の一部かと思われる落ち込みを検出したが、プラン確認のみで掘り下げていないため、明確にはし得なかった。

なお、調査の詳細は、遺跡の全体像が把握された次年度の報告書にゆずり、本年度は概要にとどめる。

## 第7章 高島郡新旭町針江遺跡

# 1 はじめに

本報告書は、前年度に引き続いて実施された高島郡新旭町針江土地改良区による団体営は場整備事業に伴う、昭和54年度の針江遺跡発掘調査の記録である。

調査は、県文化財保護課技師兼康保明氏の指導の下、新旭町教育委員会が行い、図司高志が現場を担当した。報告書作成に当っては、山口順子（滋賀県埋蔵文化財センター嘱託）・神谷友和（滋賀県文化財保護協会嘱託）両氏の協力を得、遺物整理作業に龍谷大学学生池田俊哉・奈良大学学生田中政彦両君の参加を得た。また、遺物写真の撮影にあたっては、寿福滋氏にお願いした。最後に、地元針江区民の方々を初めとする多数の人々の協力を得たことを記して、謝意を表したい。

## 2 調査の経過

本年度の調査は、前年度と同様に掘削を受ける水路予定地について実施し、6月～11月にかけて4本のトレチを設定した。第1トレチは、前年度に発掘したAトレチの南に、第2トレチは、前年度に発掘したCトレチの南にそれぞれ続いて設定し、第3トレチは、前年度に発掘したCトレチの西200mに、第4トレチは、本年度に設けた第1トレチの東200mにそれぞれ平行して設け調査を実施した。調査の結果、第2～第4トレチでは、遺構・遺物とも全く検出されなかった。また、第1トレチでは、遺構は検出されなかつたが多量の遺物が出土した。したがって以下は、遺物が多量に出土した第1トレチについて述べていくことにする。

## 3 調査の結果

第1トレチは、前年度の調査において高床式建物の検出をみたAトレチの南に位置し、当初遺構の存在が予想されたが、遺物包含層が確認されたのみであった。

調査は、約300mの調査予定地を分割し、約17mを1ブロックとし、北より第1・第2・第3……と13ブロックの小トレチを設けて実施した。このうち遺物包含層が確認されたのは、第1～第10ブロックからで、第11～第13ブロックでは確認されなかった。したがって、第1トレチは、遺物包含層の有無によって大きく二つの地区に分けられるが、土層・遺物の出土状況によって、さらに次の4地区に細分することが可能である。

（第1～第4ブロック） 当地区の基本土層は、第1層——耕作土、第2層——暗褐色粘質土層、第3層——暗青灰色粘質土層、第4層——青灰色粘砂質土層である。遺物包含層は、第2・第3層である。当地区は、遺物が濃密に出土し、特に第2ブロックでは完形品がかなり出土している。

（第5・第6ブロック） 当地区の基本土層は、第1層——耕作土、第2層——暗褐色粘質土層、第3層——暗褐色砂質土層であり、第2・第3層が遺物包含層にあたる。当地区的遺物出土量は、第1～第4ブロックに比してやや少なく、また、第2・第3層は砂利を多く含んでいる。

（第7・第8ブロック） 当地区の基本土層は、第1層——耕作土、第2層——暗褐色粘質土層、第3層——暗青灰色粘質土層、第4層——暗青灰色砂利層であり、第2・第3層が遺物包含層にあたる。第4層は、第8ブロック南部において南方に傾斜し、青灰色粘質土層となる。

（第9・第10ブロック） 当地区の基本土層は、第1層——耕作土、第2層——暗褐色粘質土層、第3層——



第1図 遺跡位置図

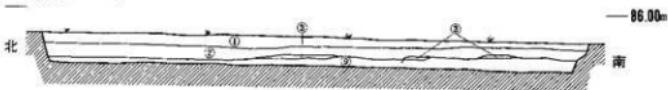


第2図 トレンチ配置図

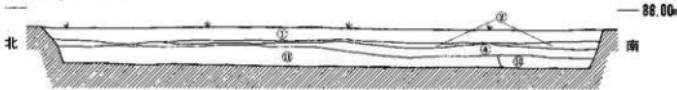
第2ブロック東壁



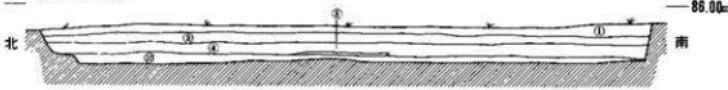
第5ブロック



第8ブロック



第9ブロック



- |           |           |          |
|-----------|-----------|----------|
| ①耕作土      | ⑥炭（ブロック）  | ⑩青灰色粘質土層 |
| ②暗褐色粘質土層  | ⑦暗褐色砂質土層  | ⑪青灰色粘質土層 |
| ③暗茶褐色粘質土層 | ⑧黒褐色粘質土層  | ⑫暗青灰色砂利層 |
| ④暗青灰色粘質土層 | ⑨淡青灰色粘質土層 |          |



第3図 トレンチ土層図

暗青灰色粘質土層、第4層——青灰色粘質土層であり、第2・第3層が遺物包含層にあたる。当地区の遺物出土量は、前述の各地区と比較して少ない。

（第11～第13ブロック） 当地区の基本土層は、第1層——耕作土、第2層——暗褐色粘質土層、第3層——青灰色粘質土層であり、遺物包含層は認められない。第2層は、他地区的同層と比較して泥質であり、堆積が厚いにもかかわらず不安定である。

## 4 出土遺物

出土した土器は各ブロックとも局的に堆積せず、包含層内に混在した状況であり、遺構なども確認することができず、活資料といえるものは皆無の状態であった。しかし、これらの出土遺物は、資料的にはや年代幅をもつとはいうものの遺存状態も良く並んでまとまりがある。その中には、在地の土器と北陸・伊勢湾地方などの周辺地域との関連性を示すような資料も含まれている。そこで、できる限り出土遺物を図示することにより、この遺跡の性格と、当地域の弥生時代後期から古墳時代初期にかけての土器の様相を知る手がかりが得られよう。以下、器形別に資料を紹介して行きたい。

### （1）壺形土器

口縁部の形態などにより、口縁端部が垂下し、口縁部外面に擬凹線文や刺突列点文を施すもの（1・2）や口縁端部を上・下方に突出するもので外面に擬凹線文や円形浮文を施すもの（3～5）や文様などをもたないもの（6）や口縁部下端に笠状具による刺みをもつもの（7）などがある。口縁部がくの字状に外反して口縁端部に刷毛目痕をもつもの（8）や端部が丸くおわるもの（9・10）や上端をつまみ上げたもの（11・12）などがある。口縁部に段をもち立ち上がりの短い二重口縁をもつもので、口縁部を横なでするもの（13・14）や笠磨きを施すもの（15・16）などがある。短頸壺には、頸部に一条の貼付凸帯文をもつもの（17）や外上方にのびるもの（18）や直立気味のもの（19・20）などがある。

長頸壺の系譜をひくもので、外面に刷毛目を施し口頸部が退化したもの（22～24）や体部まで退化したもの（21）などがあり、また、体部が扁平な球形をなし外面に笠磨きを施すもので、口頸部が外反するもの（25）や内窓気味のもの（26）や口縁部に櫛描文をもつもの（26・27）などがあり、頸部は長頸であるがその形態は長頸壺そのものとは系譜の異なるものである。

少量ではあるが、伊勢鴻糸と思われる装飾された壺がある。<sup>①</sup> 口縁部内面に刺突列点文による羽状文などの文様を施すものである。口縁部内面に水平面をもたせるもの（28～30）や口縁部が大きく開くもの（31）や内面に瘤状突起をもつもの（32）や外面に丹彩を施すもの（33）などがみられる。口縁部が外上方にのびて下端をやや垂下させたもの（34）や口縁端部を外上方につまみ上げたもの（35）や直口の小形の壺で外面に櫛描文・羽状文を施したもの（36）などがある。また、口頸部下半が直立気味のもの（37）はこれまで他に類例をみないものである。

大形で口縁端部を垂下させ、外面に凹線を施すもの（38）と二重口縁をもつもの（39）などがある。二重口縁の壺は、口縁部に円形浮文・頸部に刻みをもつ貼付凸帯をもち、古墳時代前期のものと考えられる。

## （2）壺形土器

ほとんどのものが近江特有の受口状口縁をなすものであり、口縁部の形態などにより、若干の差異がみられるが、それらが時期差を反映しているのか地域差であるのか十分に明らかにできなかった。受口状口縁で頸部が比較的ゆるやかなもの（40）、外面屈曲部に刺突列点文や体部に直線文・刺突列点文を施すもの（41・43～49）があり、口縁端部を外方につまみ出したり、内傾させたり、内面に刷毛目痕をもっていたりするものなどがある。口縁部外面に櫛描波状文を施すもの（42）がある。また、屈曲部以外の体部外面の文様を省略気味にしたり、あるいは施文しなくなったり、刷毛目を外面屈曲部付近まで施すもの（50～57）などがあり、口縁部の形状に若干のバラエティがみられる。屈曲部外面に沈線のみを施すもの（58・59）や文様の消失したもの（60）がある。受口状の口縁部をもち内面に刷毛目を施すもので、頸部と体部下半に刺突列点文をもつもの（62）や肩部の張るもの（63）や頸部内面に刷毛目痕をもつもの（61）などがある。

口縁部をくの字状に外反するもので、口縁端部を上方につまみ上げて外面に擬凹線をもつもの（64～67）や有段口縁で外面に擬凹線をもつもの（68・69）や擬凹線をもたないもの（70・71）などがある。口縁端部を上・下方に突出させ外面に擬凹線をもつもの（72）や凹線文をもつもの（73）や沈線をもつもの（74）などがある。口縁部に屈曲部をもち外面に擬凹線をもつもの（75）や体部外面に羽状文をもつもの（76）や口縁端部が内窓気味のもの（77）などがある。体部外面に叩きを施すもので、体部が球形のもの（78）、口縁端部に刻みをもつもの（79）、体部外面に刷毛目を施すもの（80）などがある。口縁部がくの字状に外反するものの中、口縁端部の形状にやや差異が認められるが、体部は球形気味のもの（81・82）や肩部のあまり張らないもの（83～86）などがあり、大形の壺で体部が丸味をもち内面に指圧痕をもつもの（87）や口縁端部に刷毛目痕をもち頸部のゆるや

かなもの（88）や口縁部が直立気味で内外面に指圧痕をもつもの（89）や口縁部に稜をもつもの（90）などがあり、小形の甕で、体部中位が張り口縁部の短いものの（94）や口縁端部が丸くおれるもの（91）や尖り気味のもの（92）や口縁部まで叩きを施し体部に刷毛目を施すもの（93）や口縁部に弱い段をもつもの（95・96）などがある。

### （3）鉢形土器

甕と同様に受口状口縁をもつものが主流を占め、外面屈曲部や体部に文様をもつもの（97～99）や扁平気味な体部で文様をもたないもの（100）や屈曲部に刺突列点文をもつもの（101）などがある。有段口縁で口縁部外面に擬回線をもつもの（102）や口縁部を外側に水平状に折り曲げた大形の片口をもつもの（103）や小形で脚台付のもの（104）や底部より外反してそのまま端部が丸くおわるもの（105）などがある。

壺・甕・鉢類の底部・脚台部と考えられるものがあり、小形で上げ底のもの（106）や半底のもの（107～110）などがある。底部で凹み底のもの（111・115・117・119）や上げ底のもの（112～114・116・118・120・123～126）や薄手のもの（121・127）や平底のもの（122・128）などがあり、体部外面に箆磨きを施すもの（115・123）は壺かもしれない。体部外面に叩きをもつもの（129～135）があり、甕と考えられる78と135は同一個体と思われる。壺（有孔鉢）では、口縁端部を方形状におわるもの（136）や底部のみで一孔をもつもの（137～144）がある。脚台部では、台付鉢と思われるもの（145）や台付甕と思われるもの（146～148）などがある。その形状などから製塙土器としての可能性が考えられるもの（149～153）があるが、体部などに二次焼成を受けた痕跡は認められない。このうち、（150）は体部が薄く、脚台部に指圧痕を残すもので製塙土器とみて誤りないであろう。

### （4）高杯形土器

口縁部の形態などにより、坏部口縁部が外反するもの（154～162）があり、その中には、口縁部外面に山形状に箆磨きするもの（156）や漸統的に施すもの（161）や外面肩曲部に箆状具による刺突文をもつもの（160）がある。同様の坏部で脚部中実のもの（163）がある。口縁部が外上方にのび端部が尖り気味のもの（164・165）<sup>②</sup>がある。伊勢湾地方の欠式に類似すると思われるものの坏部（171～173）や脚部（174）、元尾敷式に類似すると思われるもので脚部外面に櫛描文などの文様をもつもの（175～177）がある。小形で円孔をもたないもの（170）や脚部中実で脚部が外方にのびるもの（178）がある。台付碗かと思われるものの脚部（179）や脚部（180）がある。外下方に外反する脚部のもの（183）は、あるいは脚付壺であるかもしれない。小形の脚部（184）がある。

### （5）器台形土器

口縁部下端を垂下させるもの（185～192）があり、口縁部外面に備状具による直線文を施すもの（188・189・191・192）や竹管文を施した円形浮文をもつもの（187・189・190・192）や竹管文を施したもの（188）や円形浮文をもつもの（186）などがある。口縁端部を上・下方に突出したり丸くおわたりするもので、口縁部外面に竹管文を施すもの（193）や擬回線を施し棒状浮文をもつもの（194）や擬回線を施すもの（196）などがある。口縁端部の上・下端をつまみ出し、くびれ部を上位にもち下半に櫛描直線文を施すもの（200）や受部・脚部とも直線的であり、くびれ部を中位にもつもの（201）がある。小形器台の受部と思われるもの（204～206）やその脚部のもの（206）がある。

若干、形状が異なるもので、口縁部下端を外方に大きく垂下させたもの（202）や口縁部を上・下方に大きく突出させたもの（203）があり、両者は外面に擬回線を施すものである。小形のもの（208）があり、あるいは

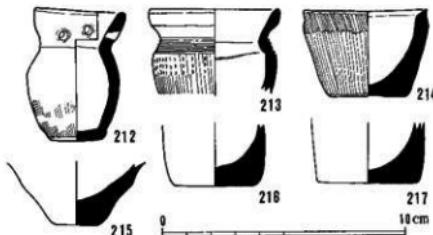
脚台部としての可能性も考えられるものである。

#### (6) 蓋形土器・その他

蓋には、小形で円孔を2個一組で2方にもつものの(209)や大形で焼きの部分のもの(210・211)があり、(209)は壺用で(210)と(211)は甕用のものと思われる。

ミニチュア土器として、口縁部に2個の円孔をもつものの(212)、体部外縁に文様をもつものの(213)、外縁に篦きを施すものの(214)、体部に丸味をもつものの(215)、平底のもの(216・217)などがある。

以上、上巻の概要を述べたけれども、時期的には第V様式～庄内式にわたる数型式の時期のものである。その内容を具体的



第4図 ミニチュア土器実測図

④みると、蓋では、西ノ辻I式と比べると、西ノ辻I式にみられる口縁端部を垂下させ外面に加飾する甕(1・2)は少量であり、口縁下端部に刺突文を施すもの(7)などのように無文化が大勢(4~6など)を占める。さらに、長頸甕は、口頭部が退化して短く全体に小形化(21~24)しており新しい様相を示している。受口甕では、受口状口縁の屈曲部外面に刺突列点文を施すもの(47~49など)があり、高环では、环部口縁部の立ち上がりが直立気味ではなくなり外反するもの(161・162など)があり、器台では、壺同様に口縁部を垂下させるもの(185・186など)などが同一時期の遺物としてセットを構成するであろう。これらの一組が出土遺物の中では最も古い様相を示すもので、第V様式の中でも西ノ辻I式より新しく、西ノ辻E・D式——最近の中河内の資料でいえば「上小阪刷」・「馬場川期」に併行すると思われ、県内では野洲郡野洲町久野部遺跡七ノ坪地区的S<sup>⑤</sup>D<sup>2</sup>に近い時期の所産であろう。続く時期のものとしては、蓋では無文のもの(11・12など)、受口甕の屈曲部外面に刺突列点文・沈線などの文様をもち、口縁端部を外上方につまみ出すもの(44・45など)があり、高环では外上方にのびるもの(164・165)や脚部中実のもの(163)、器台では受部が直線的でくびれ部を上位にもつものの(200)や中位にもつものの(201)などがあげられる。これらの特色をもつ一群は、中河内における「上六万寺期」に併行すると思われ、脈下では草津市片岡遺跡77-B・IV層砂層の時期に近い。弥生時代末頃～古墳時代初頭頃と考えられる。次に続く時期のものとして、二重口縁をもつ甕(13・14)、受口甕の肩部が無文のもの(60)、脚部中実で柱状部より屈曲して外方にのびる脚部をもつ高环(178)などがあげられる。大津市湖<sup>⑥</sup>西線関係遺跡III E区下層式の時期に相当し、庄内式に併行するものと考えられる。ただ、本遺跡では湖西線関係遺跡III E区下層式の甕D類とされる河内の庄内式甕の特徴ともいべき、体部外縁に細かい右上がりの叩きをもち下半に崩毛目を施すものが出土していない。叩きをもつ甕(78・79)は口縁部が外反し、体部が球形気味の連続ラセン叩き様であり、(80)は体部3分割成形で外面に崩毛目を施すなど「弥生型の甕」と言われるものであろう。しかし、近接する新旭町森浜遺跡では、その出土例が知られている。このように、隣接している森浜遺跡とは土器の構成に差異がみられ、両者の違いが庄内式の内での古相・新相によって生じているのか、あるいは遺跡の地点による差であるのかもしれない。庄内式の土器を考えているもののうち、大形の二重口縁甕(39)や小形器台(206)などは、針江遺跡の下限を示すものであり、出土量は少量である。あるいは布留式に近い時期のものであるかもしれない。

受口状口縁の甕は別として、土器の形態や構成はどちらかというと甕内色の強いものであるが、その中に少量ではあるが、北陸地方などの日本海側や伊勢湾地方との関連を示す土器が混在している。まず、日本海側系の土器としては、甕（64～69）、鉢（102）、器合（202・203）などの口縁部外面に腹回線をもつものがあげられ、一部の甕（70・71）には振出線をもたないものがあり、また、有段口縁をもつ甕の立ち上がりに大・小がみられるなどの差異がある。これらが時期差を示すのか、日本海側からの影響を受ける場合の地理的にみる周辺地域間の差異を示すかと思われる。日本海側系と思われる土器の分布は、湖西線関係遺跡ⅢE区下層式の甕E類や大津市北大洋遺跡S-B-18・S-B-20の甕D類や長浜市高田遺跡第3・第7層の甕D類など全県下にみられ、それらとの共伴遺物などの時期は第V様式～庄内式の間で認められている。伊勢湾系には甕・高环などがあり、口縁部内外面や体部上半に加飾するパレス甕（28～30など）、深い环部をもち环底部と口縁部との屈曲が著しいもの（173）である。それらの特色をもつ土器の分布は、長浜市鴨田遺跡・高田遺跡・十里町遺跡など近江北半に集中してみられ、それらの共伴遺物などの時期も第V様式～庄内式の間に求められる。中に、脚部断面外に文様をもつ高环（175～177）は、時期が若干下がる可能性があると考えている。

## 5 おわりに

今回の調査は、前年度検出された高床式建物のような遺構は検出されなかったが、以下のことが判明した。

第1に本遺跡の広がりについてであるが、今回の東西400mにわたる調査によって、東西700mと推測されていた範囲が、かなり縮小されることである。特に本遺跡の東限は、まったく遺物の出土がみられなかった第4ブロック周辺にあたるとと思われる。また、南北においても、今回の第1ブロックの調査結果のように一面に遺構・遺物の存在・出土がみられるのではなく、沼及び自然流路等によって分断され、島状に点在していると思われることである。特に前年度調査のAトレンチ・本年度調査の第1トレンチ周辺、及び現在の針江集落周辺が、最も濃密に分布する地域と思われる。

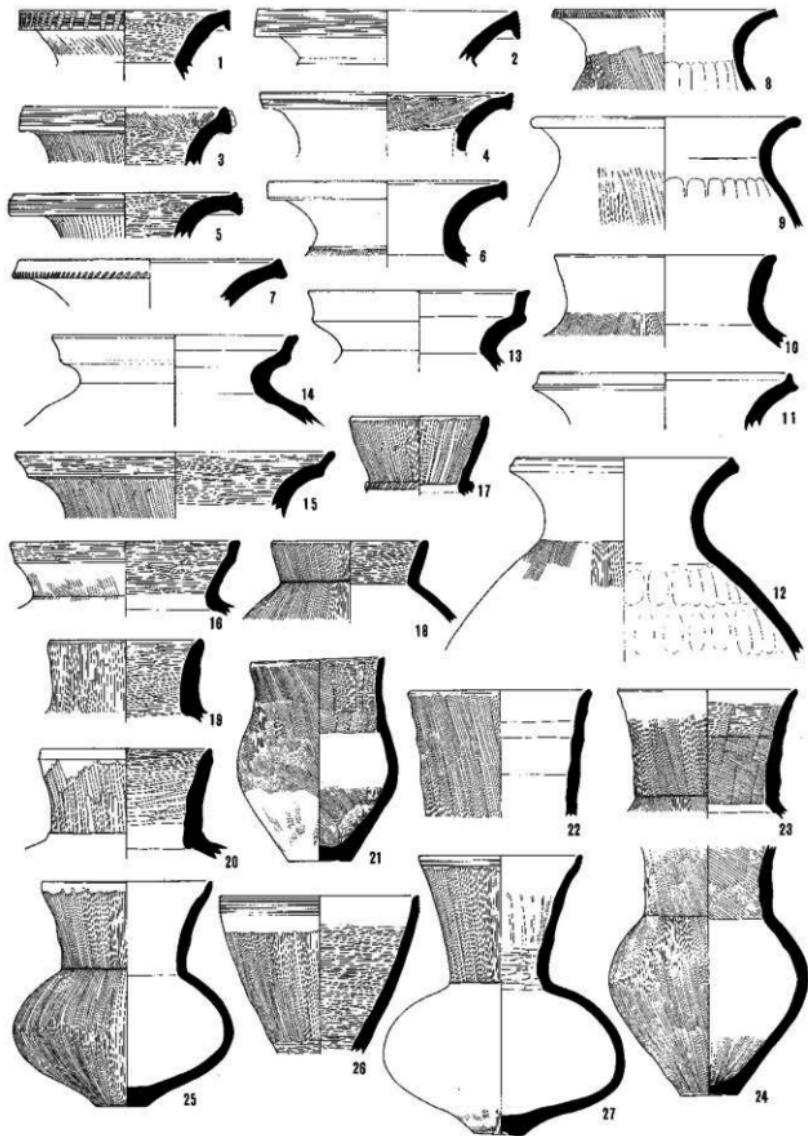
第2に、当地域は弥生時代後期を中心とする多量の土器が出土したことによって、遅くとも弥生時代後期には安定した土地を居住地として、聚落周辺の低湿地・沼・及び琵琶湖に生活の様を求めた生活が営まれていたことが、確実に証明されたと言えよう。

いずれにしても、ほ場整備における水路予定地の緯的な発掘調査のため、針江遺跡の詳細は、今後の多くの資料の追加が必要である。

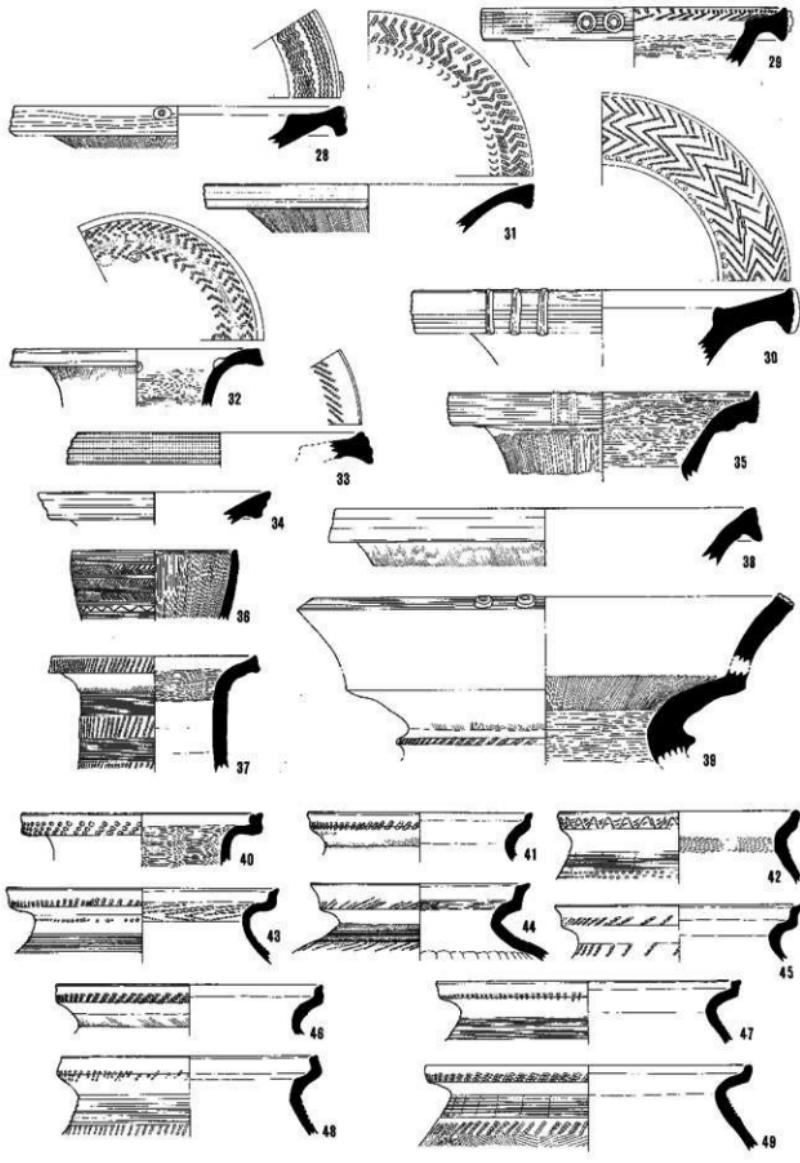
### 註

- ① 清正一・人參義一・岩野見司『新編一宮市史 資料編二』（一宮市 1967年）
- ② 久永春男・芳賀陽「久山遺跡」（『瓜郷』 豊橋市教育委員会 1963年）
- ③ 大參義一「弥生式土器から上師器へ 東海地方西部の場合」（『名古屋大学文学部研究論集（史学）』第47期 1968年）
- ④ 小林行雄「大阪府枚岡市額田町西ノ辻遺跡I地点の土器」（『弥生式土器集成』資料編1 1958年）
- ⑤ 都出比呂志「古墳出現前夜の業閉關係」（『考古学研究』第20巻第4号 1974年）
- ⑥ 勝邦男「上小阪遺跡」（『上小阪・瓜生堂・新家遺跡調査報告書』 東大阪市遺跡保護調査会 1976年）
- ⑦ 宇木隆裕ほか『馬場川遺跡』（東大阪市埋蔵文化財包含地調査概報14 東大阪市教育委員会 1975年）
- ⑧ 大橋信彌・別所健二・谷口徹「久野部遺跡発掘調査報告書—七ノ坪地区—」（滋賀県教育委員会・野洲町教育委

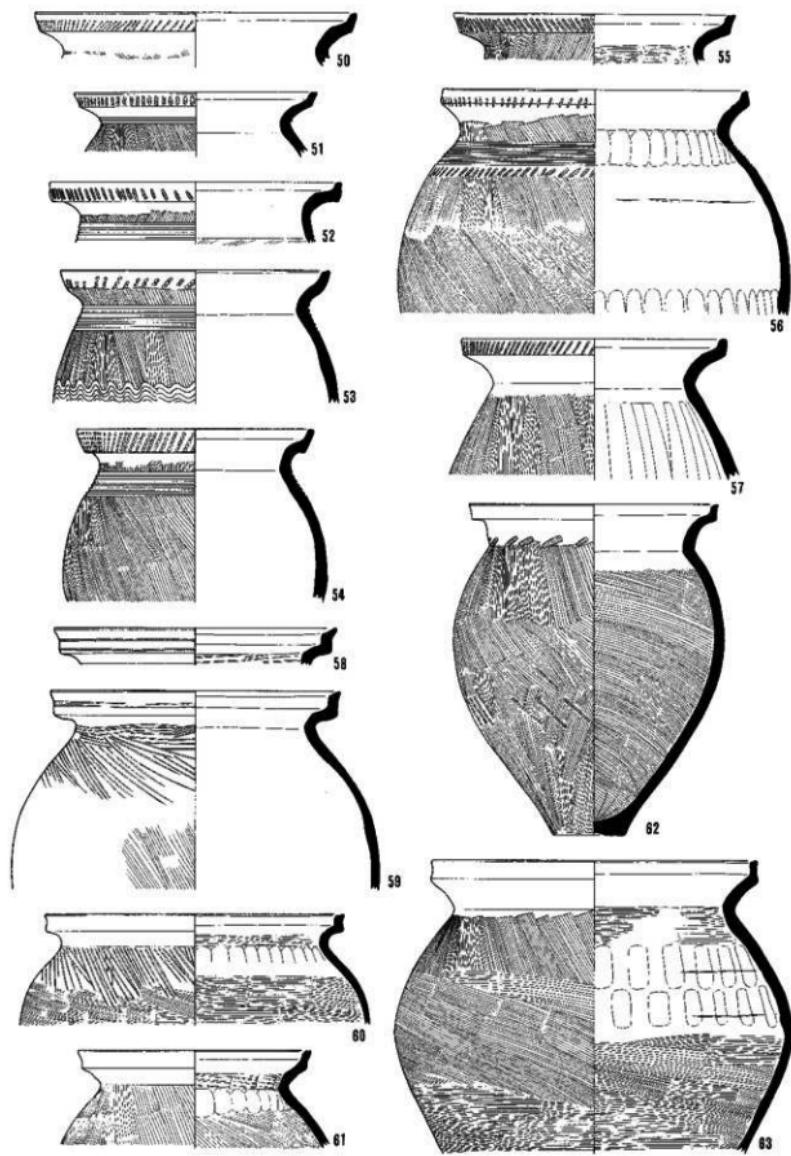
- 員会・滋賀県文化財保護協会 1977年)
- ⑩ 福永信雄「上六万寺遺跡」(『東大阪市遺跡保護調査会年報』Ⅰ 東大阪市遺跡保護調査会 1975年)
- ⑪ 丸山竜平ほか「京都市片岡遺跡」(『は揚整備関係遺跡発掘調査報告書Ⅲ-Ⅱ』 滋賀県教育委員会・滋賀県文化財保護協会 1977年)
- ⑫ 出辯昭三編『湖西線関係遺跡調査報告書』(滋賀県教育委員会 1973年)
- ⑬ 原口正三「大阪府松原市上出町遺跡の調査」(『大阪府立島上高校研究紀要3』 1968年)
- ⑭ 石野博信・関川尚功『纏向』(桜井市教育委員会 1976年)
- ⑮ 本田修平・塙内宏司・奥野宗寛・折井千枝子「滋賀県下の庄内式土器一體内より挿入された龜形土器の分布ー」(『滋賀文化財だより』No.9 滋賀県文化財保護協会 1977年)
- ⑯ 萩山雅昭「大和における古式土師器の実態ー大垣市布留遺跡出土資料ー」(『古代文化』第26巻第2号 1974年)
- ⑰ 横木澄夫・荒木繁行「金沢市下安原海岸遺跡の第Ⅰ次調査」(『石川考古学研究会々誌』第18号 1975年)  
平良泰久「曾我谷遺跡発掘調査概報」(園部町埋蔵文化財調査報告書第二集 园部町教育委員会 1977年)
- ⑱ 中西常雄「北大津の変遷ー弥生時代から古墳時代へー」(1979年)
- ⑲ 宮成良佐『高田遺跡(長浜電報電話局敷地内所在)調査報告書』(長浜市教育委員会・滋賀県文化財保護協会 1980年)
- ⑳ 註①・②・③に同じ
- ㉑ 中谷雅治ほか「鴨池遺跡」(『国道8号線長浜バイパス開通遺跡調査報告書』Ⅱ 滋賀県教育委員会 1973年)
- ㉒ 註㉑に同じ
- ㉓ 宮成良佐『宮司遺跡・十里町(字十五町地区)遺跡調査報告書』(宮司遺跡発掘調査会・長浜市遺跡発掘調査会  
・長浜市教育委員会 1977年)



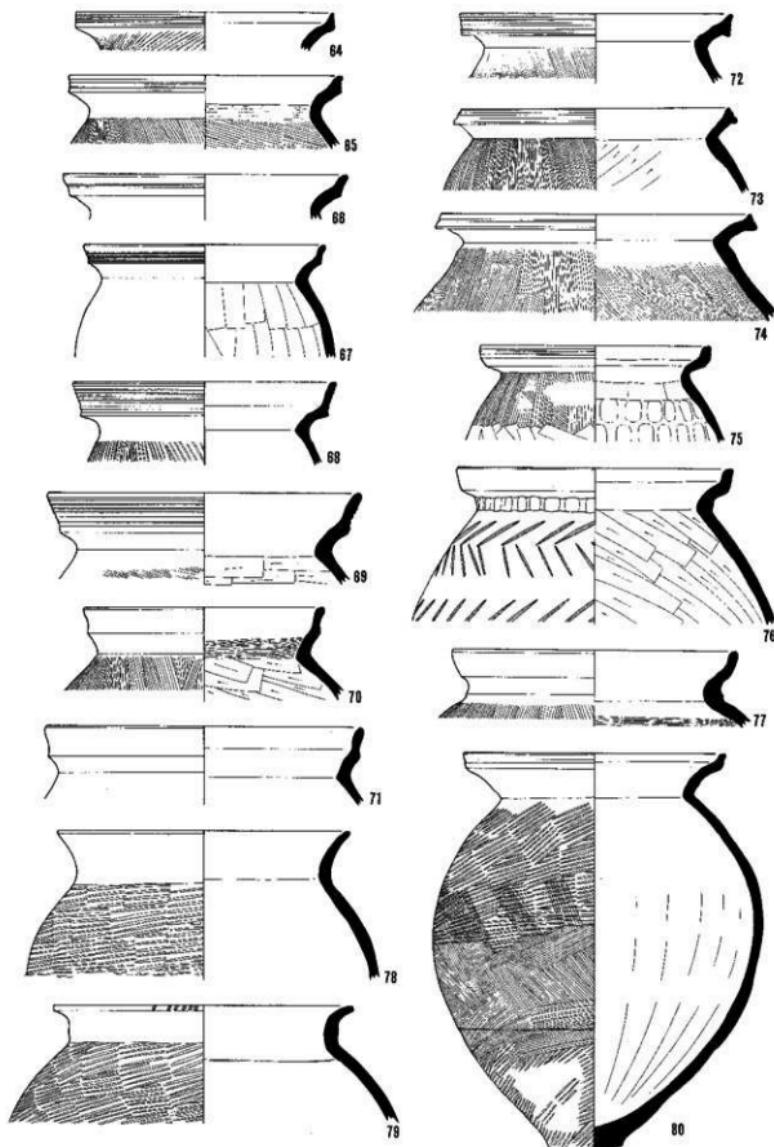
第5図 土器実測図(1)



第6図 土器実測図(2)

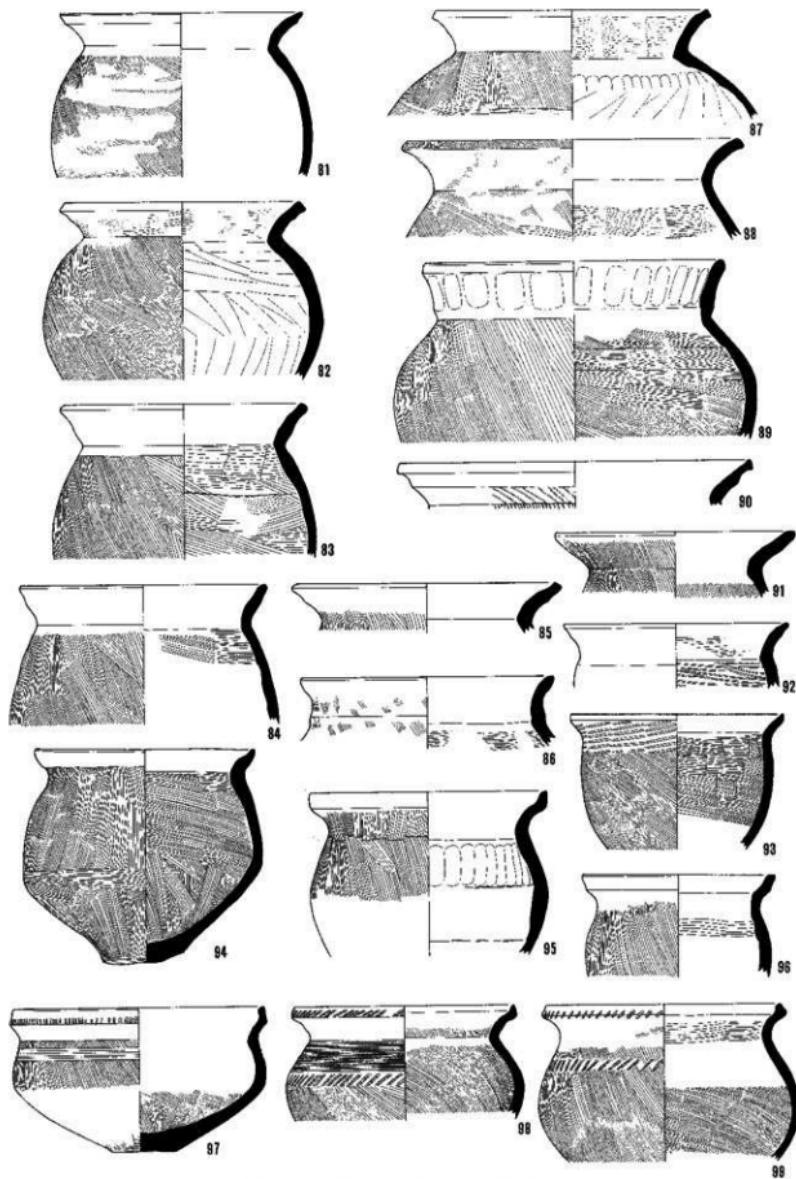


第7図 土器実測図(3)

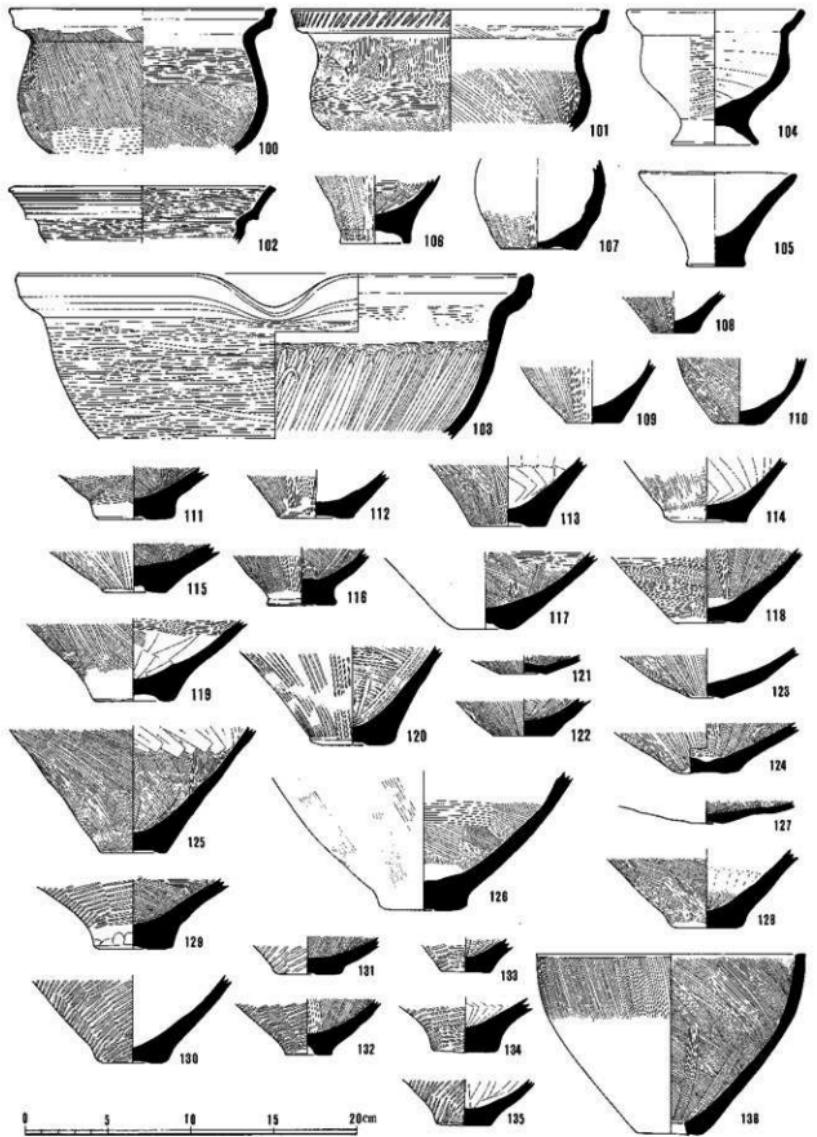


0 5 10 15 20cm

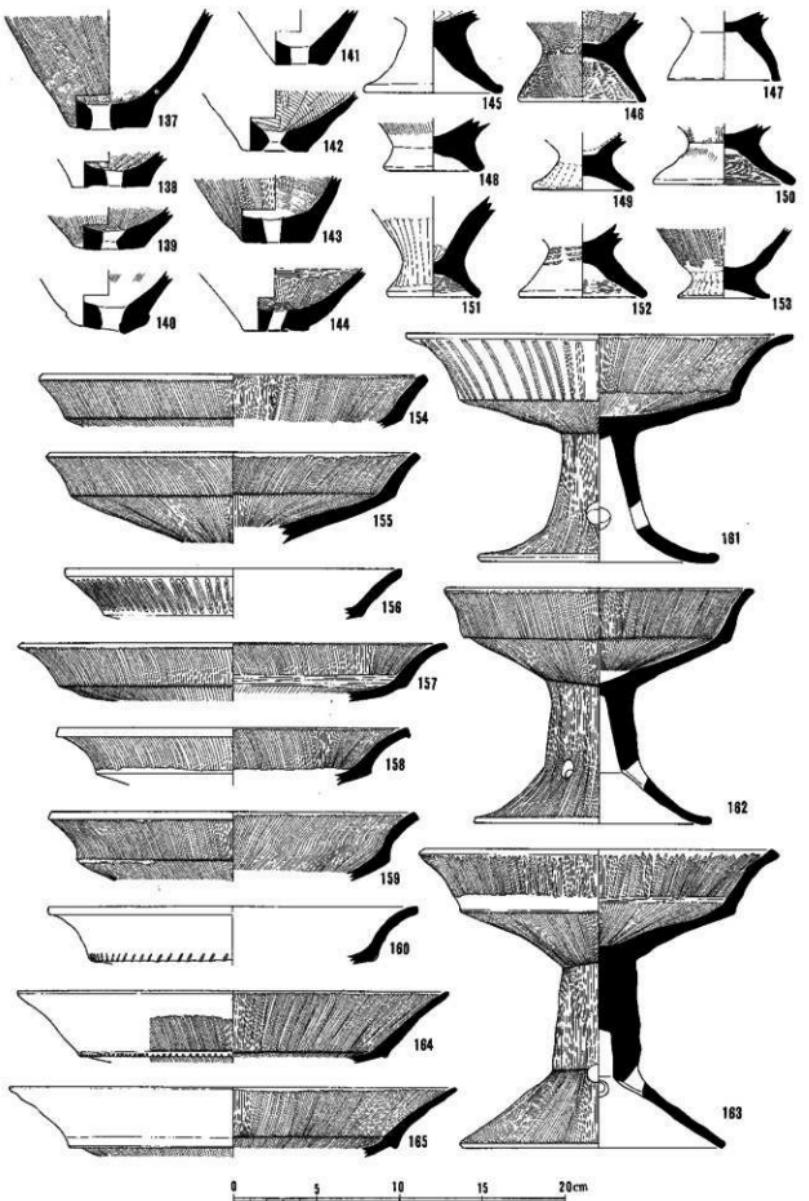
第8図 土器実測図(4)



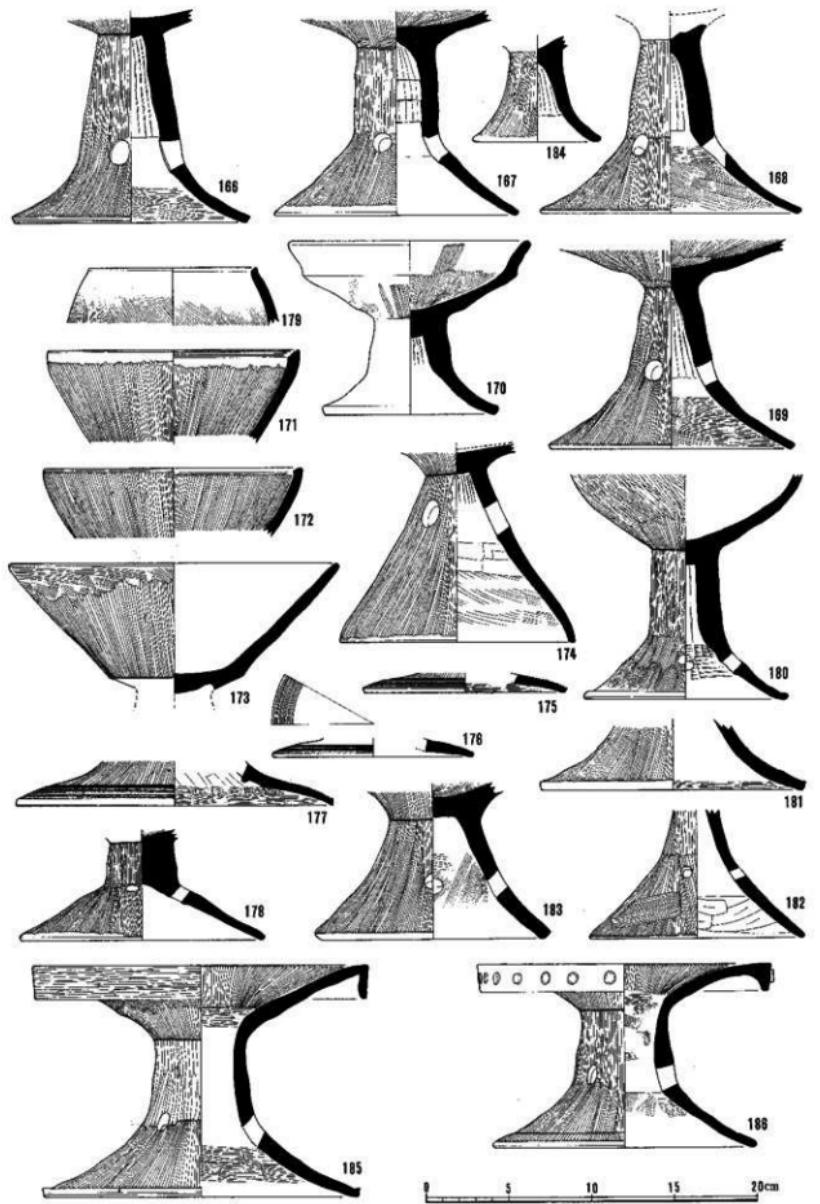
第9圖 土器実測図(5)



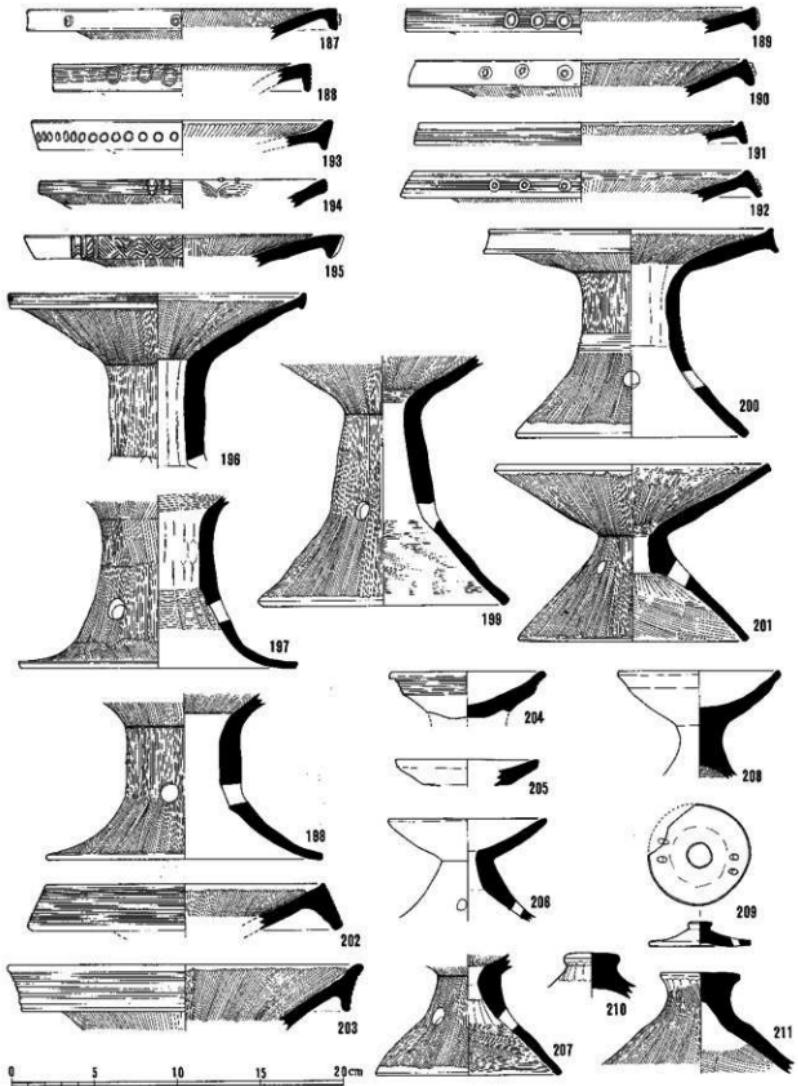
第10図 七器実測図(6)



第11図 土器実測図(7)



第12図 土器実測図(8)



第13図 十器実測図(9)

針江遺跡出土土器観察表

器 形	番号	法 直(cm)	形 態 の 特 徴	手 法 の 特 徴	備 考
壺	1 • 2	口径 1、12.6 2、15.6	頸部よりくの字状に外反し、口縁部を垂下し、端部はやや尖り気味におわる。(1・2)	外面刷毛目、内面横方向の箠磨き(1)施す。 口縁部外側に擬回線(1・2)、櫛状具の削突例点(1)、頸部貼付凸帯(2)を施す。2は内外面摩滅する。	色調 灰白色(1・2) 胎土 精良 焼成 硬 残部 L/5(1)、L/8(2) 地区 第2ブロック(1) 第6ブロック(2)
	3 4 5	口径 3、11.9 4、15.0 5、13.2	頸部よりくの字状に外反し、口縁端部を上・下方に突出する。(3~5)	口縁部横なで、外面縱方向・内面横方向の箠磨き(3~5)、内面横方向の箠磨き(4)施す。 口縁部外側に擬回線施す。(3~5) 竹管文をもつ円形浮文施す(3)もある。	色調 淡黃灰色(3) 茶灰色(4) 黃灰色(5) 胎土 精良 焼成 硬 残部 L/6(3・5) 完存(4) 地区 第2ブロック(3) 第1ブロック(4) 第6ブロック(5)
	6 • 7	II径 6、14.2 7、15.6	頸部よりくの字状に外反し、口縁端部を上・下方につまみ出す。(6・7)	口縁部横なで(6・7)、頸部外面刷毛目(6)施す。 口縁部下端部に櫛状具による削突文(7)施す。	色調 淡茶褐色(6) 淡黃灰色(7) 胎土 精良 焼成 硬 残部 L/3(6)、L/7(7) 地区 第9ブロック(6) 第8ブロック(7)
	8	II径 13.2	頸部よりくの字状にゆるやかに外反し、口縁端部は万形状におわる。	口縁部横なで、体部外面刷毛目、内面なで仕上げ・指圧痕あり。 口縁端部に刷毛目痕あり。	色調 赤褐色 胎土 精良 焼成 硬 残部 L/10 地区 第8ブロック
	9	口径 15.6	頸部よりくの字状にゆるやかに外反し、II縁端部は肥厚し丸くおわる。	口縁部横なで、体部外面板状具による器面刷祭、内面なで仕上げする。	色調 淡赤褐色 胎土 精良 焼成 硬 残部 L/10 地区 第8ブロック
	10	口径 10.0	頸部より外反氣味に上方にのび、口縁端部は丸くおわる。毛目、内面なで仕上げする。	口縁部横なで、体部外面刷毛目、内面なで仕上げする。	色調 赤褐色 胎土 精良 焼成 硬 残部 L/3 地区 第1ブロック
	11 • 12	口径 11、15.0 12、12.8	頸部よりくの字状にゆるやかに外反し、口縁端部は上端をつまみ出す。(11・12) 体部は丸味をもつ(12)。	口縁部横なで(11・12)、体部外面なで仕上げで刷毛目痕・内面なで仕上げで指圧痕(12)あり。	色調 淡灰白色(11) 淡黃灰色(12) 胎土 精良 焼成 硬 残部 L/8(11) L/4(12) 地区 第2ブロック(11) 第1ブロック(12)
	13 • 14	口径 13、13.0 14、14.0	頸部よりくの字状に外反し、屈曲部をもち、そのまま外反氣味に上方にのび、口縁端部は外方につまみ出すように丸くおわる。	口縁部横なで(13・14)、体部内外面なで仕上げ(14)する。	色調 淡赤褐色(13) 淡黃褐色(14) 胎土 精良 焼成 硬 残部 L/4(13)、L/7(14) 地区 第2ブロック(13) 第7ブロック(14)
	15 • 16	口径 15、19.0 16、13.6	頸部よりくの字状に外反し、弱い屈曲部をもち、そのまま立ち上がり、端部を丸く(15)・万形状(16)におわる。	口縁部横方向の箠磨き(15)・外縁方向の箠磨き(15)、外向横なでで刷毛目痕(16)あり。	色調 茶灰色(15) 褐灰色(16) 胎土 精良 焼成 硬 残部 L/10(15)、L/3

						(16) 地区 第8ブロック (15) 第9ブロック (16)
17	口径 8.0	頭部よりやや内凹気味に直 口し、口縁端部は丸くおわる。	頭部貼付凸帯に棒状具による 刺突列点文施す。	口縫部縦方向の荒磨き、頭 部の貼付凸帯に棒状具による 刺突列点文施す。	色調 淡赤褐色 胎土 精良 焼成 硬 残部 1/5 地区 第2ブロック	
18	口径 9.2	頭部よりくの字状に直口し、 口縁端部は丸味をもたせる。	口縫部外面縦方向・内面横 方向の荒磨き、体部外面縦方 向の荒磨き、内面なで仕上げ する。	口縫部外面縦方向・内面横 方向の荒磨き施す。	色調 淡赤黄色 胎土 精良 焼成 硬 残部 1/6 地区 第10ブロック	
19 · 20	口径 9.0 19. 10. 1	頭部よりくの字状に直口し、 口縫端部は丸味をおわる。 (19+20)	頭部内面に接合の跡の突出 痕あり。(19+20)	口縫部外面縦方向・内面横 方向の荒磨き施す。	色調 淡黄灰色 (19) 灰白色 (20) 胎土 精良 焼成 硬 残部 1/6 (19)、完存 (20) 地区 第7ブロック (19) 第2ブロック (20)	
21	口径 8.0 器高 12.1 底径 3.8	頭部より外反気味に上方に のび、口縁端部は万形状にお わり、体部は丸味をもち、底 部は平底である。	内外面縦・横方向の刷毛目 で、体部外面下方・内面上方 なで仕上げて、体部外面刷毛 目復り。	内外面縦・横方向の刷毛目 で、体部外面下方・内面上方 なで仕上げて、体部外面刷毛 目復り。	色調 赤褐色 胎土 精良 焼成 硬 残部 ほぼ完形 地区 第2ブロック	
22 23 24	口径 10.6 23. 10. 7 底径 3.3	頭部より外反気味に上方に のび、口縫端部は尖り気味に おわる。(22. 23) 体部は丸味をもち、底部は 平底で若干上げ底気味である。 (24)	口縫部外面刷毛目 (22~24) で、内面刷毛目 (23. 24)・ なで仕上げ (22) する。 体部外面刷毛目、内面上方 なで仕上げ・下方刷毛目 (24) 施す。	口縫部外面刷毛目 (22~24) で、内面刷毛目 (23. 24)・ なで仕上げ (22) する。 体部外面刷毛目、内面上方 なで仕上げ・下方刷毛目 (24) 施す。	色調 淡赤褐色 (22) 赤褐色 (23) 淡赤褐色 (24) 胎土 精良 焼成 硬 残部 1/5 (22. 23) 1/2 (24) 地区 第3ブロック (22) 第4ブロック (23) 第2ブロック (24)	
25	口径 10.2 器高 13.7 底径 3.0	頭部より外反気味に上方に のび、口縫端部は内凹気味に 尖り気味におわり、体部は扁 半気味に丸味をもたせ、底部 は平底である。	口縫部外面縦方向の荒磨き ・内面横なでし、体部外面縦 方向の荒磨き・内面なで仕上 げ平滑である。	口縫部外面縦方向の荒磨き ・内面横なでし、体部外面縦 方向の荒磨き・内面なで仕上 げ平滑である。	色調 赤褐色 胎土 精良 焼成 硬 残部 完形 地区 第2ブロック	
26	口径 11.8	頭部より内凹気味に上方に のび、口縫端部は丸くおわる。	口縫部横なで、縦・横方向 の荒磨き施す。 口縫部に横彫文施す。	口縫部横なで、縦・横方向 の荒磨き施す。	色調 淡黄灰色 胎土 精良 焼成 硬 残部 1/4 地区 第2ブロック	
27	口径 9.8 器高 16.9 底径 2.9	頭部より外反気味に上方に のび、口縫端部は内凹気味に 尖り気味におわり、体部は扁 平気味に丸味をもたせ、底部 は上げ底である。	口縫部横なで、縦・横方向 の荒磨き、内面に凹凸あり。 体部外面磨滅するが、刷毛 目痕あり、内面なで仕上げで 平滑にする。	口縫部横なで、縦・横方向 の荒磨き、内面に凹凸あり。 体部外面磨滅するが、刷毛 目痕あり、内面なで仕上げで 平滑にする。	色調 赤褐色 胎土 精良 焼成 硬 残部 ほぼ完形 地区 第2ブロック	
28 29 30	口径 19.6 29. 18. 2 30. 22. 6	頭部よりくの字状に外反し、 内面に突出部をもち平坦面を もら、口縫部上端をつまみ上 げ下湖を差し、口縫端部は 万形状 (28)・尖り気味 (29. 30) におわる。	口縫部横なで (28~30)、 外面刷毛目 (28)、内面横方 向の荒磨き (29)、内面な で仕上げ (30) する。 口縫部外面に回線 (28~30) 施し、竹管文をもつ円形浮 文 (28. 29)・3本一組の棒 状浮文 (30)、内面に棒状具	口縫部横なで (28~30)、 外面刷毛目 (28)、内面横方 向の荒磨き (29)、内面な で仕上げ (30) する。 口縫部外面に回線 (28~30) 施し、竹管文をもつ円形浮 文 (28. 29)・3本一組の棒 状浮文 (30)、内面に棒状具	色調 淡茶褐色 (28) 淡黄褐色 (29) 淡灰白色 (30) 胎土 精良 焼成 硬 残部 1/15 (28)、1/10 (29)、1/7 (30) 地区 第4ブロック (28 . 29)	

			による波状文(28)・刺突列点文(29, 30)施す。	第3ブロック(30)
31	口径 19.6	頭部より外反し、口縁端部を垂下し、丸くおわる。	口縁部横なで、外面刷毛目 口縁部外面に回線文、内面に櫛状具による刺突文・半載竹管文施す。	色調 赤褐色 胎土 精良 燃成 硬 残部 1/7 地区 第4ブロック
32	口径 14.6	頭部より外反し、口縁部下端を外方につまみ出し、丸くおわる。	口縁部横なし、刷毛目痕あり。口縁部内面に櫛状具による刺突列点文・瘤状突起を2個一対施す。	色調 淡黄灰色 胎土 精良 燃成 硬 残部 1/4 地区 第3ブロック
33	口径 17.0	外反する口縁部で水平面をもち、端部を上・下方に突出し、丸くおわる。	口縁部横なです。 口縁部外面凹線施し、丹跡し、内面に櫛状具による刺突列点文施す。	色調 淡黄褐色 胎土 精良 燃成 硬 残部 1/20 地区 第5ブロック
34	口径 13.9	外上方にのびる口縁部をもち、口縁端部上端は丸くおわり、下端は垂下し丸くおわる。	口縁部横なしで、口縁部外面に回線施す。	色調 淡黄褐色 胎土 精良 燃成 硬 残部 1/10 地区 第2ブロック
35	口径 18.5	頭部よりくの字状に外反し、口縁端部を上・下方に突出し尖り気味におわる。	口縁部横なしで、外面縦方向・内面横方向の簾磨き施す。 口縁部外面に回線・棒状浮文を施す。	色調 淡灰白色 胎土 精良 燃成 硬 残部 1/8 地区 第2ブロック
36	口径 9.6	内弯気味に直口し、口縁端部は丸くおわる。	口縁部内面縱方向の簾磨き施し、外面上に櫛状具による直線文・刺突列点による羽状文・山形文を施す。	色調 淡灰黄色 胎土 精良 燃成 硬 残部 1/6 地区 第2ブロック
37	口径 12.2	上方にのびる頭部で、口縁部上方が外反し、端部上・下端をつまみ出す。	口縁部横なしで、刷毛目痕あり、内面下方なで仕上げする。 口縁部外面に櫛状具による刺突列点文・直線文を施す。	色調 淡褐色 胎土 精良 燃成 硬 残部 1/4 地区 第8ブロック
38	口径 25.0	外上方にのびる口縁部であり、口縁端部を垂下し丸くおわる。	口縁部横なしで、外面に刷毛目を施す。 口縁部外面に一条の回線を施す。	色調 淡灰白色 胎土 精良 燃成 硬 残部 1/8 地区 第2ブロック
39	口径 30.0	頭部よりくの字状に外反し、屈曲部をもち、そのまま外反気味に立ち上がり、口縁端部は方形状におわる。	口縁部横なしで、刷毛目痕あり、内面に縱・横方向の簾磨き施す。口縁部外面に櫛状具の直線文・竹管文をもつ円形浮文、頭部に貼付凸凹施し、櫛状具による刺突列点文施す。	色調 赤褐色 胎土 精良 燃成 硬 残部 1/15 地区 第5ブロック
観	40	口径 14.4	頭部よりゆるやかに外反し、屈曲部をもち、口縁端部を回状に丸くおわる。	口縁部横なしで、内面刷毛目痕あり、屈曲部に櫛状具による刺突列点文施す。
	41	口径 41.13.4	頭部よりくの字状に外反し、屈曲部をもち、そのまま上方にのび、口縁端部を丸くおわる(41・46)、外方につまみ上げる(43・46)、外方に突出する(44・46)、頭部に櫛状具による刺突文、頭部に櫛状具による直線文・刺突列点文施す。	色調 淡褐色(41) 淡黄褐色(43) 淡茶灰色(44・45) 淡茶褐色(46)
	43	口径 16.3	頭部よりくの字状に外反し、屈曲部を丸くおわる(41・46)、外方につまみ上げる(43・46)、外方に突出する(44・46)、頭部に櫛状具による刺突文、頭部に櫛状具による直線文・刺突列点文施す。	淡白色(47) 黃灰色(48)
	44	口径 13.2	頭部よりくの字状に外反し、屈曲部を丸くおわる(41・46)、外方につまみ上げる(43・46)、外方に突出する(44・46)、頭部に櫛状具による直線文・刺突列点文施す。	淡黃褐色(49)
	45	口径 14.8	頭部よりくの字状に外反し、屈曲部を丸くおわる(41・46)、外方に突出する(43・46)、頭部に櫛状具による直線文・刺突列点文施す。	胎土 精良 燃成 硬 残部 1/8 (41)、1/6
	46	口径 16.0	頭部よりくの字状に外反し、屈曲部を丸くおわる(41・46)、外方に突出する(43・46)、頭部に櫛状具による直線文・刺突列点文施す。	
	47	口径 18.2	頭部よりくの字状に外反し、屈曲部を丸くおわる(41・46)、外方に突出する(43・46)、頭部に櫛状具による直線文・刺突列点文施す。	
	48	口径 15.2	頭部よりくの字状に外反し、屈曲部を丸くおわる(41・46)、外方に突出する(43・46)、頭部に櫛状具による直線文・刺突列点文施す。	
	49	口径 19.6	頭部よりくの字状に外反し、屈曲部を丸くおわる(41・46)、外方に突出する(43・46)、頭部に櫛状具による直線文・刺突列点文施す。	

		49)。	体部外側に刷毛目(44・49) 施し、内面なで仕上げ(41 ・43~49)し、指圧痕あり(44)。	(43)、1/5(44 ・48)、1/7(45) 1/10(46・47・49)
				地区 第10ブロック (41・46・49) 第2ブロック(43) 第7ブロック(44) 第5ブロック(45) 第8ブロック(47) 第4ブロック(48)
42	口径 14.2	頸部よりくの字状に外反し、 弱い屈曲部をもち、そのまま上方にのび、口縁端部は丸くおわる。	口縁部横なし、内面刷毛目 痕あり、屈曲部にくずれた傳 播波状文、体部に柳状具によ る直線文・刺突列点文す。	色調 淡赤褐色 胎土 精良 燃成 硬 残部 1/5
50	口径 50. 19. 2	頸部よりくの字状に外反し、 屈曲部をもち、そのまま上方 にのびるが、屈曲部が若干下 がり気味(52・54)・ゆるや かな屈曲部(53)があり、口 縁端部は万形状におわる(50 ・52~54・56・57)・凹状に 丸くおわる(51・55)がある。 57. 15. 8 体部は下方にのびる(53・ 54)、丸殊をもつ(56)があ る。	口縁部横なし、外側刷毛 目(50・52~56)施し、内面 刷毛目痕(52・55)あり。 体部外側刷毛目(51・53・ 54・56・57)施し、内面なで 仕上げあり、指圧痕(56) ・板状具による器面劃參(57 )がある。屈曲部外側に傳 播波状具による直線文・波 状文(53)、直線文・刺突列点 文(56)施す。	色調 淡黄褐色(50) 赤褐色(51) 淡赤褐色(52) 灰白色(53) 淡赤褐色(54) 淡茶灰色(55) 淡赤褐色(56) 淡灰褐色(57)
57	51. 14. 4 52. 17. 4 53. 16. 0 54. 14. 0 55. 16. 9 56. 18. 2 57. 15. 8			地区 第4ブロック(50 ・55) 第5ブロック(51) 第6ブロック(52 ・57) 第8ブロック(53) 第3ブロック(54) 第2ブロック(56)
58	口径 58. 17. 0	頸部よりくの字状に外反し、 屈曲部をもち、そのまま上方 にのび、口縁端部は外方に 突出し、丸くおわる。体部は 珠形気味(59)である。	口縁部横なし、内面刷毛 目痕(58)あり、体部外側は カキ目で下方刷毛目、内面な で仕上げする(59)。	色調 淡黄白色(58) 灰白色(59)
59	59. 17. 4		屈曲部に柳状具による直線 文施し、58は断続的である。	胎土 精良 燃成 硬 残部 1/9(58)、1/4 (59)
60	口径 18.0	頸部よりくの字状に外反し、 屈曲部をもち、そのまま上方 にのび、口縁端部は外方に まみ出す。	口縁部横なし、内面刷毛目 痕あり、体部外側カキ目・下 方刷毛目、内面刷毛目・指圧 痕施す。	色調 灰白色 胎土 精良 燃成 硬 残部 1/3
61	口径 13.8	頸部よりくの字状に外反し、 屈曲部をもち、そのまま上方 にのび、口縁端部は凹状に丸 くおわる。	口縁部横なし、内面刷毛 目痕あり、体部外側刷毛目施 し、内面指圧痕あり。	色調 黄褐色 胎土 精良 燃成 硬 残部 1/5
62	口径 14.8 器高 20.0 底径 4.2	頸部よりくの字状に外反し、 屈曲部をもち、口縁端部は方 形状におわる。体部は丸殊を	口縁部横なし、体部内外 刷毛目施す。頸部・体部下 位外側に柳状具による刺突列	色調 和灰色 胎土 精良 燃成 硬 残部 完形

		もち、底部は上げ底である。	点文施す。	地区	第2ブロック
63	口径 19.5 64. 15. 4 65. 14. 4 66. 17. 0 67. 14. 4	頭部よりくの字状に外反し、 扁面部をもち、口縁端部は方 形状におわる。体部は中位が 張る。	口縁部横なしで、体部内外 面刷毛目施し、内面上方なで 仕上げ、指圧痕・刷毛目痕あ り。	色調 淡赤黄色 胎土 精良 焼成 硬 残部 1/4	地区 第2ブロック
64	口径 64. 15. 4 65. 14. 4 66. 17. 0 67. 14. 4	頭部よりくの字状に外反し、 端部を上方につまみ上げ口縁 端部を尖り気味(64)・丸く おわるもの(65)や口縁部が 立ち上がり気味で端部は丸く おわる(66・67)がある。	口縁部横なしで、外面刷毛 目施し(64)、頭部内面に刷 毛目痕(65)あり、体部内外 面刷毛目施し(65)、体部外 面なで仕上げ・内面板状具に よる器面調整施す(67)。 口縁部外面に擬回線施す。 (64~67)	色調 淡灰橙色(64) 黄灰色(65・67) 淡赤褐色(66) 胎土 精良 焼成 硬 残部 1/7(64)、1/6 (67)、1/10(65・66)	地区 第2ブロック(64) 第7ブロック(65) 第10ブロック(66) 第4ブロック(67)
68	口径 68. 15. 3 69. 18. 6	頭部よりくの字状に外反し、 内面に段をもち、そのまま立 ち上がり、口縁端部は丸くお わる(68・69)。	口縁部横なしで、外面刷毛 目施し、内面なで仕上げ(68) ・削り(69)する。 口縁部外面に擬回線施す。	色調 淡灰白色(68・69) 胎土 精良 焼成 硬 残部 1/8(68)、1/5 (69)	地区 第2ブロック (68・69)
70	口径 70. 14. 2 71. 18. 6	頭部よりくの字状に外反し、 内面に段をもち、そのまま上 方にのび、口縁端部は丸くお わる(70・71)。	口縁部横なし(70・71)、 内面に刷毛目痕(70)あり、 体部外面刷毛目・内面左上が りの削り(70)施す。	色調 淡褐灰色(70) 淡茶灰色(71) 胎土 精良 焼成 硬 残部 1/5(70)、1/8 (71)	地区 第3ブロック(70) 第2ブロック(71)
72	口径 16. 2	頭部よりくの字状に外反し、 口縁端部を上・下方に突出さ せ、尖り気味におわる。	口縁部横なしで、体部外面 刷毛目・内面板状具による器 面調整で平滑に仕上げる。 口縁部外面に擬回線施す。	色調 淡黄橙色 胎土 精良 焼成 硬 残部 1/7	地区 第2ブロック
73	口径 16. 0	頭部よりくの字状に外反し、 口縁端部を上・下方に突出さ せ、丸くおわる。	口縁部横なしで、体部外面 刷毛目・内面右上がりの箇削 り施す。 口縁部外面に凹輪施す。	色調 淡黄褐色 胎土 精良 焼成 硬 残部 1/15	地区 第5ブロック
74	口径 18. 6	頭部よりくの字状に外反し、 口縁端部を上・下方に突出さ せ、丸くおわる。	口縁部横なしで、体部内外 面に刷毛目施す。	色調 淡灰色 胎土 精良 焼成 硬 残部 1/6	地区 第4ブロック
75	口径 13. 8	頭部よりくの字状に外反し、 内面に段をもち、そのまま上 方にのび、口縁端部は方形状 におわる。	口縁部横なしで、体部外面刷 毛目・なで仕上げ・板状具に よる器面調整・内面板状具に よる器面調整・指圧痕あり。	色調 淡茶灰色 胎土 精良 焼成 硬 残部 1/8	地区 第3ブロック
76	口径 16. 4	頭部より外反し、内面に段 をもち、そのまま上方にのび、 口縁端部は方形状におわり、 体部は丸味もつ。	口縁部横なしで、頭部外面指 圧痕あり、体部外面摩滅し、 箇状具による羽状文、内面は 左上がりの箇削りする。	色調 赤褐色 胎土 精良 焼成 硬 残部 1/5	地区 第3ブロック
77	口径 16. 8	頭部よりくの字状に外反し、 さらに内寄気味に上方にのび、 口縁端部は丸くおわる。	口縁部横なしで、体部内外 面刷毛目施す。	色調 黄灰色 胎土 精良 焼成 硬 残部 1/10	地区 第7ブロック
78	口径	頭部よりくの字状に外反さ	口縁部横なしで、体部外	色調 淡黒灰色(78)	

*	79	78, 17. 4 79, 17. 6	せ、口縁端部は丸くおわり、 体部は球形気味である(78・ 79)。	右上がりの叩き、内面などで仕 上げる(78・79)。 口縁端部に笠状具による刺 突文施す(79)。	黄灰色(79) 胎土 精良 焼成 硬 残部 1/6 (78)、1/10 (79) 地区 第2ブロック(78) 第7ブロック(79)
80		口径 15. 6 器高 23. 9 底径 4. 4	頭部よりくの字状に外反し、 口縁部を上方につまみ上げ、 端部は丸くおわる。 体部は球形気味で、平底の 底部をもつ。	口縁部横なで、内面刷毛目 痕あり、体部外面3分割の叩 きで、中位に刷毛目・下位に なで仕上げ、内面板状具によ る器面調整・なで仕上げする。	色調 淡灰色 胎土 精良 焼成 硬 残部 ほほ完形 地区 第2ブロック
*	81	口径 81, 14. 6	頭部よりくの字状に外反し、 口縁部をつまみ出し端部は尖 り気味(81)、方形状(82) におわる。	口縁部横なで、刷毛目痕(81) あり、体部外面刷毛目、 なで仕上げ(81)、内面なで 仕上げ(81)・板状具による 器面調整(82)で平滑に仕上 げる。	色調 灰白色(81) 淡茶褐色(82)
*	82	82, 14. 2	休部は球形気味である(81) ・(82)。	口縁部横なで、刷毛目痕(81) あり、体部外面刷毛目、 なで仕上げ(81)・板状具による 器面調整(82)で平滑に仕上 げる。	胎土 精良 焼成 硬 残部 1/4 (81・82) 地区 第8ブロック(81) 第4ブロック(82)
83	83,	口径 14. 2 84, 14. 7	頭部よりくの字状に外反し、 弱い棱をもち(84・85)、口 縁端部は方形状におわる(83 ・85)、丸くおわる(84・86 ・86)。	口縁部横なし、外面に刷 毛目痕(86)あり、休部外面 刷毛目で、内面刷毛目(83) なで仕上げで刷毛目痕(84・ 86)、なで仕上げ(85)する。 休部は丸味をもつ。	色調 淡茶灰色(83・84) 淡茶褐色(85) 淡白灰色(86) 胎土 精良 焼成 硬 残部 1/5 (83・85) 1/7 (84)、1/10 (86) 地区 第3ブロック(83) 第4ブロック(84) 第2ブロック(85) 第10ブロック(86)
86	85, 15. 6 86, 15. 0				
87		口径 16. 2	頭部よりくの字状に外反し、 口縁端部は方形状におわる。 休部は丸味をもつ。	口縁部横なし、内面刷毛目 施し、休部外側刷毛目、内面 板状具による器面調整・捺正 痕あり。	色調 淡赤褐色 胎土 精良 焼成 硬 残部 1/4 地区 第4ブロック
88		口径 19. 8	頭部よりくの字状にゆるや かに外反し、口縁端部は方 形状におわる。	口縁部横なし、外側刷毛目 痕あり、休部内外面に刷毛目 を施し、口縁端部に刷毛目痕 あり。	色調 淡茶褐色 胎土 精良 焼成 硬 残部 1/6 地区 第4ブロック
89		口径 17. 6	頭部より外反気味に上方に のび、口縁端部は丸くおわる。	口縁部横なし、内面指 痕痕あり、休部内外面刷毛目 施す。	色調 淡灰色 胎土 精良 焼成 硬 残部 1/5 地区 第6ブロック
90		口径 21. 0	頭部よりくの字状に外反し、 弱い棱をもち、口縁端部は上 ・下端をつまみ出す。	口縁部横なし、外面刷毛目 痕あり。	色調 黄灰色 胎土 精良 焼成 硬 残部 1/10 地区 第10ブロック
91		口径 14. 2	頭部よりくの字状に外反し、 口縁端部は丸くおわる。	口縁部横なし、外側刷毛目 施し、休部内外面に刷毛目施 す。	色調 淡茶褐色 胎土 精良 焼成 硬 残部 1/8 地区 第5ブロック
92		口径 13. 4	頭部よりくの字状に外反し、 口縁端部をつまんで、丸くお わる。	口縁部横なし、内面刷毛 目痕あり、休部外面なで仕上 げし、内面刷毛目施す。	色調 淡黄灰色 胎土 精良 焼成 硬 残部 1/7 地区 第8ブロック
93		口径 12. 7	頭部よりくの字状に外反し、	口縁部横なし、外側口縁	色調 淡茶褐色

		口縁端部は上方に尖り気味におわる。	部まで叩きを施し、体部外面刷毛目、内面刷毛目、下方で仕上げる。	胎土 精良 焼成 硬 残部 1/3 地区 第1ブロック
	94	口径 13 . 0 器高 13 . 2 底径 4 . 8	頭部よりこの字状に外反し、口縁部は内寄り気味に端部は尖る。体部は中位が張り、平底の底部をもつ。	口縁部横なし、体部内外面刷毛目施す。 底部裏面に板状具による調整設あり。
	95	口径 14 . 2 ・ 96 . 11 . 4	頭部よりこの字状に外反し、内面に弱い段をもち、口縁端部は方形状におわる(95・96)。 体部は丸味をもつ。	口縁部横なし、外側刷毛目施し(95)、体部外側刷毛目で、95は下方摩滅、内面はなで仕上げであり、指圧痕(95)・刷毛自痕(96)あり。
	96			色調 淡茶灰色(95) 胎土 精良 焼成 硬 残部 はば完形 地区 第2ブロック
鉢	97	口径 14 . 9 器高 8 . 7 底径 3 . 8	頭部より外反して、屈曲部をもち、口縁端部は方形状におわる。体部は扁平気味で、平底の底部をもつ。	口縁部横なし、体部内外面刷毛目、なで仕上げする。 屈曲部、頭部に板状具による刺突列点文・直線文施す。
	98	口径 13 . 2 ・ 99 . 14 . 0	頭部よりこの字状に外反し、屈曲部をもち、そのまま内上方にのび、口縁端部は丸くおわる。体部は丸味をもつ。	口縁部横なし、内面刷毛目痕あり、体部外側刷毛目施す。屈曲部・頭部外面に板状具による刺突列点文・直線文施す。
	100	口径 15 . 8	頭部より外反して、屈曲部をもち、口縁端部を外方につまり上げ丸くおわる。 体部は扁平気味である。	口縁部横なし、体部内外面に刷毛目痕す。
	101	口径 19 . 0	頭部より外反して、屈曲部をもち、口縁端部は方形状におわる。体部は扁平気味である。	口縁部横なし、内面に刷毛目痕あり、体部内外面刷毛目施す。屈曲部に板状具による刺突列点文施す。
	102	口径 15 . 4	頭部よりこの字状に外反し、内面に段をもち、そのまま上方にのび、口縁端部は方形状におわる。	口縁部内外面横方向の窪磨き施す。口縁部外面に板状具施す。
	103	口径 30 . 8	頭部より外反して弱い段をもち、口縁端部は丸くおわり、外方に水平状に折れ曲がる片口をもつ。	口縁部内外面横なし、内面刷毛目痕あり、体部外側横方向・内面縦方向の窪磨きで、内面刷毛目痕あり。
	104	口径 10 . 4 器高 8 . 2 底径 5 . 2	頭部よりこの字状に内寄り気味にのび、口縁端部は丸形におわる。体部は丸味をもち、脚台をもつ。	口縁部横なし、体部外側横方向の窪磨き、内面左上がりの削り出し、脚台部横なしとする。
	105	口径 9 . 6 器高 5 . 7 底径 3 . 6	平底の底部より外反気味に外上方にのび、口縁端部は丸くおわる。	内外面、摩滅にて不明。
底 部	106	底径 4 . 2	上げ底の底部で、体部は内寄り気味にのびる。	内外面刷毛目、底部裏面なで仕上げする。
	107		上げ底気味の半底で、体部	内外面なで仕上げで、外側
				色調 淡黄灰色

	底径 4 . 8	は内窓する。	刷毛目施あり。	胎土 精良 燃成 硬 残部 1/2 地区 第7ブロック
108 ・ 110	底径 108. 2 . 8 109. 3 . 4 110. 3 . 0	平底の底部で、外上方にのびる (108・109)、内窓気味に上方にのびる。 (110)	外面刷毛目であり、内面摩滅 (108)、なで仕上げする (109・110)。	色調 赤褐色 (108・110) 淡黄灰色 (109) 胎土 精良 燃成 硬 残部 1/2 (108) 完存 (109・110) 地区 第9ブロック (108) 第7ブロック (109) 第2ブロック (110)
111 ・ 117 ・ 119	底径 111. 4 . 5 117. 3 . 5 119. 4 . 2	凹底の底部であり、底部が突出気味 (111)、やや丸味 (117・119) をもたせるようにおわる。 体部は外上方にのびる。	(111) は体部内外面刷毛目施し、底部裏面などで仕上げする。(117) は外面摩滅するが、内面刷毛目施す。 (119) は体部外面刷毛目・下方などで仕上げし、内面刷毛目・下方板状具による器面調整施す。	色調 淡黄灰色 (111) 茶灰色 (117) 淡赤褐色 (119) 胎土 精良 燃成 硬 残部 完存 (111) 2/3 (117) 1/2 (119) 地区 第9ブロック (111) 第5ブロック (117) 第8ブロック (119)
112 ・ 114 ・ 118 ・ 120 ・ 125 ・ 126	底径 112. 4 . 4 113. 4 . 6 114. 4 . 9 116. 4 . 4 120. 5 . 0 125. 4 . 0 126. 5 . 2	上げ底の底部であり、体部は外上方にのびる。	(112) は外面刷毛目、内面スス付着で不明。(113) は外面刷毛目、内面板状具による器面調整施す。(114) は外面刷毛目・なで仕上げ、内面板状具による器面調整施す。(118) は内外面刷毛目施す。(120) は内外面粗い刷毛目施し、外面などで仕上げする。(125) は内外面刷毛目施し、内面上方左上がりの箇所に施す。(126) は外外面刷毛目施し、なで仕上げする。	色調 淡茶灰色 (112・ 114・120・125) 茶灰色 (113) 淡赤褐色 (118) 灰白色 (126) 胎土 精良 燃成 硬 残部 1/2 (112・126) 2/3 (113・120・ 125) 完存 (114・118) 地区 第2ブロック (112・125) 第4ブロック (113・114) 第8ブロック (118) 第3ブロック (120) 第5ブロック (126)
115	底径 3 . 8	凹底の底部であり、体部は外上方にのびる。	外面荒き施し、内面刷毛目施す。	色調 茶灰色 胎土 精良 燃成 硬 残部 完存 地区 第6ブロック
116	底径 4 . 2	上げ底気味の底部で、やや突出し、体部は外上方にのびる。	内外面刷毛目施し、外面上方などで仕上げする。	色調 淡茶灰色 胎土 精良 燃成 硬 残部 2/3 地区 第9ブロック
121 ・ 127	底径 121. 2 . 8 127. 1 . 7	(121) は、上げ底の底部であり、体部は外上方にのびる。(127) は、表面に瑕みをもつが丸味をもち、体部は外上方にのびる。	(121) は、内外面刷毛目を施す。(127) は、外面上方などで仕上げ、内面刷毛目施す。	色調 淡灰灰色 (121) 淡灰白色 (127) 胎土 精良 燃成 硬 残部 2/3 (121) 完存 (127) 地区 第4ブロック (121) 第2ブロック (127)

	122 ・ 128	底径 122. 3 . 6 128. 4 . 2	平底の底部であり、体部は外上方にのびる。	(122) は内外面刷毛目施し、底部裏面に板状具による調整痕あり。(128) は内外面刷毛目施し、内面上方などで仕上げ・拘束痕あり。	色調 淡灰白色 (122) 茶灰色 (128) 胎土 精良 燃成 硬 残部 完存 (122・128) 地区 第2ブロック (122) 第8ブロック (128)
	128	底径 2 . 0	裏面に小さな窪みをもち、体部は外上方にのびる。	外面部方向の覚書き痕し、内面なで仕上げで平滑に仕上げる。	色調 淡茶灰色 胎土 精良 燃成 硬 残部 完存 地区 第8ブロック
	124	底径 3 . 8	上げ底気味の平底で、体部は外上方にのび、内面に窪みをもつ。	内外面刷毛目を施す。	色調 茶灰色 胎土 精良 燃成 硬 残部 完存 地区 第6ブロック
	129 ・ 135	底径 129. 4 . 7 130. 4 . 2 131. 3 . 9 132. 2 . 9 133. 3 . 0 134. 4 . 0 135. 3 . 3	底部には、上げ底気味 (129・130・131)、裏面窪みをもつ (132)、平底 (133～135) があり、体部は外上方にのびる。	(129) は外面右上がりの叩き、下方なで仕上げ、内面刷毛目施す。(130) は外面右上がりの叩き、内面なで仕上げする。(131～133) は外面右上がりの叩き、内面刷毛目施す。(134・135) は外面右上がりの叩き、内面板状具による器面調整施す。	色調 褐灰色 (129) 黒灰色 (130) 黄灰色 (131) 淡茶灰色 (132) 淡赤褐色 (133) 淡褐灰色 (134) 茶灰色 (135) 胎土 精良 燃成 硬 残部 1/2 (129・130) 完存 (131・133) 2/3 (132・134・ 135) 地区 第9ブロック (129・132) 第8ブロック (130・134) 第6ブロック (131・133) 第2ブロック (135)
盤	136	口径 15 . 2 器高 10 . 9 底径 4 . 8	平底の底部で、体部は内面気味に外上方にのび、口縁端部は形状状におわる。	外面刷毛目・下方なで仕上げし、内面刷毛目施す。底部に一孔をもつ。口縁端部刷毛状具により面取り施す。	色調 淡灰白色 胎土 精良 燃成 硬 残部 1/2 地区 第2ブロック
	137 ・ 144	底径 137. 4 . 6 138. 4 . 8 139. 4 . 3 140. 5 . 0 141. 3 . 1 142. 4 . 0 143. 4 . 2 144. 3 . 9	平底の底部をもち、体部は外上方にのびる。 底部の不定形気味 (140・144) がある。	(137) は外面刷毛目、内面なで仕上げ・下方に刷毛口痕あり。(138・142・144) は外面なで仕上げ、内面刷毛目施す。(139・143) は内外面刷毛目施す。(140) は内外面摩滅するが内面に刷毛孔あり。(141) は外面摩滅し、内面板状具による器面調整で平滑である。 底部には燃成前の一孔をもつ (137～144)。	色調 淡赤褐色 (137・141) 黄灰色 (138・143) 淡褐灰色 (139・144) 赤褐色 (140) 淡茶灰色 (142) 胎土 精良 燃成 硬 残部 1/2 (137・139・ 144) 完存 (138・141・142) 2/3 (140・143) 地区 第2ブロック (137) 第7ブロック (138) 第6ブロック

					(139・140・143) 第9ブロック (141・144) 第1ブロック(142)
脚台部	145	底径 8.0	脚台部であり、外反気味に外下方にのび、脚端部は丸くおわる。	脚部内外面横なでし、底部内面板状具による表面調整施す。	色調 赤褐色 胎土 精良 焼成硬 残部 1/2 地区 第7ブロック
	146			(146)は内外面に刷毛目を施し、(147)は外面横なで、外面に弱い指圧痕あり。(148)は内外面なで仕上げで、外面に刷毛目施す。	色調 淡茶灰色 (146・147) 淡褐色(148)
	147				胎土 精良 焼成硬 残部 完存(146～148)
	148	底径 6.9 146. 6. 9 147. 6. 6 148. 5. 6	台付窓の脚台部であり、外下方にのび端部が方形状におわる(146)、内湾気味に外下方にのび端部は方形状におわる(147)、外下方にのび端部は丸くおわる(148)。		地区 第5ブロック(146) 第1ブロック(147) 第6ブロック(148)
高 环	149			(149)は内外面横なで、脚部外面に指圧痕あり、内面側落の痕跡がある。(150)は内外面なで仕上げで、外面に刷毛目板あり、脚部内面板毛目施す。(151)は内外面横なで仕上げで、外面窓状具による調整痕あり、内面側板状具による調整痕・刷毛目施す。(152)は内外面なで仕上げで外面に板状具による調整痕・内面刷毛目施す。(153)は内外面なで仕上げで、外面に刷毛目施し、指圧痕あり。	色調 黄褐色(149) 淡赤褐色(150) 淡茶灰色(151) 赤褐色(152) 灰褐色(153) 胎土 精良 焼成硬 残部 完存(149・152) 1/3(150・153) 1/2(151) 地区 第4ブロック(149) 第3ブロック (150・153) 第7ブロック (151・152)
	150	底径 8.2			
	151	5.4			
	152	7.4			
	153	5.5			
	154	口径 22.8	环底部より屈曲し、口縁部は外反気味に外上方にのび、口縁端部は丸くおわる(154)	口縁部内外面縱方向の荒磨き施す(154・155)。内外面横なでし、外面に波状の荒磨き施す(155)。	色調 淡赤褐色 (154～156) 胎土 精良 焼成硬 残部 1/6(154) 1/3(155) 1/10(156)
	155	22.0			
	156	20.2	方形状におわる(155・156)。		
	157	口径 25.4			
	158	21.0	环底部より屈曲し、口縁部は外上方に外反し、口縁端部は方形状におわる。(157～160)	内外面に縱方向の荒磨きを施し(157～159)、内面横方向の荒磨きを施す(158)。内外面横なでし、屈曲部外面に窓状具による刺突穴施す(160)。	色調 淡茶褐色 (157・160) 赤褐色(158・159) 胎土 精良 焼成硬 残部 1/7(157) 1/6(159) 1/10(158・160)
	159	21.8			
	160	22.0			
	161	口径 23.2 器高 13.8 底径 14.2	外反する口縁部で端部は方形状におわる。脚部は柱状部より屈曲して、端部端部は方	環部内外面横なでし、縱方向の荒磨きを施す。脚部外面縦方向の荒磨き、内面なで仕上。	色調 茶灰色 胎土 精良 焼成硬 残部 1/2

		形状におわる。	げする。円孔は4方にもつ。	地区 第5ブロック
162	口径 18 . 3 器高 14 . 2 底径 14 . 3	外反気味の口縁部で端部は方形状で、脚部は柱状部より屈曲して、裾部端部は方形状におわる。	坏部内外面縦方向の荒磨き施し、脚部外面縦方向の荒磨き、内面なで仕上げる。 円孔は三方にもつ。	色調 赤褐色 胎土 精良 焼成 硬 残部 ほぼ光沢 地区 第2ブロック
163	口径 20 . 8 器高 18 . 1 底径 15 . 6	外反する口縁部で脚部は方形状で、脚部は柱状部より屈曲して外下方にのび、裾部端部は方形状におわる。	坏部内外面縦方向の荒磨き施し、脚部中実で外面縦方向の荒磨き、内面なで仕上げする。 円孔は三方にもつ。	色調 淡赤褐色 胎土 精良 焼成 硬 残部 完形 地区 第2ブロック
164 ・ 165	口径 164. 25 . 8 165. 13 . 4	坏底部より外上方にのびる口縁部で、端部は尖り気味におわる。屈曲部外面に下方に突出する。	口縁部内外面横なで、縦方向の荒磨き施す。屈曲部外面に横状具による刺突列点文施す(164)。	色調 赤褐色 (164・165) 胎土 精良 焼成 硬 残部 1/10(164) 1/7(165) 地区 第1ブロック
166 ・ 169	底径 166. 14 . 0 167. 14 . 4 168. 15 . 4 169. 14 . 4	脚部であり、下方にのびる柱状部より屈曲気味に外下方に外反し、裾部端部は方形状におわる。(166～169)	(166・168・169)は外面縦方向の荒磨き、内面にしはり目・なで仕上げ・刷毛目施す。(167)は外面縦方向の荒磨き、内面しほり目・横なです。(166)は裾部端部に沈線を施す。円孔は三方にもつ(166～169)。	色調 淡茶橙色(166) 赤褐色 (167～169) 胎土 精良 焼成 硬 残部 1/3(166) 1/2(167～169) 地区 第2ブロック(166) 第1ブロック (167～169)
170	口径 14 . 2 器高 10 . 5 底径 10 . 1	外反気味の口縁部で端部は丸くおわり、脚部は外下方に外反し、裾部端部は方形状におわる。	坏部内外面横なで、縦方向の荒磨き施し、外面刷毛目痕あり、脚部内外面なで仕上げて、内面しほり目痕もつ。	色調 基灰色 胎土 精良 焼成 硬 残部 完形 地区 第2ブロック
171 ・ 173	口径 171. 15 . 0 172. 15 . 4 173. 19 . 6	内青気味に外上方にのびる縁端部内側に面をもつ(171)・(172)、丸くおわる(173)	(171・172)は内外面縦方向の荒磨き施し、(171)は口縁端部に横状具による直線文施す。(173)は外面縦方向の荒磨き、刷毛目痕あり。	色調 淡灰灰色 (171・173) 淡黄褐色(172) 胎土 精良 焼成 硬 残部 1/8(171) 1/6(172) 1/4(173) 地区 第2ブロック (171・173) 第2ブロック(172)
174	底径 14 . 0	脚部であり、内青気味に外下方にのび、脚端部は方形状におわる。	外面縦方向の荒磨き、内面上方にしほり目、下方に板状具による器面調整・横なでで刷毛目痕あり。	色調 赤褐色 胎土 精良 焼成 硬 残部 完存 地区 第2ブロック
175 ・ 177	底径 175. 12 . 0 176. 12 . 0 177. 19 . 0	内青気味に外下方にのびる脚部であり、脚部は方形状におわる。	(175～176)は外面縦方向の荒磨きで、内面刷毛目(175)、横なで(176)、板状具による器面整・刷毛目(177)施す。外面上に横状具による直線文・(176)は刺突列点文施す。円孔は不明。	色調 黄褐色 (175・176) 淡灰白色(177) 胎土 精良 焼成 硬 残部 1/8(175) 1/10(176) 1/7(177) 地区 第3ブロック (175～177)
178		柱状部より屈曲して、脚部は外下方にのび、端部は方形	外面縦方向の荒磨き、内面受部刷毛目、脚部なで仕上げ	色調 淡黄褐色 胎土 精良 焼成 硬

	底径 14 . 4	状におわる。	で半滑である。円孔は三方に もつ。	残部 1/4 地区 第2 ブロック
179	口径 10 . 0	内反気味に内上方にのびる 口縁部で、端部は方形状にお わる。	口縁部内外面横なでし、下 方刷毛目施す。	色調 淡灰茶色 胎土 精良 焼成 硬 残部 1/6 地区 第1 ブロック
180	底径 12 . 0	内高気味に外上方にのびる 体部、脚部は下方にのびる柱 状部に外反する端部をもち、 端部は丸くおわる。	外面縦方向の荒磨き、内面 体部なで仕上げ、脚部しづら 目残し、下方刷毛目・横なで する。円孔は四方にもつ。	色調 淡茶灰色 胎土 精良 焼成 硬 残部 ほは完存 地区 第3 ブロック
181 ・ 182	底径 181. 15 . 6 182. 12 . 6	脚部であり、外反しながら 外下方にのび、端部端部は方 形状におわる（181）・丸く おわる（182）。	（181・182）は外面縦方 向の荒磨き、内面（181）は 磨滅するが刷毛目痕あり、（ 182）はなで仕上げ、下方輕 削り施す。円孔は三方にもつ （182）。	色調 赤褐色（181） 茶灰色（182） 胎土 精良 焼成 硬 残部 1/3（181） 1/4（182） 地区 第5 ブロック（181） 第2 ブロック（182）
183	底径 13 . 2	脚部であり、外下方に外反 気味にのび、脚端部は方形状 におわる。	外面縦方向の荒磨き、内面 端部刷毛目施し、脚部なで仕 上げで刷毛目痕あり。円孔は 四方にもつ。	色調 赤褐色 胎土 精良 焼成 硬 残部 光仔 地区 第1 ブロック
184	底径 7 . 7	脚部であり、外下方に外反 しながらのび、脚端部は丸く おわる。	外面縦方向の荒磨き施し、 刷毛目痕あり、内面しづら目 を残し、下方なで仕上げを施 す。	色調 灰白色 胎土 精良 焼成 硬 残部 完存 地区 第4 ブロック
器 合	口径 20 . 2 器高 14 . 0 底径 18 . 8	受部は直線的にのび、口縁 部を垂下し、端部は丸くおわ る。脚部は外反し、脚端部上 端をつまみ上げる。	内外面縦・横方向の荒磨き 施し、内面なで仕上げ。刷毛 目施す。円孔は三方にもつ。	色調 灰白色 胎土 精良 焼成 硬 残部 1/2 地区 第2 ブロック
	口径 17 . 6 器高 11 . 1 底径 15 . 6	受部は外反し、口縁部を垂 下し、端部は方形状におわる。 脚部は外反気味にのび、脚端 部は丸くおわる。	内外面なで仕上げ、縦方向 の荒磨き、内面刷毛目痕。口 縫部に円形浮文、脚部外面に 沈線を施す。円孔は三方。	色調 赤褐色 胎土 精良 焼成 硬 残部 1/2 地区 第2 ブロック
187 ・ 188. 18 . 6 188. 15 . 4 189. 20 . 8 190. 19 . 8 191. 19 . 4 192. 20 . 0	外反気味に外上方にのびる (187・188)、直線的にの び(189~192)、口縁部を 垂下し、端部を方形状におわ る(187・191・192)、丸く おわる(188~190)。	内外面横なで・縦方向の荒 磨きを施し、外曲刷毛目痕(1 90)あり。外面に櫛状具に よる直線文施す(188・189 ・191・192)、竹管文もつ 円形浮文を施す(187・189 ・190・192)、竹管文を施 す(188)がある。	色調 茶灰色（187） 淡黄褐色（188） 黃褐色（189） 淡褐色（190） 淡灰茶色（191） 茶褐色（192） 胎土 精良 焼成 硬 残部 1/6 (187) 1/8 (188) 1/20 (189) 1/4 (190) 1/10 (191・192) 地区 第9 ブロック (187) 第4 ブロック (188・192) 第7 ブロック (189・191) 第6 ブロック (190)	
193	口径 18 . 0	外上方にのびる口縁部をも ち、端部を上・下方に突出し	内外面横なでし、内面に縦 方向の荒磨き施す。	色調 淡赤褐色 胎土 精良 焼成 硬

		丸くおわる。	外面上に竹管文施す。	残部 1/10 地区 第5ブロック
194	口径 17.0	外上方にのびる口縁部をもち、端部は方形状におわる。	外面上刷毛目・内面横なでする。外面上擬削線、内面に棒状具による波状文施す。外面に棒状浮文もつ。	色調 茶灰色 胎土 精良 焼成 硬 残部 1/10 地区 第6ブロック
195	口径 19.0	外上方にのびる口縁部をもち、端部は垂下し尖り気味におわる。	内外面横なで、縱方向の荒磨きで、外面上刷毛目似あり。外面上に棒状具による波状文・3個一組の棒状浮文施す。	色調 赤褐色 胎土 精良 焼成 硬 残部 1/8 地区 第8ブロック
196	口径 17.8	受部は外上方にのび、口縁端部は上・下方に突出する。脚部柱状部は下方にのびる。	内外面横なで、縱方向の荒磨き、柱状部内面なで仕上げする。口縁部外面部刷毛目による直線文施す。円孔は三方。	色調 赤褐色 胎土 精良 焼成 硬 残部 1/2 地区 第1ブロック
197	・ 底径 197. 16. 5 198. 16. 4	柱状部より裾部は外反しながら下方にのび、裾部端部は方形状におわる。	(197)は内外面刷毛目・縱方向の荒磨き、内面しづり目・なで仕上げする。(198)は内外面纵方向の荒磨き、脚部内面なで仕上げする。円孔は三方にもつ。	色調 淡赤褐色 胎土 淡茶灰色 残部 2/3 (197・198) 地区 第3ブロック (197) 第2ブロック (198)
199	底径 14.4	外上方にのびる受部で、脚部は外下方に外反しながらのび、裾部端部は方形状におわる。	内外面縱・横方向の荒磨き施し、内面なで仕上げし刷毛目似もつ。	色調 茶灰色 胎土 精良 焼成 硬 残部 1/2 地区 第1ブロック
200	口径 17.0 器高 12.7 底径 13.8	外上方にのびる受部で、口縁部上・下端を突出する。脚部は外下方にのび、端部は方形状におわる。	内外面・縱方向の荒磨き施し、脚部内面なで仕上げ・横なでする。脚部外面上に棒状文施す。円孔は四方にもつ。	色調 淡黄灰色 胎土 精良 焼成 硬 残部 1/2 地区 第2ブロック
201	口径 16.3 器高 16.6 底径 15.6	受部は外上方にのび、端部は方形状におわる。脚部は外下方にのび端部は方形状におわる。	内外面縱方向の荒磨きで、内面なで仕上げ・刷毛目施す。円孔は三方にもつ。	色調 淡赤褐色 胎土 精良 焼成 硬 残部 2/3 地区 第3ブロック
202	口径 16.6	外上方にのびる受部で、口縁部を外方に垂下し、端部は方形状におわる。	内外面横なで・縱方向の荒磨き施す。口縫部外面部擬削線施す。内面にスヌの付着痕あり。	色調 淡黄灰色 胎土 精良 焼成 硬 残部 1/5 地区 第4ブロック
203	口径 21.2	外上方にのびる受部で、口縁端部が上・下方にのびて、端部は丸くおわる。	内外面横なで、縱方向の荒磨き施す。口縫部外面上に擬削線施す。	色調 淡灰褐色 胎土 精良 焼成 硬 残部 1/5 地区 第7ブロック
204	口径 204. 9. 0 205. 8. 4	浅い受部で、内窓気味に外上方にのび、端部は丸くおわる(204)、方形状におわる(205)。	(204)は内外面横なでを施し、外面に棒状具による直線文を施す。(205)は内外面横を施す。	色調 淡黄褐色 (204・205) 胎土 精良 焼成 硬 残部 完存 (204) 1/4 (205) 地区 第6ブロック (204・205)
206	口径 206. 9. 4 207. 10. 8	内窓気味で外上方にのびる受部をもち、端部は丸くおわる(206)。脚部は内窓気味に外下方にのび、端部は方形状におわる。(207)	(206)は内外面横なでする。(207)は内外面縱方向の荒磨きし、脚部内面なで仕上げ・板状具による器面調整・刷毛目施す。円孔は三方にもつ(206・207)。	色調 赤褐色 (206) 淡褐灰色 (207) 胎土 精良 焼成 硬 残部 2/3 (206) 完存 (207) 地区 第3ブロック (206)

					第2ブロック(207)
蓋	208	口径 5.5 器高 1.5	内窓気味に外上方にのびる受部で、端部は丸くおわる。	内外面横なでし、脚部内面に刷毛目施す。	色調 淡赤褐色 胎土 精良 燃成 硬 残部 完存 地区 第1ブロック
	209	口径 6.1 器高 1.5	低い円錐状をなし、中央に摘みをもつ。	手捏ね様であり、内外面なで仕上げ・指圧痕あり。 2個一組の円孔を二方にもつ。	色調 赤橙色 胎土 精良 燃成 硬 残部 ほぼ完形 地区 第2ブロック
	210 211		上部の摘みの部分で、天井部は平坦であり、外下方にのびる。	(210)は内外面なで仕上げする。(211)は上部なで仕上げし、外面刷毛目、内面なで仕上げ。刷毛目施す。	色調 淡赤褐色(210) 淡黄褐色(211) 胎土 精良 燃成 硬 残部 完存(210・211) 地区 第3ブロック (210・211)
ミニチュア	212	口径 3.6 器高 5.4 底径 2.2	頸部よりくの字状に上方にのび、口縁端部は丸くおわる。体部は細長く、平底の底部をもつ。	手捏ねで仕上げ、外面に刷毛目痕もつ。口縁部に円孔を2カ所もつ。	色調 赤褐色 胎土 精良 燃成 硬 残部 完形 地区 第2ブロック
	213	口径 5.2	頸部よりくの字状に外反し、口縁端部は丸味をもっておわる。体部は細長く下方にのびる。	手捏ねで仕上げ、体部外面刷毛目施す。体部外面に横状具による直線文・刺突列点文施す。	色調 淡赤褐色 胎土 精良 燃成 硬 残部 1/2 地区 第8ブロック
	214	口径 4.8 器高 3.6 底径 3.4	平底の底部より、内窓気味に上方にのび、口縁端部に面をもたせておわる。	手捏ねで仕上げ、体部外面縱方向の荒磨き施す。	色調 淡茶灰色 胎土 精良 燃成 硬 残部 1/2 地区 第8ブロック
	215 216 217	底径 215. 1. 9 216. 3. 4 217. 4. 2	平底の底部より、内窓気味に外上方にのびる(215)、上方にのびる(216・217)がある。	手捏ねで仕上げ、内外面平滑である(215~217)。	色調 淡赤褐色(215) 淡黄灰色(216) 茶灰色(217) 胎土 精良 燃成 硬 残部 完存(215~217) 地区 第9ブロック(215) 第4ブロック(216) 第8ブロック(217)

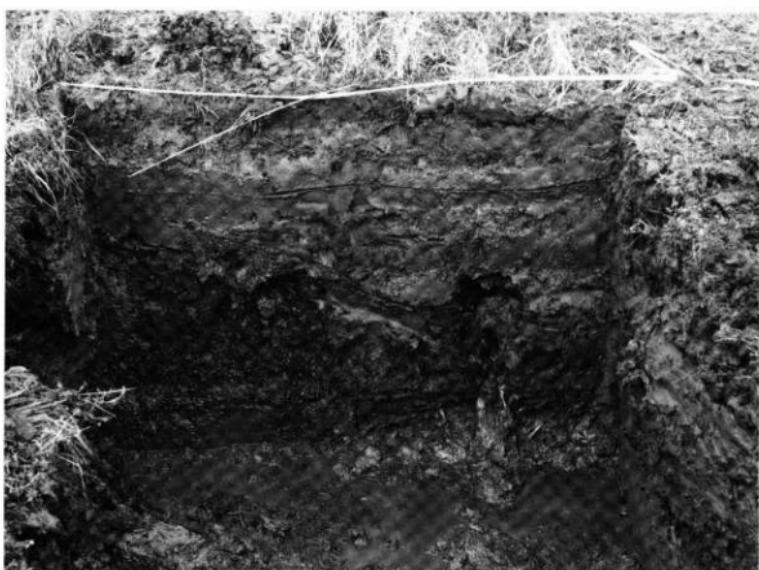
# 図 版



遺跡全景（北東より）



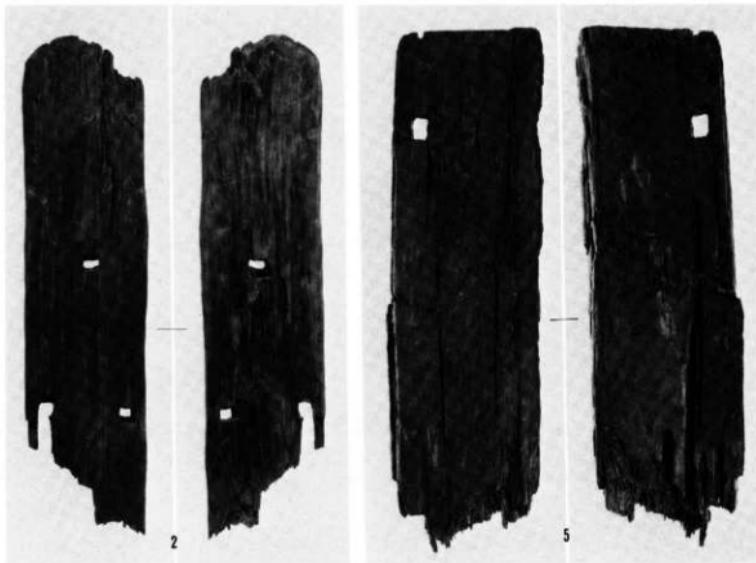
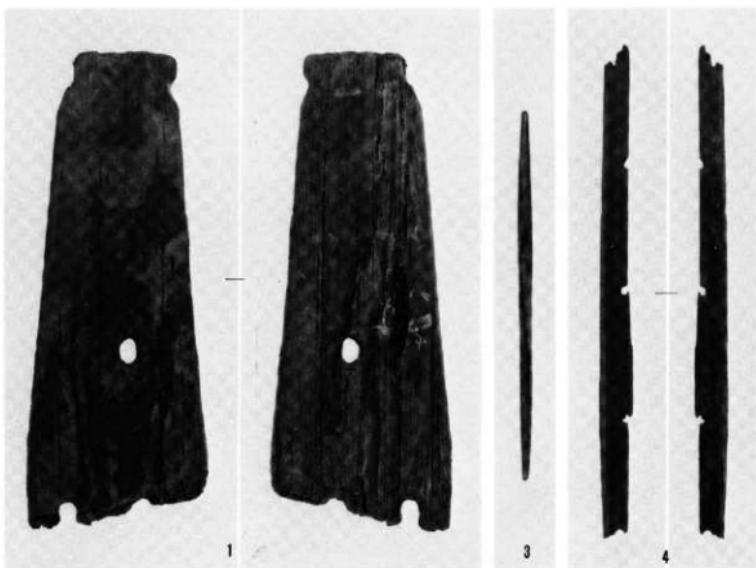
遺跡全景（北東より海津を望む）



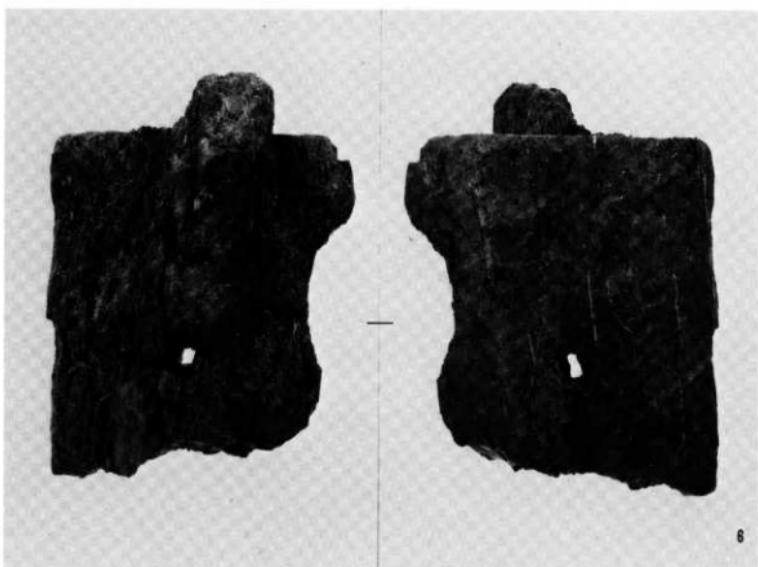
C トレンチ南壁面



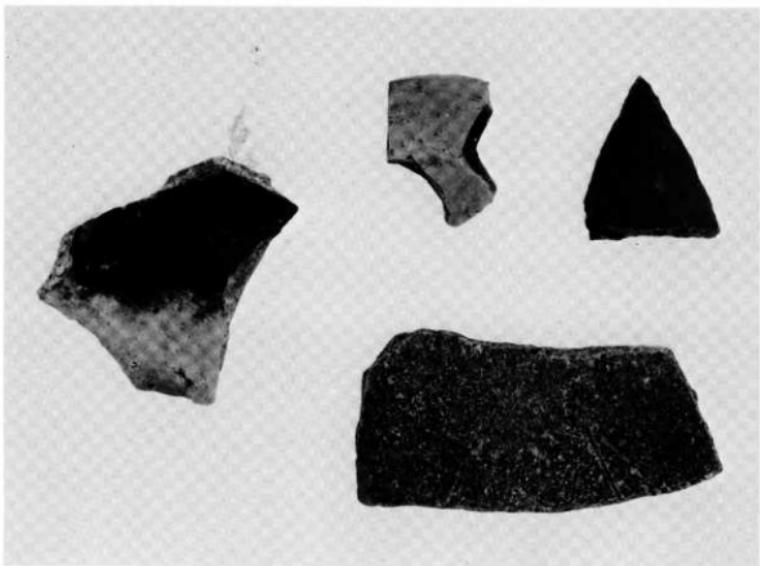
トレンチ樹木出土状況



出土木製品（1～5）



出土木製品



出土土器

図版五 マキノ町上開田遺跡



遺跡全景（北より）



第20トレンチ調査状況



第16トレンチ全景（西より）



第41トレンチ・焼土塗（南西より）

図版七 マキノ町上開田遺跡

第21トレンチ全景（東より）





第21トレンチ・土坑2～4（北より）



第21トレンチ・土坑1（北東より）



第40 トレンチ全景（西より）



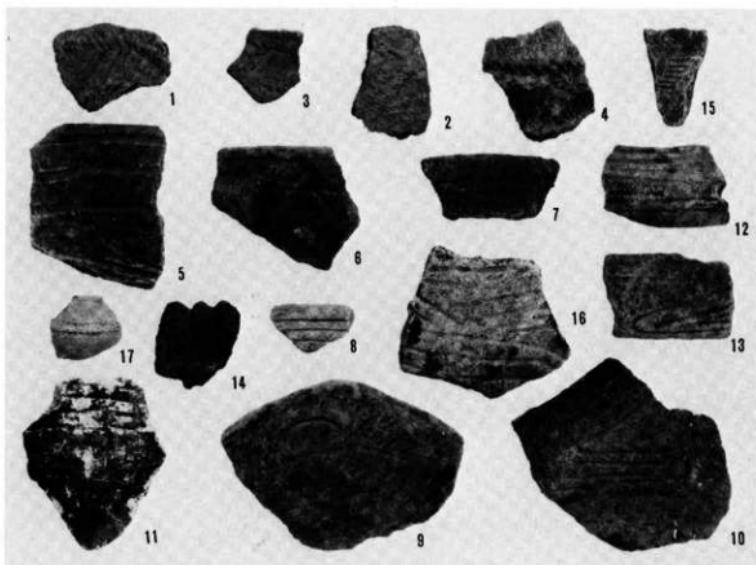
第21 トレンチ南東部全景（東より）



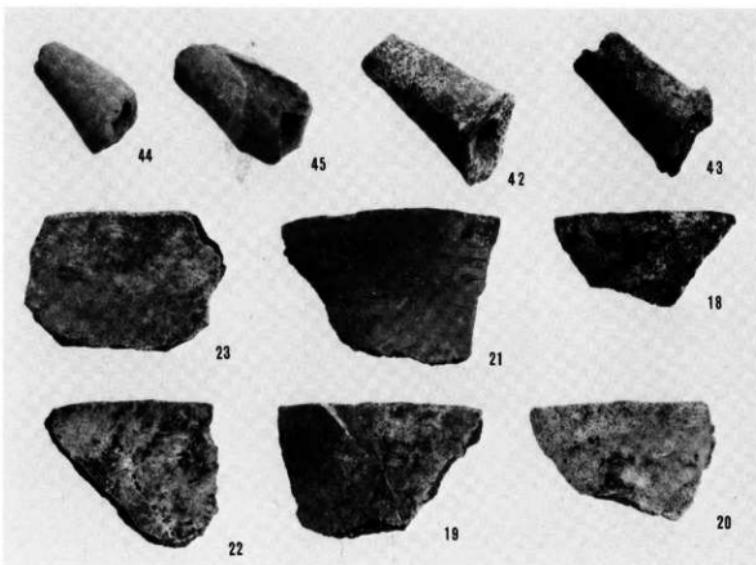
第20トレンチ下層堆積状況



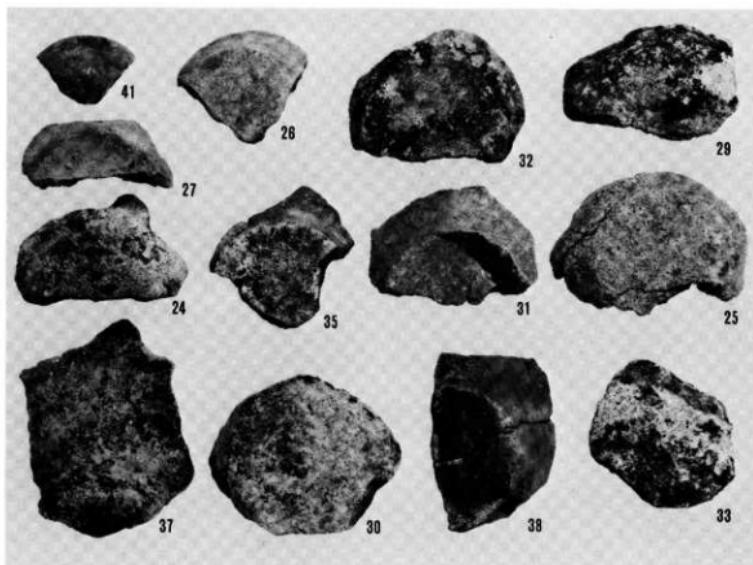
(左) 第20トレンチ打製石斧出土状況  
(右) 第20トレンチ縄文式土器出土状況



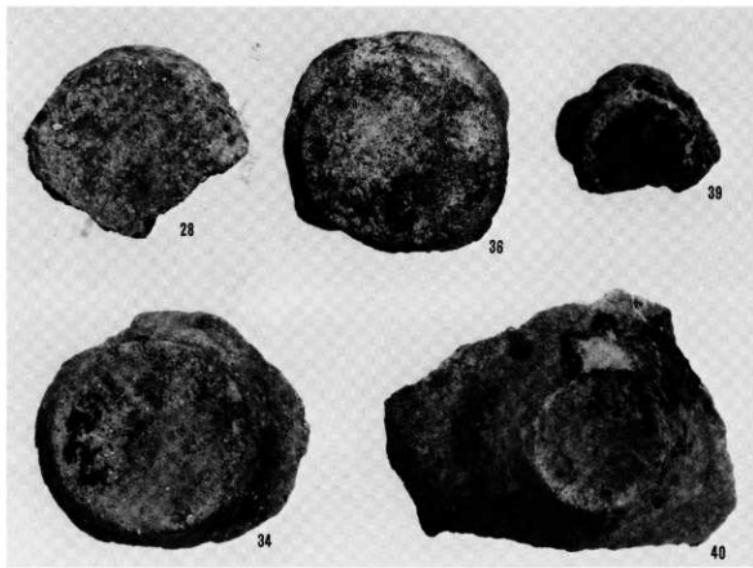
1. 第20トレンチ出土・縄文式土器



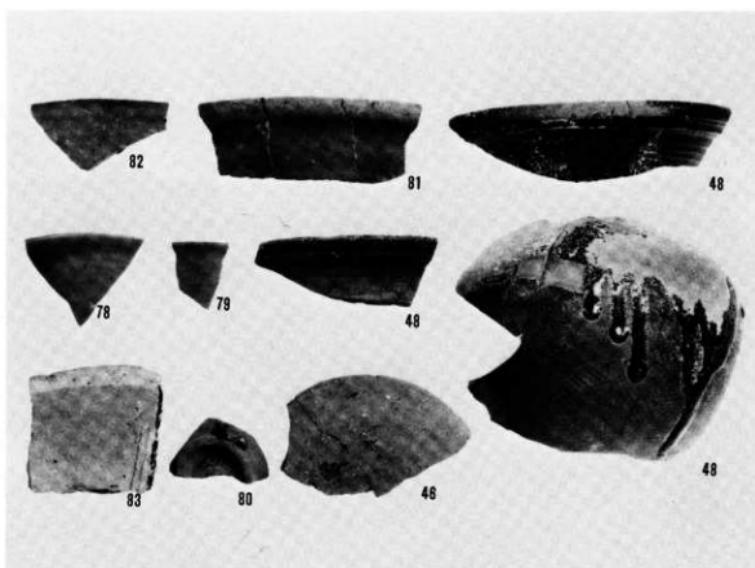
2. 第20トレンチ出土・縄文式土器



3. 第20トレンチ出土・縄文式土器



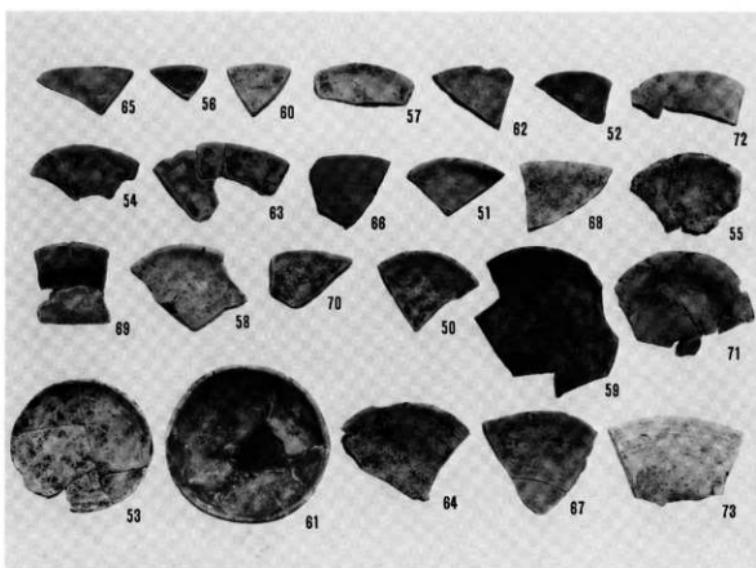
4. 第20トレンチ出土・縄文式土器



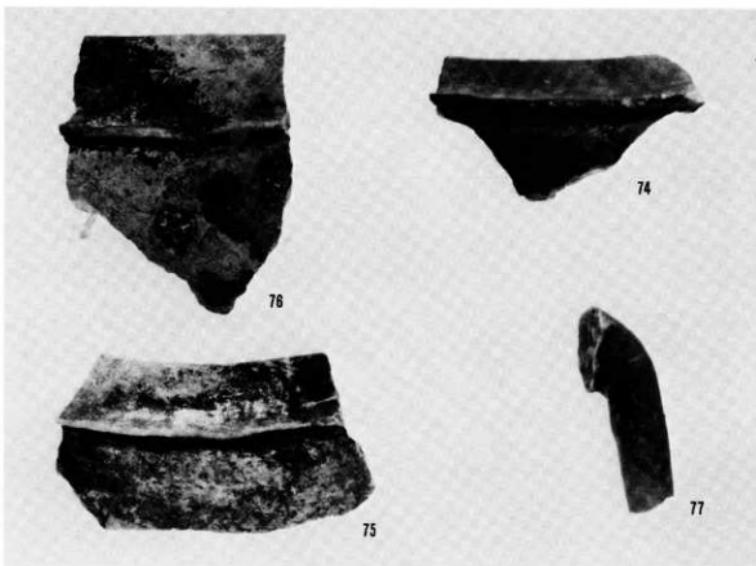
須恵器・磁器・陶器



土塹出土・須恵器



土師質土器・皿



瓦質土器・土師質土器・羽釜



南牧野遺跡全景（北より）



Gトレンチ全景（西より）



J トレンチ全景（北より）



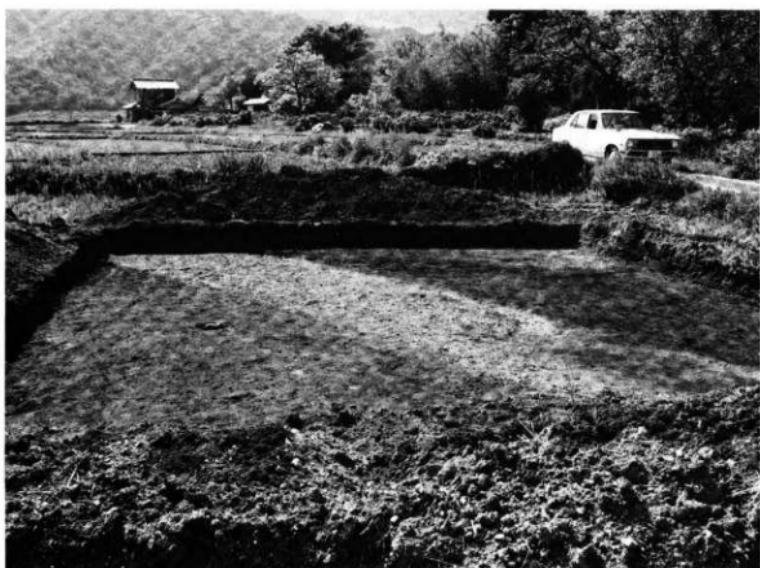
J トレンチ・SK 3（東より）



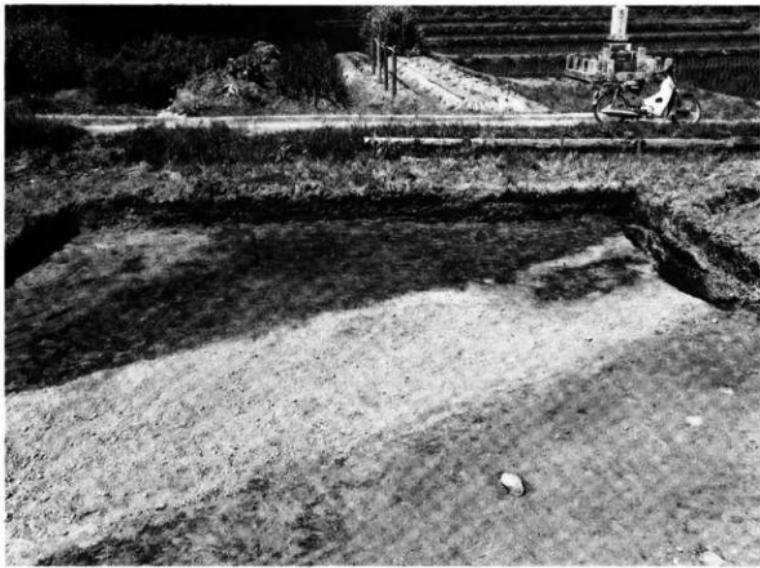
Hトレンチ上層全景（南より）



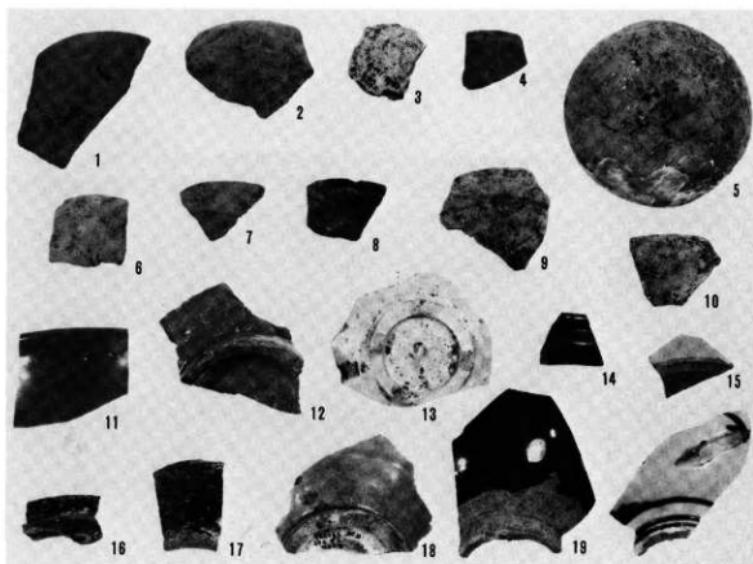
Hトレンチ下層全景（北より）



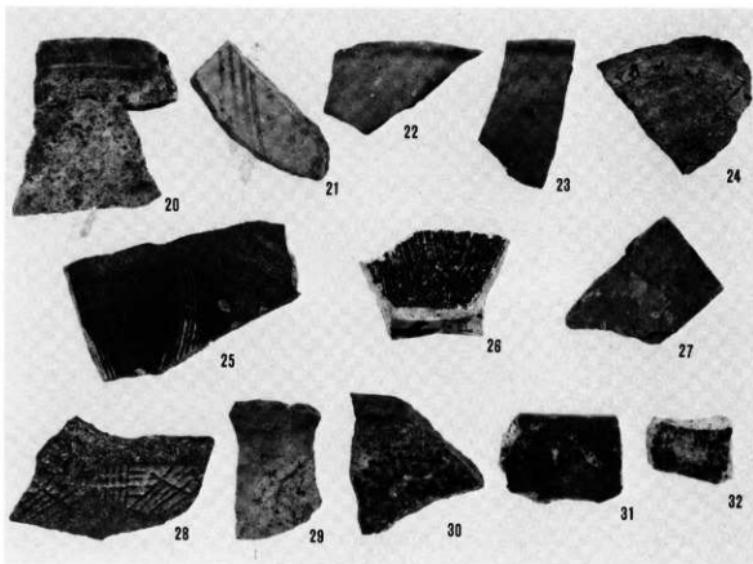
いトレーンチ自然流路検出状況（東より）



同上（南より）



1. 土師質土器・陶磁器



2. 陶器・瓦質土器



岸脇遺跡より箱館山を望む（調査前）



湿気抜き（第30トレンチ）



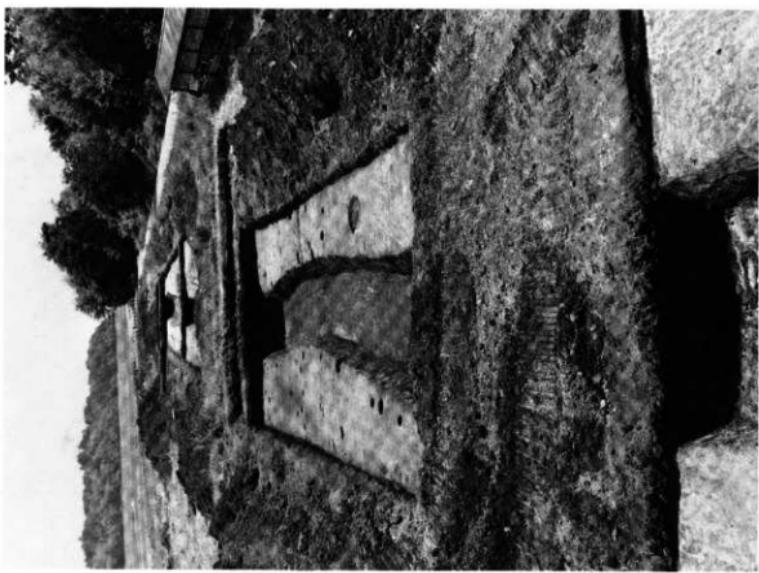
首塚（調査前）



第29・19トレンチ全景（東より）



第19・15トレンチ全景（東より）



第1次調査・溝状造構検出状況（西より）



同上（東より）



第Ⅱ次調査・溝状遺構後出状況（西より）



同上（東より）



第17トレンチ土坑・石検出状況（西より）



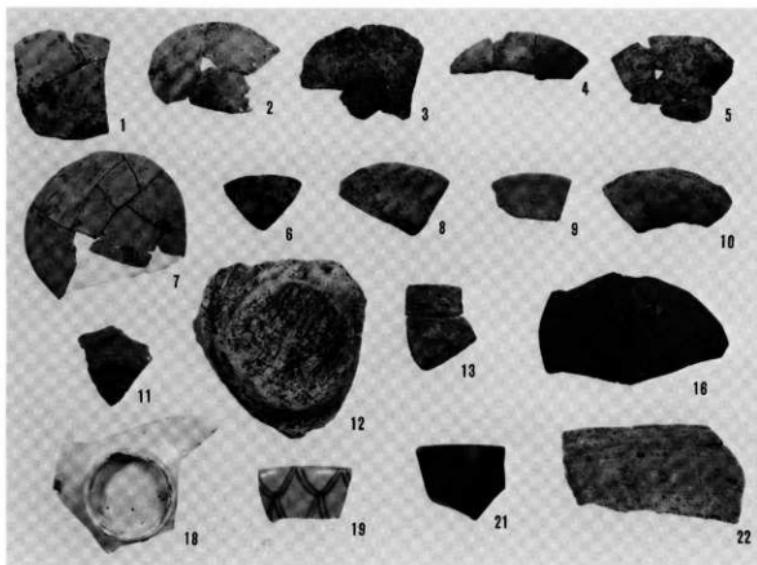
第17トレンチ土坑・調査終了後の状況（西より）



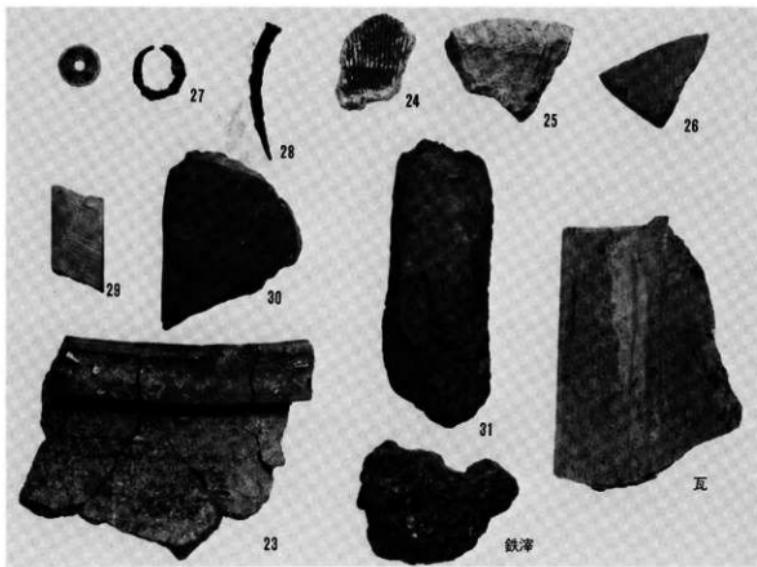
首塚・表土除去後の状況（東より）



首塚・調査終了後の状況（東より）



1. 出土土器



2. 出土土器、その他



須恵器（15・17）、土師器（14）、青磁（20）



首塚出土五輪塔残欠



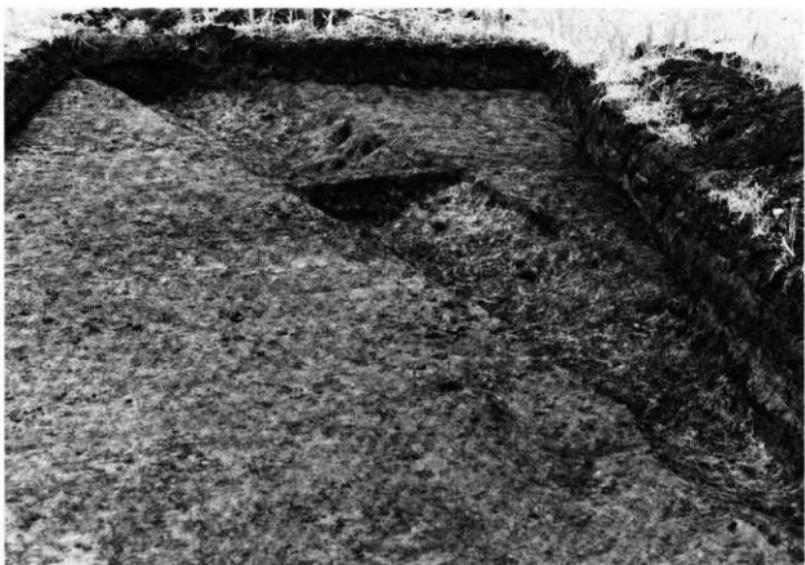
1. 第5-1試掘址調査状況 山裾右端の森は弓削八幡宮、背後の集落は梅原



2. 第28試掘址



1. 第28試掘址、海津大崎、竹生島を望む



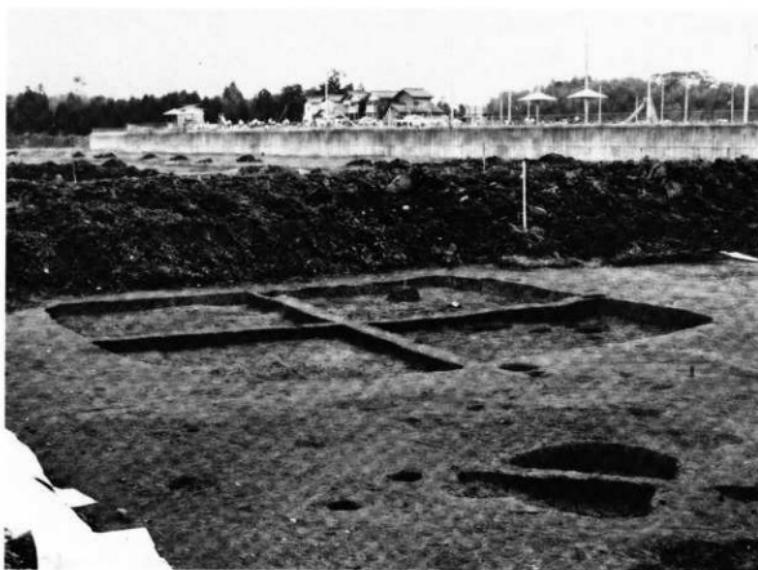
2. 第5試掘址 溝検出状況



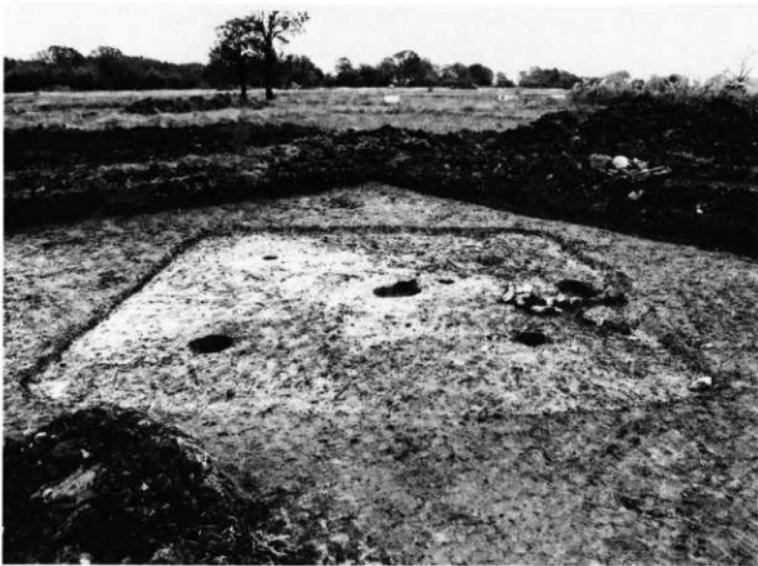
調査地区遠景（東より）



竪穴住居 1~3



竪穴住居4



竪穴住居5



第6トレンチ全景（西より）



第12トレンチ掘立柱建物1・2（東より）



調査地区遠景（北より）



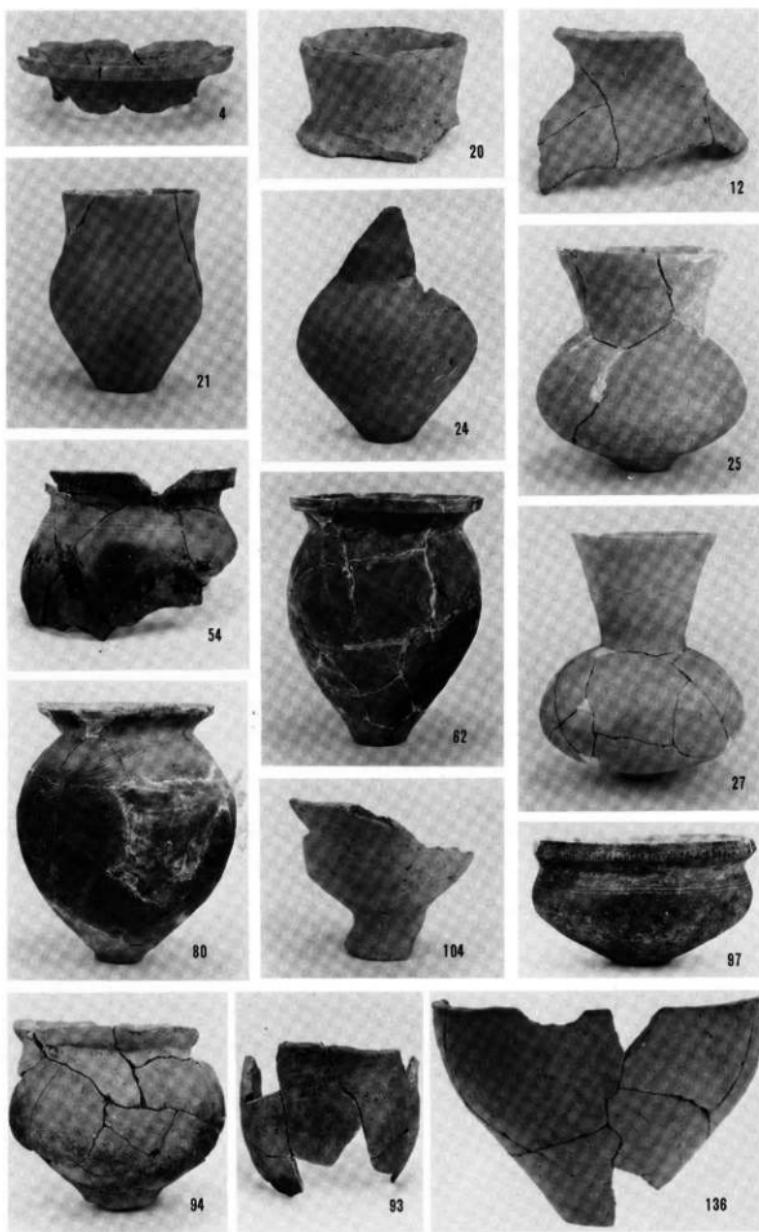
第1トレンチ 第2ブロック（南より）



第2 ブロック土層堆積状況



第2 ブロック土器出土状況





182



163



170



155



173



161



174



168



166



167



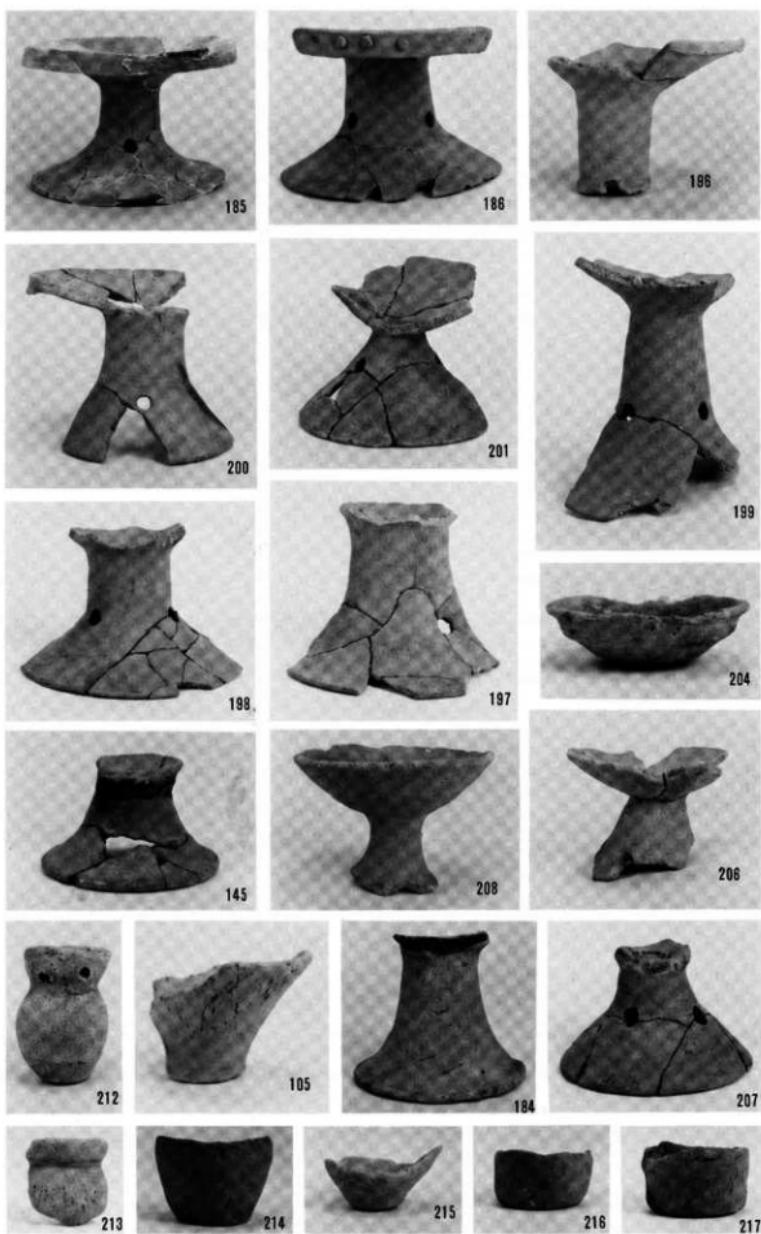
169

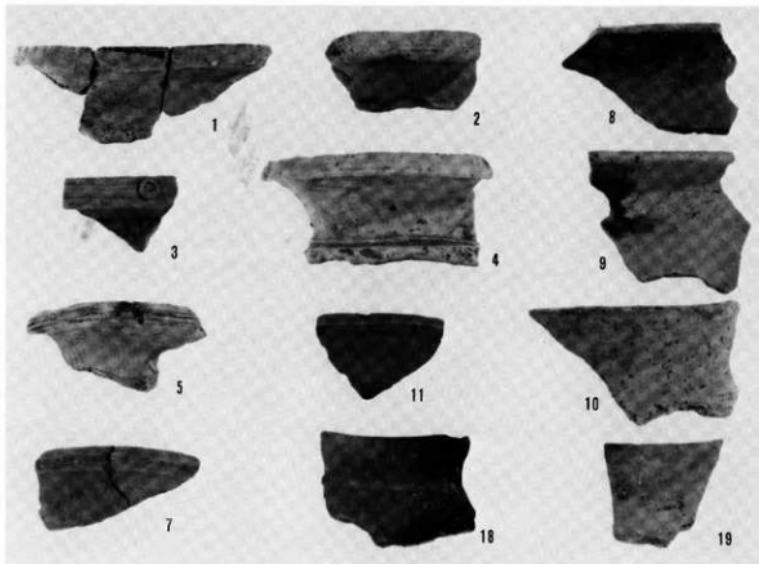
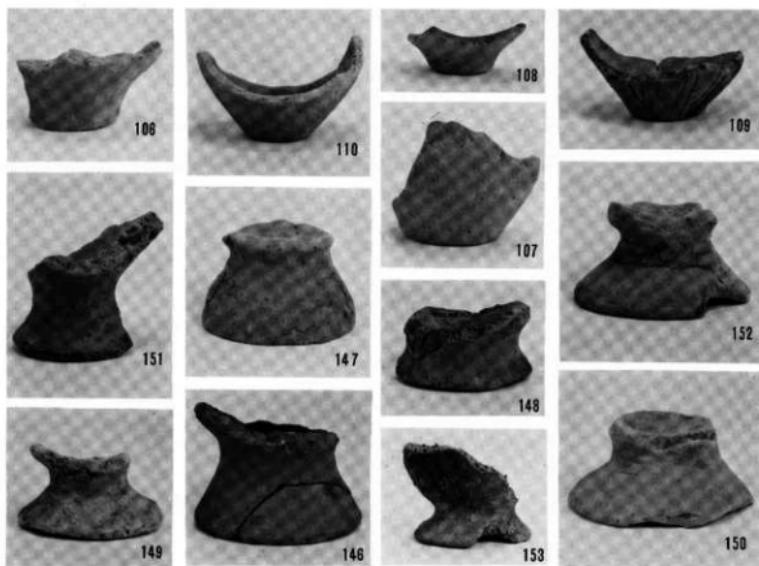


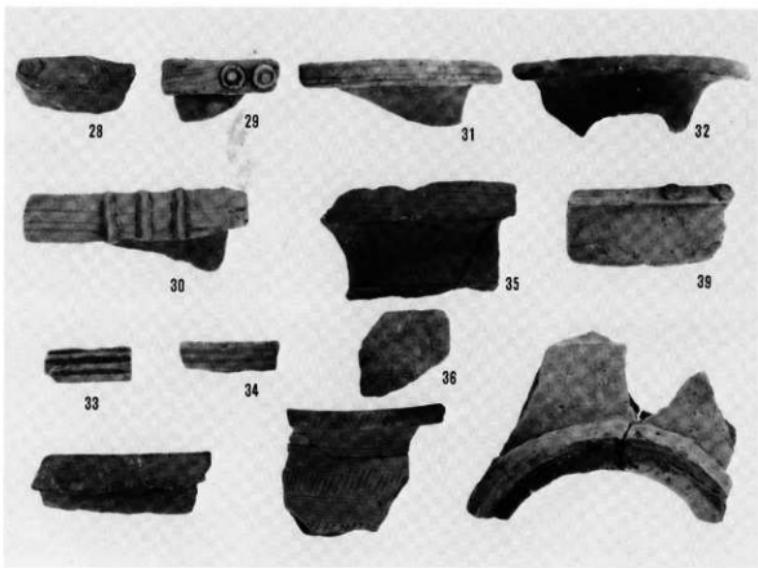
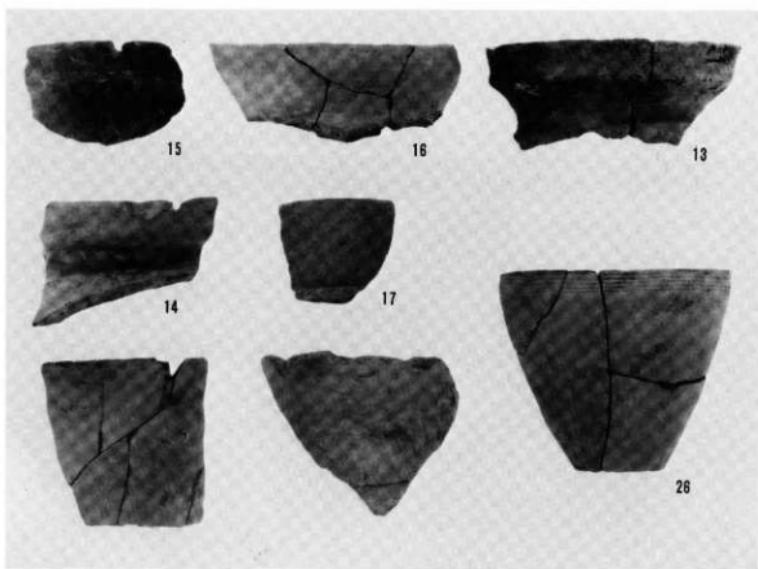
180

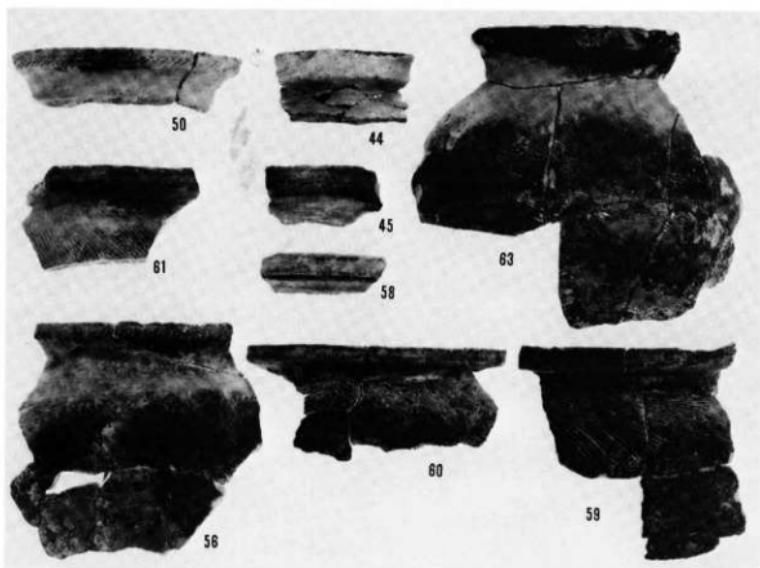
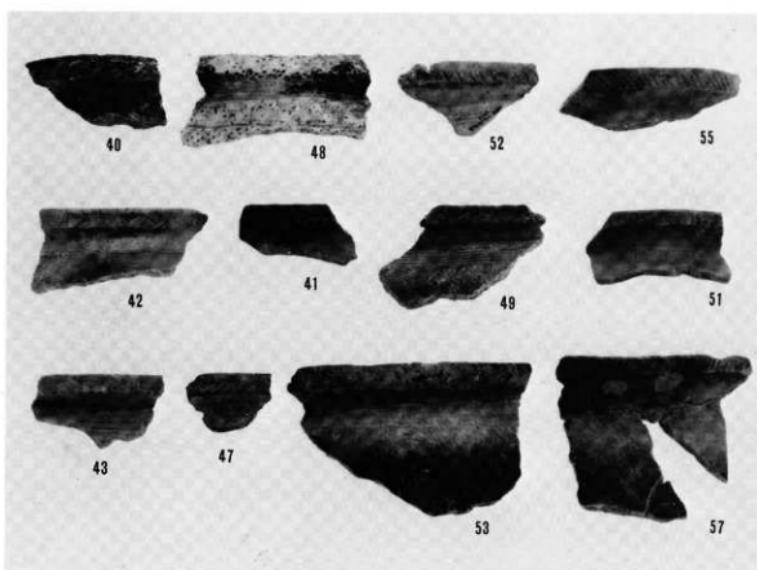


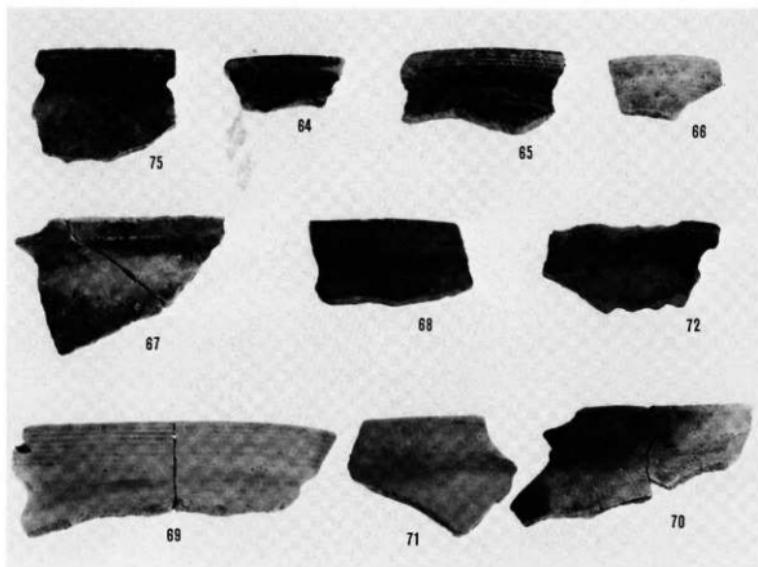
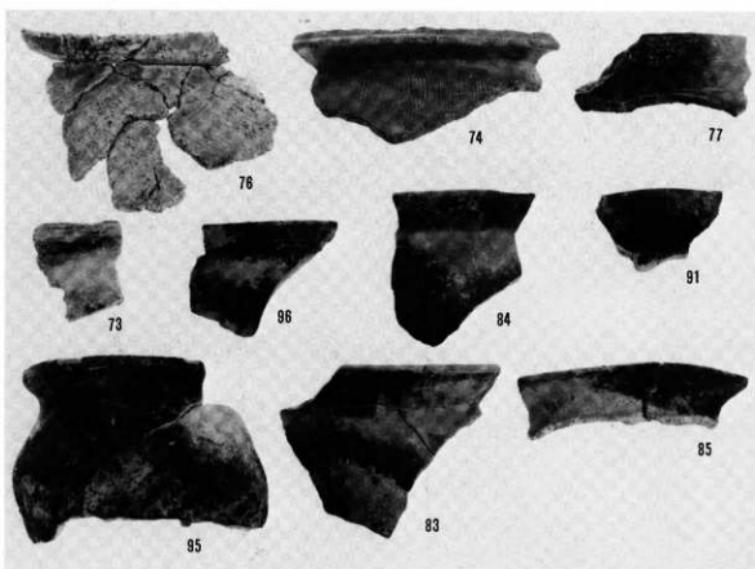
183

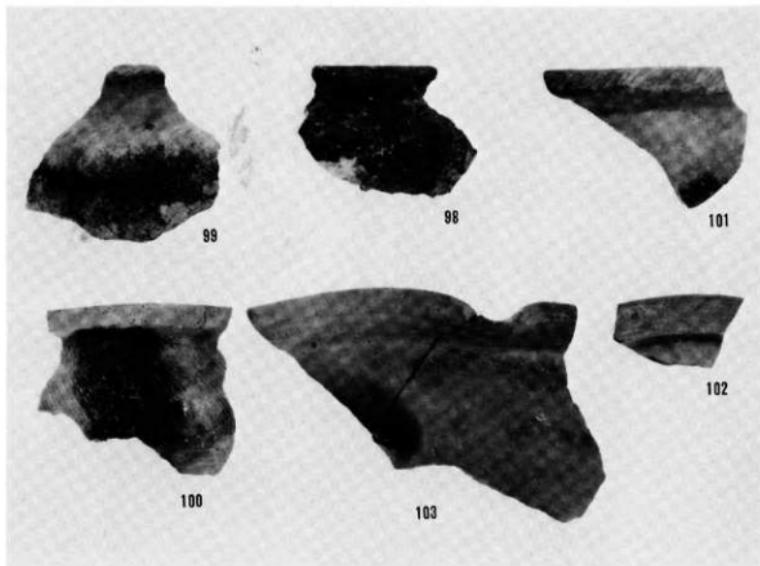
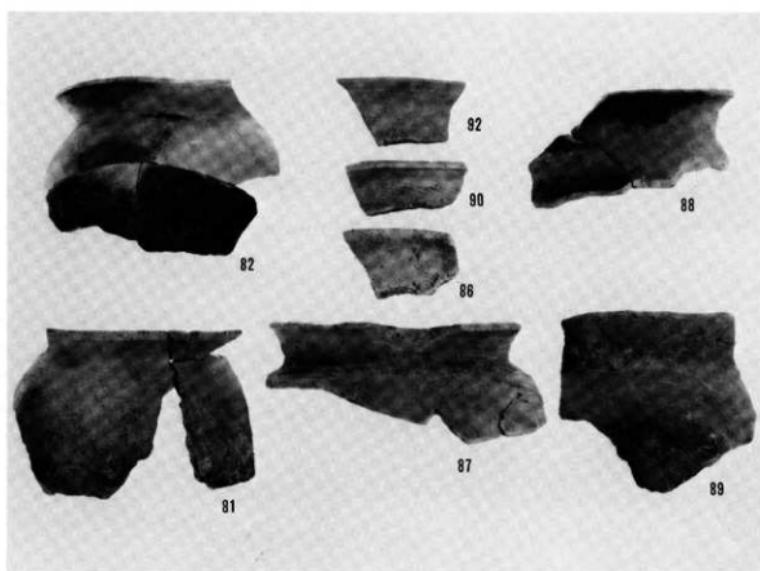


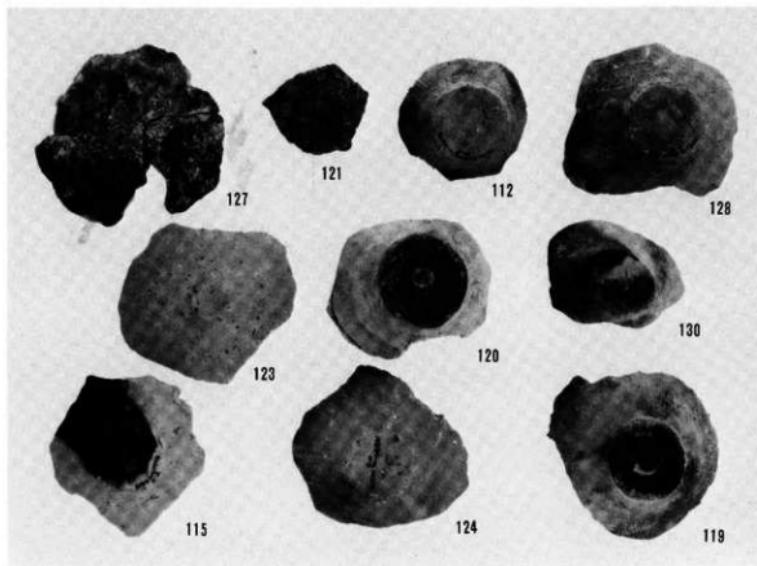
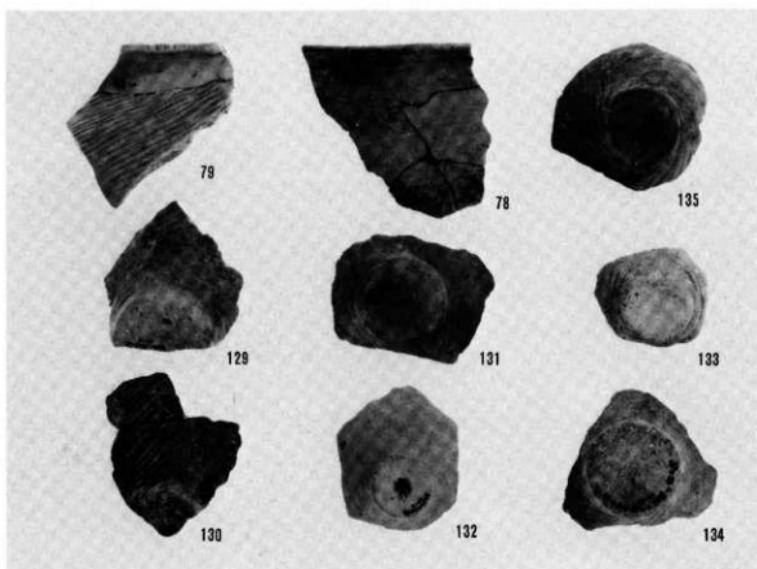


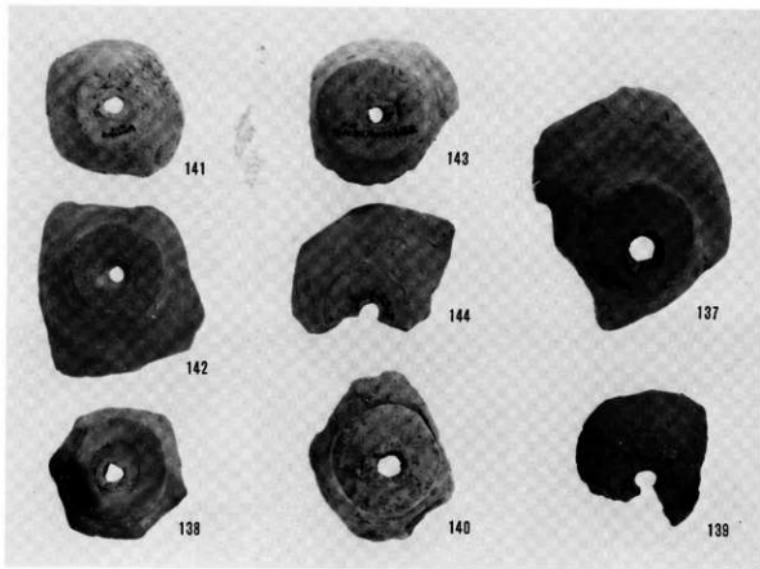
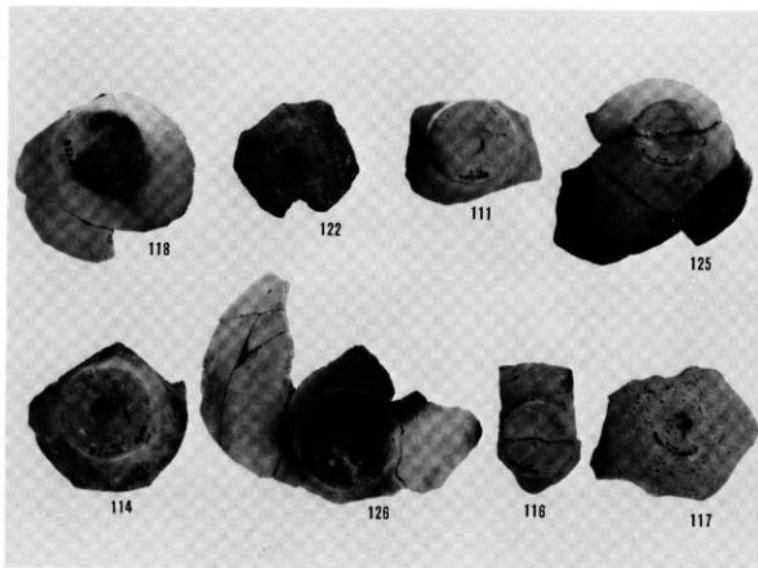


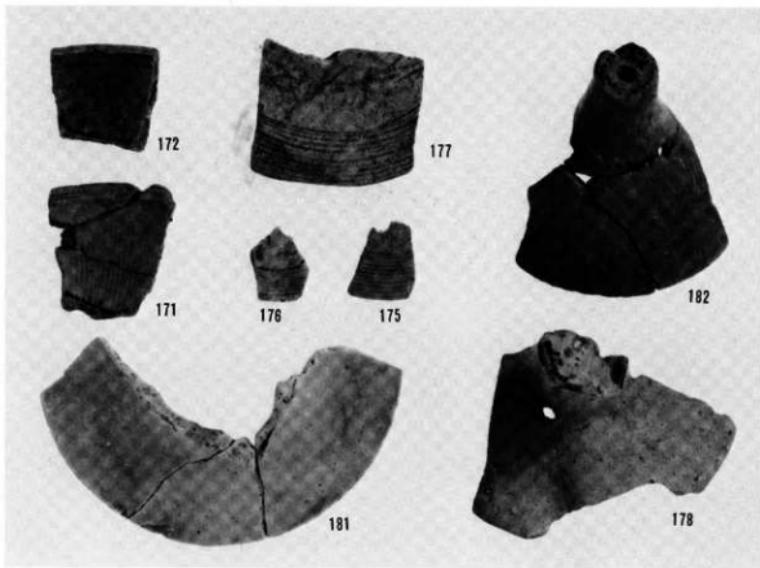
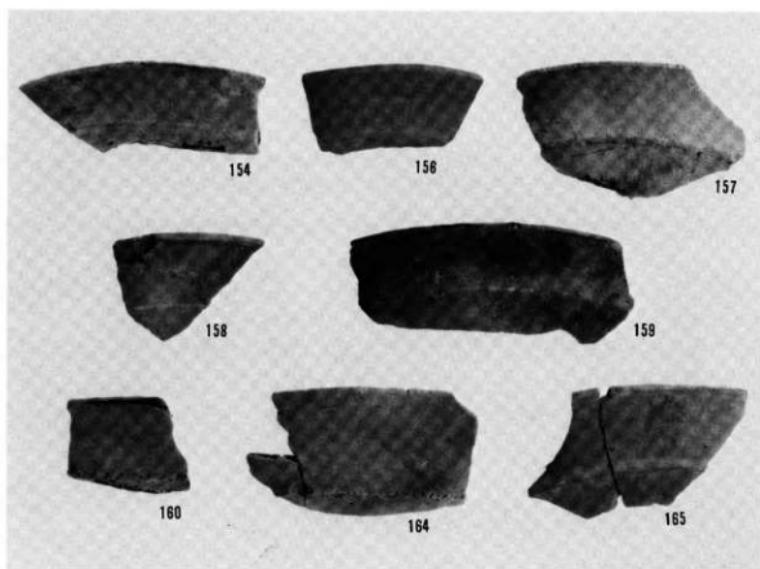


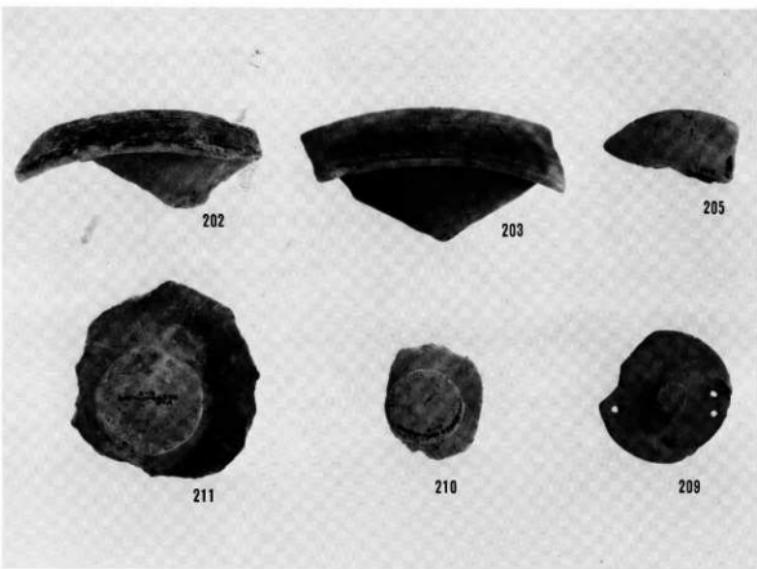
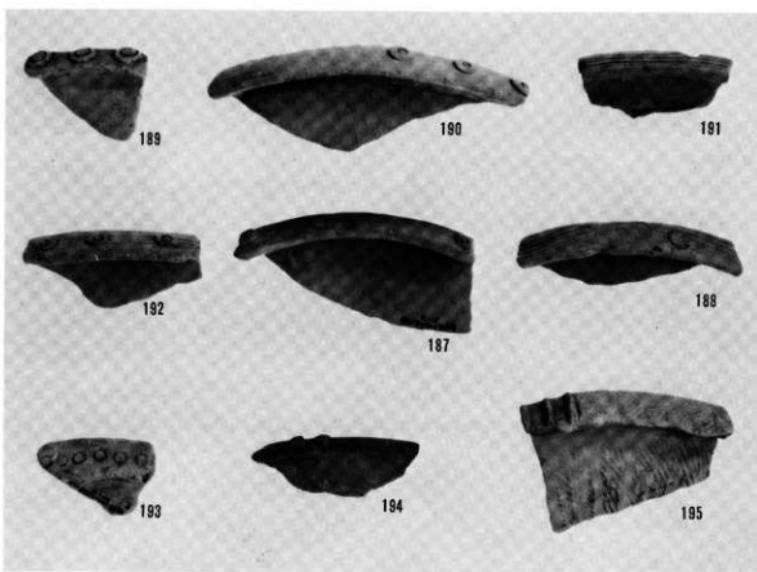












昭和55年3月

ほ場整備関係遺跡発掘調査報告VII-I

編集 滋賀県教育委員会

発行 滋賀県教育委員会

財団法人 滋賀県文化財保護協会

印刷 富士出版印刷株式会社

大津市札の辻4番20号

TEL(0775)23-2580